

り、木賀を過ぎ、底倉に至りて投宿す。疲の半は、靈泉になほりぬ。晩食終へて、一堂に會し、思ひくの隠し藝を演じて、夜の更くるを知らず。

### 三 碁盤平の眺望

雨かとき、て、曉夢さむれば、溪聲也。この日も天氣よし。今宵のやどは、塔の澤也。一群を成すといふ規約の下に、自由行動を執ることを許し、に、昨日の山越しに、よわりけむ、半數は、どこへも廻はらず、順路凡そ一里半を塔の澤へ下らむとす。他の弱らぬ一群は、蘆の湯を経て、蘆の湖に出で、そこより東海道を下らむとす。なほ一層脚つよき一群は、蘆の湖よりわかれ、湖畔に沿ひ、箱根の主峯をめぐり、大地獄を見て、再びこの底倉を経て下らむとす。余は、別に兒と野中生とをつれて、直に大地獄さしてゆく。木賀を過ぎ、早川の流をあとにして、左に坂路を數町のぼれば、路漸次に高まるのみにて、さまで急ならず。このあたり、冠ヶ嶽の裾野なるが、雜木生ひたり。路ますく冠ヶ嶽に近づいて、強羅温泉に達す。温泉宿は、粗末なものが一つあるのみ。傾斜なる裾野をへだて、明神、明星の連峯を望む。なほ裾野を過ぎて、溪谷に出で

て、それを溯れば、白煙起り、硫氣にほひ來て、終に大地獄に達す。當年噴火の餘勢、未だ全く滅せずして、處々に硫氣を吐く。さばかりの壯觀は無けれど、關東にては、一風かはれる景致也。閻魔臺までは行かずして、歸路に就く。黒もじの木多し。伐りて杖とす。香氣迸りて快し。なほ歸りて、楊枝をつくらむとて、數多く伐り、一束にして、野中にかつがしむ。強羅温泉宿の傍の茅店に就いて携へし辨當を食ふ。酒をもとむれば、うれしや、ビール瓶ひとつ残り居りたり。濁りかけて、少し酸味あれど、なほ無きにはまされり。これに微醉を催して、來時の路を下り、碁盤平につきて、下り坂にとりか、らむとする處に來りて、忽ち驚喜す。嗚呼何たる佳景ぞや。底倉、宮ノ下の瓦鱗、近く脚下に在り。見渡すかぎりの植林、總て黄葉す。左には、明星の連峯、南に走り、右には神山巍然として聳え、それにつらなれる一帶の連峯、明星の連峯と東西相並んで南に走り、相合せむとして合せず。この二連峯は近くして濃く、その彼方には、なほ遠くして淡き連山いくへにも並び、東西南三面の眺望よく、其上にも、眼界の半は、黄葉の美を以て充たさる。こゝは、箱根山中、最も眺望の面白き處の一也。殊に箱根の黄葉の大觀は、こゝに過ぎたる處はあらざるべし。かゝる佳景を、ゆく時にそれと氣づかざりしは、われながら迂濶なる哉。

前方のみを見ては、往々佳景を逸す。人は、ふりかへりつ、進まざるべからず。世人、碓氷、日光、鹽原の紅葉の美を説いて、箱根の紅葉の美を説かず。されど、箱根は、紅葉の美観を極はむ。さびあり。滋味あり。禪味あり。俗眼には奇ならざれども、自然の眞趣を解する者は、必ずや、紅葉の美よりは、黄葉の美に、多くの趣味を有するに至るべし。而して黄葉の大觀は、箱根山に在り。箱根山の中にも、この木賀より程ちかき碁盤平に在り。日光や碓氷の秋を賞する人にす、む。請ふ、卿等の眼識を進めて、來つて箱根の黄葉を觀よ。思ひ／＼にわかれゆきし人々も、薄暮、ひとしく塔の澤の温泉宿におちあひてやどる。この夜は、別に會合をなさず。思ひ／＼に遊興を爲すに任せたり。二日夜、年若き學生の中にまじり自然の景色以外、更に一層の趣味を感じて、あくれば、一同撮影してのち、われは、兒と野中生とをつれて、江の島へまはり、鎌倉へたちよらむとて、乞ひて自由行動をとり、早川の水に隨うて、なつかしき箱根の山にわかれぬ。

四 湯河原温泉

底倉に二三日滞在して箱根山を下りけるが、われなほ遊興つきず。薄暮、小田原にて一行と別れ、獨り輕便鐵道に乗りて湯河原に向ふ。門川に下れば、既に夜也。人力車を求むれども、湯河原へ行きつくして、未だ來らず。月を踏んで行く。凡一里にして達し、天野屋に投ず。田岡嶺雲、この春より、この宿にありて病を養ひ居りければ、座に上るより早く田岡はと問へば、既に東京に歸れりといふ。浴し終りて獨り杯を傾くる程に、主婦來りて曰く、田岡様は、今熱海に在り。唯今電話か、り來りしを幸に、御身の事申上けしに、明日熱海を發して東京に歸らんと思ひ居れど、御身が來られるなら、一日延ばしてもよしとのことなりと。明日、日金山を経て行くべしと答へさせ、酒は微酔にとめて寢に就く。湯河原より日金山まで五十町と稱す。岐路の無き處へまでとて、宿より案内者をつけてくれたり。凡そ十町ばかりにてその案内者と別る。溪流あり。木しけりて、幽趣あり。地藏堂前の茶店に荷物を預けて、また上る。幾んど頂上に近づきしに、一人の男の下るに逢ふ。少し行き過ぎて、戻り來り、御身は大町先生に非ずやと問ふ。然りと答ふれば、我は田岡先生の門下にて、山本熊太郎といふもの也。田岡先生を迎へに熱海へ來り、その序に日金山に上りたるなりといふ。さら

ば同道せむと、共に日金山の頂上に至る。

この頂上は丸山と稱す。又十國峠とも云ふ。草ばかりの山也。十國が見ゆるとて、世に聞えたる名山也。この夏二兒をつれて、箱根宿よりこゝに來りし時は、雲霧に封ぜられしが、今日は日本晴の好天氣にて、所謂十國を眺望することを得たり。されど、われは既に神山に眺望を縦にしたれば、日金山の眺望は、さほど迄に思はず。海に近しいふことだけが特色にて、眺望の雄大なることは、とても神山、駒ヶ嶽に及ばざる也。こゝも言はゞ、箱根の一支峯なり。熱海、湯河原、伊豆山などの温泉に遊ぶ者に取りてはさしあたり必ず上らざるべからざる山にて、眺望絶佳の名が神山、駒ヶ嶽にまさりて世に喧傳せられたるは、熱海、湯河原の遊客が多く上りたればなるべし。

五 蘆の湯

日本國民は、よく自然と相親しむ。山水を愛す。されど、思ひの外に、足ふしやうにて、登山の趣味を解する者は少なし。山を見るは好きなれども、山に登るは、いやかと思はる。一方に行

者といふものありて、山嶽を飛び歩くこと平地を行くが如くなれども、この氣風は一般に及ばず。及ぶべき筈の畫家文人にも及ばず。大雅堂が、日本の三高山と稱せられたる富士山、白山、立山の三山に上りて、自ら三嶽道人と稱したるにても、當時一般の畫家の意氣地なきことを推するに足る。近時、學校には、必ず修學旅行あり。學生には登山を好むものも見うくるやうになりたるが、學生生活を終れば、とかく坐ることを好みて、歩くことを好まず。箱根に遊ぶ紳士は多けれども、唯室内にのみごろくして、山上の風光を外人の獨占に一任すといふの有様なるは、われ日本國民の爲めに取らざる也。知らず、日本國民は、箱根最高峯なる神山の路を開きたるハミルトン氏の特志を何と感ずるや。

神山を下りて、宿屋にまどれば、午前十時に近し。朝食と晝食とを兼ねて、酒し、飯す。この次で、駒ヶ嶽へと思ひたれど、明日の事にと考へ直して、近き辨天山、笛塚、鷹巢山などに逍遙す。蘆の湯に傍して、附近の諸所への距離を記す。曰く、賀茂眞淵碑へ一町、龍頭瀧へ三町、恩人碑へ三町十五間、鷹巢山古城趾へ十一町十一間、曾我兄弟の墓へ五町二十九間、二十五菩薩へ六町十四間、新羅三郎笛塚へ七町十四間、多田満仲の墓へ七町二十五間、八百比丘尼の墓へ八

町三十間、本宮山へ十一町五十間、六道地藏へ八町三十間、飛龍瀧へ十二町、二子山遊覽所へ十町五十間、進士城趾へ一里二十七町、駒ヶ嶽へ二十九町、神山へ一里三町、箱根神社へ一里五町、舊關所跡へ一里十町、鞍掛山へ一里三十五町、施行平へ二里五町、蘆湖水門へ三里、大地獄へ二里、道了權現へ三里十三町、乙女峠へ三里十町、十國峠へ四里五町、日金山地藏へ四里十三町、姥子温泉へ三里八町、これなり。

賀茂眞淵の碑は、藥師堂の跡にあり。眞淵が箱根川を詠じたる長歌を刻せるもの也。同所に山本北山門下の詩を刻せる碑もあり。山脚へかけて、十六羅漢の石像あり。蘆苔に封ぜられて、古色掬すべし。寺は、今は無し。寺の無きは、蘆の湯の衰へたるなり。蘆の湯は衰へたれども、箱根全體の温泉は、其の繁昌、關東に冠たり。今の世、箱根に浴せざるものは、温泉に浴したりとは言はれぬ程也。日光と箱根とは、關東の二大名所也。而して日光には、「日光を見ずんば、結構を言ふ勿れ」の諺あり。余は之に一轉語を下して言はむとす、「箱根に浴せずんば、温泉を云ふ勿れ」と。わが箱根温泉と云ふは、在來の七湯、新七湯、湯河原、伊豆山、熱海を合稱して云ふ也。一山に斯ばかり多く且つ多趣味多様なる温泉を有することは、天下唯箱根山あるのみ也。

### 六 蘆の湖

蘆の湖は、東西二里、南北二十町と稱す。「山上湖」として、大なる方にはあらねど、また小なる方にもあらず。もとの東海道は、その東端に沿うて通ず。この湖の水は、如何に疏けのくかと云ふに、西北隅より流れ出で、仙石原といふ火口原を過ぎ、小塚山の北麓に沿うて宮城野に入り、木賀、堂ヶ島、底倉、宮下を過ぎ、更に下りて塔の澤、湯本を過ぎて、小田原の南にて海に入る也。延長凡そ五里、上流に逆川の名あり。下流に早川の名あり。疏け口は、これだけかと云ふに、天然のはけ口はこれだけなるが、今一つ人造のはけ口あり。西端より湖尻峠を貫きて佐野方面に下る。これ江戸時代、私人の經營に係る。これから見れば、明治の世に出來たる京都の疏水などは、何でも無きこと也。

湖の周圍に路あり。湖尻より歩いても知れたものなれど、余は舟行といふことに興味を有す。わざ／＼一時餘も待ちて舟を得たるが、果せる哉。神山の湖水に面する處は、満山みな紅葉、水に映じて水も亦赤し。顯みれば、富士も外輪山の上にはあらはる。逆富士は見られぬかと舟夫に問

へば、今日は風ありて漣瀟立ち居れば見られず。漣瀟さへ無ければ、いつでも見られるれど、朝が最もよしといふ。逆富士は舟でなくとも見られるれど、神山の紅葉の美観は、舟行の賜也。湖尻より北岸を行かば、身は密林の中に没すべし。南岸を行かば、神山方面は見られるべけれど、湖心の舟中より四方の眺望を縦にするといふやうな譯には行かず。よしや、紅葉の美観は無くとも、四面山に圍まれたる山上湖、咿軋の聲を天地に響かせて、身は白鷗と共に浮び、心は雲と共に飛揚するの越は、實に舟でなくては得られざる也。

南岸の山にては、三國山最も高く、山伏峠之に次ぐ。されど神山の偉大なるには比すべくもあらず。神山つきて駒ヶ嶽となると共に紅葉は無くなりぬ。されど、將基の駒の形をなして、竹と草との外に樹木なく、堂々として水を壓するさまはまた別様の美観なしとせず。塔ヶ島見え初む。其上の西洋館は離宮也。右の瓦鱗は箱根宿、左の聖壁は元箱根也。其間相距ること七八町。余は蘆の湯へとて元箱根に上陸す。

駒ヶ嶽と二子山との間を上る。駒ヶ嶽は、何處から見ても、將基の駒の形をなせるが、二子山は遠方より見れば、はつきり二峯に分かれ居れど、蘆の湖方面より見れば、上二子も下二子も二

峯に分かる。即ち二重の二子山也。なほよく見れば、上下二子とも噴火口を有し、單純に二峯並べるにはあらず。上二子と下二子との裾野凹みて小池を成す。之を齋ヶ池と稱す。又少しく行けば、上二子と駒ヶ嶽との間、路に沿ひて小池あり。精進の池と稱す。右手に一段高まりて、偉大なる地蔵あり。巖石の面に地蔵を刻み出せる也。左に精進の池の盡くる處に、五輪塔あり。多田滿仲の墓と稱す。左手の巖より右手の巖へかけて、二十五菩薩の像を刻す。右手に二つの五輪塔相連る。曾我兄弟の墓と稱す。少し離れたる五輪塔を虎御前の墓と稱す。而して地蔵も二十五菩薩も共に弘法大師の作と傳へらる。このあたりには、竹多し。これ箱根竹と稱して、盛に運び出されて、壁の骨、團扇、竹行李などに用ひらる、もの也。この竹は蘆の湖を中心とせる箱根山に多し。遠くより見れば、草かと思はるれど、就いて見れば、人よりも高くして、而かも隙間もなく密生す。とても人が通るべくもあらざる也。

七 諸 温 泉

脚絆に草鞋、背には絲楯を負ひて、朝早く塔の澤の宿を出で、宮下さして行く。月既に没して

日未だ出でず。空に星斗闌干として、路なほ暗し。この夏の洪水に流されたる福住樓の跡は、こ  
 こなりと同行の松本道別に説明しつゝ、行くに、提灯つけて荷車ひきてゆく男あり。我等を顧みて、  
 土地の者とや思ひけむ、なれ／＼しくも又ぞんざいなる言葉にて、おい、一寸押してくれと云ふ。  
 前路を急ぐ旅にこれは迷惑な事と思へど、旅は路伴れ世は情、よし／＼とて、二人にて車の後を  
 押す。路は坂路にて、石がごろ／＼、成程これでは後押を要すべしと思はる。何處から來たと問  
 へば、小田原からと云ふ。この荷は何と問へば、「うづわ」といふ。「うづわ」とは何と、道別に問へ  
 ば「さうだ經」の事なりと説明す。何處迄行くと問へば、太平臺といふ。とにかくに二人にて一  
 所に押すよりは、一人づゝ、代り／＼に押むとて、われ先づ押すことを止めたり。かくて、二三町  
 も行きけるに、車ひく男、難有う、これでよしといふ。石ごろ／＼の坂路が盡きたりとおぼし。  
 思つたよりも早く、後押しの役がすみたるに、却つて氣の毒になり、もつと押してもよいかと云  
 へど、もう、これで澤山なりといふ。さらばとて、提燈を後に、すたすた歩み行く。  
 路は、早川のゑぐれる深谿に通ず。而かも川身よりは、すつと上に在り。脚下遙に溪聲を聞く。  
 滿溪の紅葉は、夜の錦と歎ちけむ。太平臺にいたる頃、夜全く明けたり。溪をへだて、遙に宮下

の人家を望む。その上には小塚山あり。小塚山の左肩に白き一塊、凝りて動かざるは、雲にあら  
 ずして富士山也。茶屋あれども、未だ戸をひらかざれば、休息するに由なし。噴水に咽をうるほ  
 して立ち去る。

宮下に至りし時には、人家はや戸をひらけり。富士屋の前の一店に就き、小兒への土産にとて、  
 祕密箱といふ者を買ふほどに、俄にぱつと明かになりて、日光あざやかな富士屋の樓閣を照し、  
 紅葉も映發して、けに目さむる光景也。あれ見よと、道別に注意すれば、成程、これは美事なり、  
 龍宮へ來たやうなりと、頻りに感歎す。

底倉を過ぎて木賀に至れば、路は川身に接す。溪流幾曲、水は清く、楓葉は赤し。路の傍に飛  
 瀑あり。白鷺瀧といふ。高さ三四丈、水量可成り多し。こゝにも洪水の痕を留め、路は奪はれて、  
 棧道通ず。宮城野に有名なる蕎麥屋の手前より左折して雑木林の中を七八町もゆけば、下強羅の  
 温泉あり。こゝは二三年前にひらけたる道也。又十町も行けば、上強羅の温泉あり。一店に就いて  
 休息す。早雲山を仰ぎ、宮城山を見下す。人家遙に黄葉の中に在り。明神、明星、淺間の諸山  
 前に當りて、眺望よし。こゝも十數年前に開けたる新温泉也。

箱根七湯とは、古來言ひふらされたる所也。即ち下より順に數ふれば、湯本、塔の澤、堂ヶ島、宮下、底倉、木賀、蘆の湯、これ也。今は、この七湯の外に、小涌谷、湯の花澤、姥子、上下仙石、上下強羅の七湯出來たり。温泉の中心とも云ふべきは、宮下なるが、位置によりて、凡そ三種に區別するを得べし。湯本、塔の澤は山の下部にあり。宮下、底倉、木賀、堂ヶ島は幾んど一區をなして、山の中部にあり。小涌谷、蘆の湯、湯の花澤、姥子、上下仙石、上下強羅は、山の上部に散在す。湯本、塔の澤より引きかへしては、未だ箱根に遊びたりとは云ふべからず。宮下、底倉あたりより引きかへしても、未だ箱根に遊びたりとは云ふべからず。上部に散在せる諸温泉に浴して、始めて箱根に遊びたるものと云ふべき也。

日光

一 諸山諸水

日光の市街を行きつくせば、神橋の朱欄、碧流と映發し、尖峯聳立して嵐氣人に逼る。東照宮や、二荒山神社や、輪王寺や、大猷廟や、深く喬杉の中に在り。丹青の美、彫刻の妙、世に類なけれども、美に過ぎては、却つて風韻失せて、神威も、うすらぐ心地す。含滿の淵、大日堂、日光公園、清瀧、白糸瀧、素麵瀧の如きも、盆地の小景に過ぎず。中禪寺湖上の月に扁舟を浮べ、去て湯湖の畔の靈泉に俗腸を洗ふも、また尋常の遊蹤なるべし。山水の美を解する者は、更に進んで、奥ふかく入らざるべからず。男體、女貌、赤薙、二子、太郎の山々、鬱勃疑立して積翠を天外に横へ、終に白根山に至て最も其高峻を極め、雲煙浮動して、萬千の氣象、得て端倪すべからず。山々をめぐる湖水の數四十八、飛瀑の多きこと七十二と稱す。雲表に峯嶺たる奥白根の麓に瀦せる五色湖の、青靛として大空と相映發するさま、既に奇絶なるを覺ゆ。これより二里あまりなる前白根の嶮を下れば、群嶽の攢蹙環合する山ふところに周廻一里ばかりなる湯の湖、一泓の明鏡を開きて、倒に山影を蘸し、湖水一落して湯瀧となり、四五丈ばかりなる峻壁の、斜に歇てるが上を飛舞奔騰して下るさま、いと雄壯なり。その流、戰場が原を過ぎ、地獄の窟のあたりに至りて、再び激して、龍頭瀑となり、水勢盤旋して百龍巖を嚙む。愈下りて中禪寺湖となり、

周廻七里にして遠く、森漫混濛青嶂迤邐として、歎乃の聲裡に白帆、一たるを望むなど、山上の景とは覺えず。この湖水の末また一決して、華嚴瀑となり、峭壁の下に直下すること數百級、鞆鞆澎湃、巖怒り、水吼え、山岳も動かむとするばかりにて、まことに天地の壯觀をきはむ。この末流を大谷川といふ。男體山と大眞子山との間より滴る清水の末、一たび懸りて慈觀瀧となり、二たび懸りて初音瀧となり、三たび懸りて日月瀧となり、日月瀧の下數十間にして、四たび懸りて裏見瀧となりて、含滿の淵の上にてこの大谷川と會す。猶雄壯なる羽黒瀧、幽峭なる相生瀧、轉折多趣なる布引瀧などの末流もこれと合し、赤薙山の絶壁より、懸垂せる七瀧の末の稻荷川も、神橋のほとりにてこれに入り、胎内、霧降、滑川三瀑のか、れる一筋の流の末もこれに加はりて終に鬼怒川に注ぐ。水は清冽に、地は爽垲に、風景蒼々として水煙の模糊たる處、夏なほ冷やかなるを覺ゆ。

### 二 華嚴瀑

華嚴瀑は、日光第一の大瀑なり。されど、通常これを眺望する處、壑を隔て、茶亭の前より懸

崖を下り、瀑布のなかばと相對する所に至りて、路きはまりて、最早これより下ること能はされば、李白所謂「飛流直下三千丈、疑是銀河落九天」の看を逞うすることを得ず。われこの瀑を見ること前後七八回に及びけるが、別に瀑底に就く路ありと聞き、一たびゆきて見ばやと思ひ立ちて、瀑口より三四町ばかり上なる溪流の、幅六七間ばかりの川身に横はれる岩々を飛びつたひてわたりたるが、通ふべき路は見えず。葛蘿を援きて阻崖を攀ちのぼり、熊籠の中をおしわけてす、み行くに、からうじて瀑の右なる懸崖の上に出でたり。や、下れば、勾配の急なる壁面に、片石堆積して足をふみしむるに由なく、轉々として我は石と共に下り、遂に瀑底に至つて止む。仰ぎ見れば、一道の大瀑天を劈いて、滾々崩落すること幾百尺、無數の絮塊層々煙を吐いて、斷ゆるが如く、また、斷えざるが如く、始めはたゆたふが如きも、その勢、愈々烈しくなりゆきて、遂に轟然萬雷の音して潭底を撃ち、なほたてまはしたる絶壁の際より飛泉の濺々として迸り出づるもの幾十條なるを知らず。潭中水躍りて鼎のわくが如く、餘沫雪を吹いて、また寸碧を見ず。や、流れ出で、始めて靑靑として藍を染めたる迅流の滂々として岩を齧めるが、たちまちまた一曲し、四面を圍める峭壁蒼々として壑底の看も音ならず。見る、一帯の白雲瀑の上頭を封じ



來りて巖に迷ひ、樹を抱き、歩趨躍動して、さながら活きたるもの、如きに、鋸齒の重れるが如き絶壁の間に飛びかふ幾百の岩燕、一層の趣を添へて、いとをかしく、水石相闘ふの音、天地をどよもして、いさましくもまた物凄くも、深淵の底より生じ來れる激風餘瀝を飛して、衣裳悉く霑ひ、三伏の日と雖も、嚴冬の候に異ならず。體顛ひ、齒戰きて、ひさしく居るべからず。神靈の境ひとへに眞宰の妄に人の足の着するをきらふものとぞ覺えし。

### 三 霧降瀑

霧降瀧は、華嚴瀧、湯瀧につぎての大瀑なるが、上下二段にわかれて、その間相距ること數百歩、望瀑臺より望めば、二瀑共に谷を隔てたる翠崖綠樹の間に全約を露はして、一條の蛟龍の雲際に天矯たるが如く見ゆれども、峻坂を下りて瀧壺に就けば、一の瀑は見えず。二の瀑の巖壁、赭色を帯びて、稜角なく、流水たゞ壁に粘付して、徐々として下るのみにて更に壯快の觀なれば、上瀑の底に就かばやとて、下瀑の左なる噴吼を繁ち、蒙茸を排き、枯木の自から僵れて丸木橋となれるが上をわたりゆくに、忽ち峭壁の面を衝いて起るに逢ひ、手扳し、足捫し、終に一躍

してこれを越えて、溪流の側に出づ。全石を底となし、水駛く、石滑かなり。衣を蹙けてこれをわたり、流れに従うて上ること數十歩にして、始めて潭を隔て、大瀑のか、れるを見る。絶壁千尺、二の瀑よりも高きに、巖の色黝黒にして、石理の凸凹極めて多く、流水の脈の大なるもの始めわかれて二となり、次に三となり、五となり、七となり、終に千綜萬錯して白雪全壁を壓し、飛躍盤舞して餘沫壑に盈ち、凝つて霞となり、散つて煙となり、水と共に深淵の底より激し來れる溪風颯として袂を捲き、崖樹の間よりのぞき込む日の光をうけて、眼下に一道の彩虹を現するなど、たとしへなくをかしく、霧降の名、洵に空しからざるを覺ゆ。

望瀑臺は、眞に望瀑臺也。霧降の二瀑を合せ見る。なまじひに、二の瀧の瀧壺へ下るよりも、こゝにて見るがよし。四面の眺望さへよく開けたる處也。

### 鎌倉と江の島

人生の遭逢、夢乎、眞乎。三人ながら住みなれし花の都を出で、山陰道のかたほとりに教鞭を執り居りしときは、一年とたぬ程に、また同じく都にて、落ち合はむとは、夢にも思はむや。余の都に還りしは、去年八月の末、山外の還りしは今年一月の末、雨江の還りしは二月のはじめ、彌山の麓、鏡川の渚、共に袂を聯ねて逍遙し、共に團樂して杯を飛ばしし昨日の歡樂、一場の夢と消えて、還るもなつかしき花の都、双鞋の下に踏破せし古雲洲の山川、數百里の外に隔りて、重ねて逢へる三人は、舊によりて好在なり。陽春四月、東風のどかに、柳櫻をこきまぜて、都は春の錦の巻、三人相會し、會遊を追憶して遊意鬱勃たらざるを得んや。一夜酒酣にして。雨江盃を投じて曰く、「人生いくばくぞ。時に及んで行樂せずんば、清風朗月を如何せむ。去年の晩春、夜もすがら宍道湖畔をたどりし幽興わすれ難きに、いざこれより起ちて都門の外に逍遙せずや」と。青年血氣の山外、手を拍ちて、「大賛成なり」と叫ぶ。われも旅行にかけては、目のなき男、相談忽ちまとまりて、立ち出づ。二十日ごろの月おぼろなり。

新橋より汽車にのりて横濱につきたるは、夜の十一時半なり。酒さめて喉かわくに、麥酒店に入りて且つ渴を醫し、且つ醉を復し、金澤さして徒歩す。市中は燈光畫の如く、人の往來なほ繁

かりしかど、場末に至れば、人家悉く戸をとざし、絶えて往來するものなし。路は田畝の間に通ず。春月一痕、くもりも果てず。四山夜靄の外に幽かなり。

夜の旅にこまるは岐路なり。横濱より金澤に至るの路は、さまで岐路あらず。且つ雨江も曾て通りたることあり。余も通りたることあれど、一里あまり行きたる處にて、路二條に分れ、夜色のおぼろなるに、方角をわくことあたはず。前蹤の記憶も失せはて、はたとまどひぬ。三人頭をあつめて考へたれど、文珠の智慧も出でず。側に家あれども、すでに寢しづまれるさまなり。起して問はむか、さりとて氣の毒なりと、躊躇せしが、外に策なければ、終に意を決して、兩戸たたきて路を問ひしに、忽ち老翁の聲は内よりひびきぬ。けに田舎の人のまめやかなる、うるささうなるけはひもなく、いとねんごろに教へられぬ。教へられたるまゝに進みゆきしに、いつしかきた路をあやまりけむ。坂路一つ越ゆれば、屏風が浦前にあらはる。脚下は杉田村とおぼし。さては、金澤に出でずして、杉田に出でたるなり。

田畝の間を歩きつゝして梅林に入る。林中の古寺は東漸寺なるべし。華鯨眠りて音なく、婆娑たる朧月の影に、梅の花それともわかねど、をりく、暗香の鼻を襲ふは、萎み残れる花あるにや。

既に幾回となくとひたれば、こたびはよそに見て過ぎむとせしに、はからずも迷ひ出で、驚きぬ。却つて路を失へるを喜びぬ。嗚呼この臘月、この暗香、苟くも風流の味を解するもの、等閑に付すべき景ならむや。

脈々たる幽香、醉面を吹くの微風も、亦悪からず。茅屋や、樹木や、夜霧の中に趣を添へ、打ち渡す海は森漫として、なぎさにのたり／＼と寄する波の音、ひとり高きまでに、夜はしづかなり。われらは暗香に迎へられてこの梅花の村に入り、また暗香に送られて梅花の村を出でぬ。小高き坂路より、今ひと目とふりかへらば、一望白模糊として、一犬の聲、遙に月下に高かりき。一路丘上に通ず。ゆくこと一里ばかりにして、路は岡を下る。田開け、水流れ、處々に茅屋を見る。時計を見れば、方に午前三時、怪雲空にみちて、やさしかりし臘月夜は、變じて物凄き光景を呈し來りぬ。しばし足をやすめむとて、露滋き路傍の石に腰かけて、煙草ふかしなどする程に、鶏鳴はや幽篁の中より起りぬ。板橋未だ霜を見ざれども、茅店の月に鶏聲を聞く。人は庭筠詩句の中において、自から興あるを覺ゆ。されど、草木も眠る丑三の空、冷氣の骨に徹するに、久しく休息すべからず。今更に風流の寒きを覺え、疾行して暖を取りぬ。

十字路頭また取るべき路を判じかねて、一茅屋を叩き起して、路を問へば、「左の路を取り土橋をわたりて十丁ばかりゆけば、金澤なり」といふに、今ひと息にて温き衾の中に臥するを得るか、と、俄に勇みたちぬ。その答へし聲は、四十餘りの女とおぼし。たゞ物好きの益もなき夜行に、一人の翁と一人の媪との眼を妨げしこそ、けに罪深きわざなりけれ。この路は、はじめ通る路なり。能見堂やいづくにある。筆捨松やいづくに立てると、右方の小山をのみながめつ、進みしに、はからずも、はや金澤の入海に出でぬ。左方の橋は、瀬戸の橋也。右手の高樓は、二三回宿りたることある旅館千代本也。時は四時半、鶏鳴しきりに曉を告ぐれども、人は未だ起きず。こは宿屋なれば、氣の毒とは思はず、叩き起して宿を乞へば、こはそも如何に、室ふさがれりとのみ、ねぼけ聲にて冷かに斷られたるぞ是非もなき。店頭に幾度か額づきて、「またどうぞお近きうちに」と愛嬌ふりまきし口より、斯る情けなき言葉を聞かむとは思ひかけきや。「宿かさぬ人のつらさを情けにておぼろ月夜の花に寝しかな」と蓮月尼の詠じけむ、花ならずとも、老松たちつづける琵琶島の一角、天女の祠に憩はむとて、進みゆく。林下寂として天未だ明けず。残月の光力なくも松の露にやどれり。天女の祠は、小にして膝を容るゝに足らず。松が根に腰かけて休息

す。金澤に至らば、温被の内に横臥せむとの希望、晝餅に歸して、いよく風流の寒きにふるへぬ。

墜露聞くに聲ある老松の下、三人相對して言なし。天地なほ夜色につ、まれたる内に、灰色なるは空、うすみどりなるは入海、その中間の一帶の黑影は、野鳥也。江上にたゞ一燈、闇を破りて話聲の聞ゆるは、夜泊の舟なるべし。睡を忍べる小女の眼の如くまた、きし明星の光、漸くうすれのきて、空はいつしか白味と赤味とを帯び來り、はてはおもに紫色を帯び來りぬ。水の色はいよくみどりになりぬ。ふとん着て臥たる如き野鳥の黑影、倒に水にうつり、これ天、これ水、上下相映じて、とみに目覺むる光景を呈し來りたれども、曉の寒きに、火の氣のみこひしく、起きたる人家やあるとたどりのゆけば、一軒の木賃宿、はや戸をあけて、主婦かひんしく炊煙の上るかま戸の前にたちはたらけり。されど、その家のむさくるしげなるに、入る氣にもならず、向側の物賣る家のや、見よけなるが店をひらき居たれば、茲にと入る。うちつけに火鉢を乞ふことも出來ねば、酒かひてのみて休息す。起きて居たるは主婦と、その娘とにて男は見えず。いくの家にて、男はらくをして、女のみ働くものにや。われらのふるへ居るに、氣をきかして、

かまの下の火を火鉢にうつす。その情け火よりも温かに覺えて、漸く蘇生の思をなす程に、夜は全く明けはなれたり。されど、宿屋の起きむはまだ程あるべし。こゝに待つ時間にて、鎌倉にゆかむとて發足しぬ。

界地蔵を右に見てのほりゆく朝夷の切通しの頂上には、一軒の茶店あり。そこにて茶をと、喘ぎ／＼山坂を上れば、茶店はありて人は未だ出で居らざるに、少し失望する間もなく、店の主、鎌倉の方より道具背負ひて上り來りぬ。岩隙よりわき出づる清水に口そ、ぎ、顔洗ひなどする程に、早や湯もわきぬ。その手早きに驚きつ、幾杯の茶をのみて、一道の溪流と共に鎌倉に下りゆき、八幡祠前の旅館に投じて酒し、飯す。鎌倉にては、温被をと思ひしも、夜あけて暖かに、腹はり酔を帯びては、ねむる氣にもならず。江の島へとてたち出づ。はかくと暖き春の日なり。『夏草や武夫どもの夢の跡』といへる芭蕉の俳句を刻める石碑のたてるあたりは、家はなくて草のみ繁き處なりしに、數年見ざる間に、人家多くたちならびたり。嗚呼都すたれて野となり、野また市街となりて、長へに循環するは、竟に何の意味ぞや。地下の巨頭公、呼べども起たず。三代の霸業、たゞ山河を見る。

稻村が崎を左に見、七里が濱の浪打ぎは行き盡し、更に沙地の上の長橋をわたりて、江の島にいたり、崖に倚れる旅館に投ず。落ちつく處はこゝなりと思へば、夜來ねむらざる身の氣ゆるむにつれて、睡氣催し、蒲團を呼びて打臥す。さめて午食し、午食終りて眠り、眠さめて晩食し、晩食終りてまた眠りて、曉に達しぬ。あはれ春の二夜一夜は、歩きつくし、一夜は眠りつくしぬ。その眠りし一夜は、夢にも周公を見ざれば、記すべき事なく、何等の罪もなし。眠らむ哉。眠らむ哉。五十年の一生、覺めては愁の多きに堪へず。目をあけつゝも、眠らむ哉。

### 笠置山

#### 一 男女の學生

高輪の泉岳寺を訪ふもの、誰か日本國民をゆかしき國民と思はざらんや。東京にて、年が年中、參詣者の最も多き處は、淺草觀音也。之に次ぐものを泉岳寺となす。淺草觀音には、御利益あり。

加ふるに、さまざまの興行物を以てす。穴守稻荷や、成田不動や、川崎の大師や、堀内の祖師や、大久保彦左衛門の墓や、鼠小僧の墓や、みな、それ々御利益を以て人を惹く。泉岳寺には、唯、四十七士の墓あるのみ也。何も御利益あるに非ず。而して參詣者の絶えざるは、四十七士を慕ふ也。四十七士を慕ふは、義を解する也。

之を關西地方に求むるに、笠置山に上るもの、日に、多きは千人を越ゆることあり。少なきも百人に下ることなし。山上に寺あれども、別に御利益あるに非ず。風光美なれども、その爲めのみにては、斯る都會より遠き山上に、日々、數百人を惹くべしとも思はれず。笠置山に上るものは、主として、御醍醐天皇行在所の跡を弔ひまつる也。

われ曾て日本外史を讀み、太平記を讀み、齋藤拙堂の笠置遊記を讀み、頼山陽の笠置懷古の詩を讀みて、笠置山に上らむと思ふこと切なりしが、こゝに漸く思ひ叶ひて笠置驛に下りて、心覺えず躍る。笠置山、今や、僅々數十歩の外に峙立せる也。

想像せしよりも、笠置山は、低くして且つ小也。海拔わづかに九百五十四尺、山下の地が二百尺以上もあるべけれど、直立すること、町數にすれば、二町にも足らず。上には常盤木ありて、

下には、雜木生ひ、巖石、處々に露出す。このあたりの山々の中にも、低き方也。されど、孤立せるを以て、山城としては、一要害たるを失はず。北は直に木津川に接す。この川と西麓停車場附近の四五町の平地とを除きては、四面みな山又山、谷又谷也。

驛前に導者を雇ひ、笠置の人家の間を過ぎ、や、南して、山の入口に達す。驛よりこゝまで三町の程に過ぎず。これより路は迂回して上る。勾配急ならず。凡そ二町にして、あばらなる小堂あり。下の堂と稱す。二人の女學生の下り來るに逢ふ。いづれも、董を摘みためて手に持てり。又、二人の男の學生の下り來るに逢ふ。これは、何も摘み取りて居らず。女學生の花を摘み取れりと男の學生の然らざるとは好一對の對照也。もとより女は、いつも花をつみ、男はつまぬとは限らざれども、こは、偶然に男女兩性の特質をあらはせるものとおぼし。男の性は戦ふに適し、女の性は争ふに適す。われ曾て沈南蘋の畫ける鶏の圖を見しに、上に、さまで角ばらぬ巨巖ありて樹木生ひ、下に雌鶏二羽の鶏あり。雌鶏は、微蟲を見付けて、體を屈して、唯わけも無く嬉しさに、之を食はむとし。雄鶏は、蟲などには目もくれず。昂然として立ち、口を開きて歌はむとす。われ、この意匠を面白しと思ひぬ。女は、概して、愛に生死す。男にして愛にのみ執着す

るものあらば、餘程の意氣地無し也。利慾に執着するも、凡物たるを免れず。われ今この一對の男女の山上にありし様を想像するに、男は、巖頭に立ち、天下を小とするの概を示して、放吟せざりしや。女はよき花は無きか、あの木が取りたしなど、うろく見廻らざりしや。

二笠置寺

四町目の掛茶屋に小憩し、六町目に、上の堂を見て數十歩ゆけば、導者曰く、こゝはもと、二王門のありし處にして、元弘の戦に一の木戸を設けたりし處也。頂上まで、一二町に過ぎず。當年、賊の大軍、押寄せて、鬨の聲をあけたるが、官軍は、山上にこもりて、音もせず、賊兵やすくと、こゝまで上り來る。山上より、足助次郎現はれ出で、自から名乗り、強弓を引きしぼりて、一矢の下に、賊の一將、荒尾九郎を射斃し、二の矢にて、その弟、孫五郎を射斃す。これを手始めとして激戦しけるが、官軍に本性房といふ怪力の僧あり。大石を取りては投げ、取りては投ぐ。賊兵の壓死するもの其數を知らず、積屍、左右の谷を埋め、鮮血流れて、木津川爲めに赤かりきなど語る。南の谷は、地獄谷の名あり。北の谷は、血染の谷の名あり。名のみを聞き

てもぞつとするばかり也。  
 麓より凡そ八町にして頂上に達す。小さき山の割には、頂上は廣し。笠置寺あり。山僧店を張りて、茶を賣り、繪葉書をも賣る。元弘の戦の前には、山上に四十九坊ありしが、今は、たゞこの一坊のみ存すといふ。鐘樓あり。古鐘懸る。建久元年の鑄造に係れる逸品なるが、近時國寶となりて、撞くこと能はずといふ。鐘樓を左に見て、少し行けば、路の左に椿本祠あり。其左に空地あり。もと天満宮の在りたる處也。醍醐天皇行幸あらせられし時、菅公扈從したりければ、後人、其徳を慕ひて、天満宮を建てけるが、後、山下に移されたるなりと云ふ。梅林を右に見、大師堂の石壇を左に見てゆけば、三大石相竝ぶ。高さ四五丈。堂々として天を衝く。これ笠置寺の本尊也。右が彌勒石、左が薬師石、中央が文珠石、それ々々其名に負へる佛像を刻みて、之を内にして偉大なる本堂建ち居りしが、元弘の兵火に、堂は焼け、像相も消え失せたりなど説明す。この三天石を包藏したりし堂の大きき想ふべし。今は巖前に正月堂といふ小堂いと古りて、扉閉ぢたり。十三重の石塔苔を帯びて、巖々として高し。樹木さへ四面を蔽ひ、境自から幽怪也。正月堂の後をゆけば、前の三石に譲らざる大石二つ竝ぶ。金剛界石となし、胎藏界石となす。

二石の間は、千手窟と云ひ、一に龍窟と云へど、石缺けて、今は窟らしくは見えず。又前の五石と彷彿たる巨石あり。其面に、佛像を刻めり。虚空藏石といふ佛名を負ひたるなり。其佛像石に應じて、甚だ大なるが、練畫にして、彫り出せるにはあらず。胎内潜を過ぎ、太鼓の音するといふ。太鼓石の下をくゞりて、巨巖の上に立てば、高さ五六尺周囲二三十尺の石あり。押せば動揺す。曰く、搖ぎ石也。見下す谷の彼方には、小瀑懸る。曰く、千手瀧也。東北なる山の彼方に、白壁ぼつ／＼見ゆるを指して、あれは飛鳥路村也。當年、賊は、あの村の民に案内を頼み、風雨の夜に乗じて登り來り、火を放ちて城を陥れたるなりといふ。頼山陽が、

居民爲レ我指ニ村墟。爲ニ賊鄉導ニ實由レ渠。至今猶不レ通ニ婚嫁。童孀唾罵斥如レ奴。嗚呼豈氓猶能辨ニ大義。寄レ語人間士大夫。

と、痛快の語を吐きたるは、この事なりと。現に其村を見て、感慨一層深し。今もなほあの村の者とは交際せぬかと問へば、然りと答ふ。何故にと念を押して見たるに、こはそも如何に、癩病村なる故に嫌ふなりといふ。更に語をつぎて、其癩病も天罰なりと、肩を聳かす。

三元弘の亂

松の枝にすがりて、偉大なる平等石の上のぼる。木津川脚下に在り。眼界は南北にせまくして、東西に長し。東は遙に伊勢の兜山を望み、西は遙に攝津の六甲山を望む。掛茶屋に少憩し、菅公冠掛松の枯木となれるを路傍に見て、西に轉すれば、一大石立てり。貝吹石といふ。西と南北との眺望ひらけたり。導者遙に西方の翠峯を指して、奈良の春日山なりといふ。戻りて東行し、北に數十級の石段を攀れば、石欄あり。中に樹木しける。彌勒、薬師、文珠三石の上に當る。これ當年本堂のありし處にして、後醍醐天皇の行在所に充て給ひし處也。

元弘元年八月二十四日、後醍醐天皇は都を出で、ひと先づ奈良へ行幸あらせられ、二十九日移りて、茲にたて籠らせ給ふ。今の曆にて云へば、九月の末、秋既に深く、冷風身に浸む頃也。集まれる兵とは初は僅に五百騎に過ぎず。増して漸く三千騎となりたるも、もとこれ鳥合の衆也。山陽の『龍旂憑險事倉卒』とは、言ひ得て盡せり。寺を俄に城としたれば、防備は不十分也。

兵糧とても、久しくは支へ得ざるべし。而して四面より來り攻むる北條の軍は、七萬騎に餘れり。

憂かりける身を秋風にさそはれて

思はぬ山の紅葉をぞ見る

との御製、今に遊客の腸を断たしむ。されど、さすがに、天險の地なれば、凡そ一箇月は支へ得たり。火攻の不意撃なくば、未だ斯く俄に陥らざりしなるべし。火攻の策を講じたる陶山、小見山の二賊將、憎しとも憎し。されど、順逆を離れて考ふれば、その膽勇は取るべし。攻城三十日にも及べども、未だ陥らず。この天險、兵力のみを以て、急に抜き難し。二將は部下の五十人と共に死を盟ひぬ。決死の前には、堅城なし。天なる哉、九月二十八日の夜は、暴風雨也。決死の五十人、北方の險を攀つ。官軍も、此方面は、險を恃みて、備へざりければ、悟られずして城へ入り、大膽にも城中残る限なく見廻はる。五十人の足音は、さすがに、それと怪まれたれど、風雨烈しければ、夜廻りをするなりとごまかし、明きたる一堂を見出して火を放つ。火起る。五十人、聲を限りに関を作る。城中にては、賊の大軍押入りたりと思ひ、山下の賊は、内應者ありとて、勇んで攻め上る。見るまに、一山、火となりぬ。慘烈なる哉。かくて、城はもろくも陥り



たる也。

さして行く笠置の山を出で、より

あめが下には隠家も無し

の御製、益々、遊客の腸を断たしむ。いたましい哉。一天萬乗の御身、隨へるものとは、ただ藤房兄弟二人、踏みもならされぬ野に、山に、路は抄らず、餓うれども、食を求むる家もなく、草を枕に夢も結ばれざりし當日の御難義の程、思ひつむるだに涙也。和束郷の山中にて捕へられ給へりとあれど、その場所は、さだかならず。木津川より北の方、鷲峯山のあたりにや。

四 行在所の遺趾

明治の聖代、吾元弘行在所の遺趾の前に立ちて、五百年前の昔を緬想すれば、兵馬の聲も聞ゆるが如く、風雨の夜の猛火も見ゆるが如し。目には、陽春四月の光景あり。心には、元弘の世の秋風咽ぶ。松と梅との若木を植ゑて、木柵をめぐらし、中間に榜して、竹田宮殿下御手植の松竹梅としるしたり。導者に向ひて、竹は何處にかと問へば、竹田の宮の竹が、即ち竹なりとて笑ふ。

大師堂を過ぎて梅園にいたる。山上の一周、これにて終れり。およそ七八町の程也。歩々すべて歴史の跡あり。怪岩奇石、應接に遑あらず。綠苔、長へに露を含み、青松、空しく當年の操を守る。眺望の佳、風光の美、人をして、歩の移るを覺えざらしむ。麓より往復二十三四町、路も険ならず、老幼も上るを得べし。處々に茶店あり。この日、二三時の間に三四十人の遊客にあへり。平生遊客の多きこと、推して知るべき也。

今昔物語に據れば、天智天皇の御世、文武天皇まだ皇子にておはせし時、この山に獵し給ひしに、鹿出でければ、馬を驅つて追ひ給ふ。鹿見えずなりて、はやり切つたる馬、あはや、懸崖より落ちかゝる。皇子心に山神を念じ、命助からば、こゝに彌勒の像を刻まむと誓ひ給ふに、馬、靜に退きて、辛うじて無事なることを得給へり。よりて、彌勒の像を刻み給ひけるが、それが寺の基となりて、後世、良辨僧正、こゝに堂宇を建てたりと也。笠置寺の縁起には、文武天皇を天武天皇にし、寺もその勅願に成るとせり。地勢、よしや、多少の變化はありしも、この山に馬は受取り難し。

十訓抄に據れば、中納言和田磨の子孫、余古大夫といふもの、三輪市の傍に城を構へて住みけ

るが、妻の事より争ひ起りて、敵に攻め寄せられ、城陥り、漸く身を脱して、笠置山中の窟内に潜む。一匹の大蜂、窟口の蜘蛛の網にかかりて、脱する能はず。憐みて、放ちやりけるに、その夜、柿の水干着たる男あらはれて君敗れたれど、なほ二三十の兵は残れるなるべし。それをこゝに呼び集め給へ。この山にわれら蜂の群四五千ばかりあり。力を合せて助勢せむと云ふ。その言に従ひて、残兵を集めたるに、敵兵三百ばかり来り攻む。衆寡もとより敵せざれども群蜂雲霞の如く敵軍に向ひ、一人毎に二三十乃至四五十とりつきて苦しむるに、敵は弓矢も取れず。之に乗じて、敵軍を殺しつくし、目出度く本城に安堵するを得たり。蜂も死するもの少なからざりければ、爲めに堂を建て、毎年忌日に法養を營みけりと也。

後鳥羽上皇の導師となり、解脱上人の謚號さへ賜はりて、徳望一世に高かりし名僧偵慶も、その晩年の五十年前までは、笠置の寺に居ること、二十年の久しきに及びり。召されて、二杖一笠、飄然として玉階の下にあらはれしばかり、物に拘はらざれど、一身規律に合し、法を説けば、百官舌を捲いて驚歎す。春日神社に詣れば、群鹿も敬して、うづくまりたりとぞ。上人の遺徳、笠置の山をして一層靈ならしむ。楠公も、一たび、この行在所に召されしことあり。山陽の「藤

公傳レ勅楠公跪。此處是耶未レ可レ知。』の句、殊に痛切なるを覺ゆる也。

### 五有市鑛泉

笠置山を下り、一旅店に小憩し、導者と別れて、木津川を舟にて渡る。置笠山、清流を壓す。さきには見下して、面白しと思ひ、今は見上げて、また面白しと思ふ。一方には、絶壁怒立し、水深くして淵をなす。一族の人家、川を夾む。南を南笠置と云ひ、北を北笠置といふ。國道は北に通ずれども、汽車は南に通ず。南には、旅店四五軒あれども、北には、商人宿が唯一軒あるのみ也。

木津川の右岸を上りつ、笠置山の北面を見る。巨石多く露出す。中腹なる自然の巨石の面に行宮遺趾の四大字刻まれたり。小松宮殿下の御筆蹟也。一町へだ、りても、文字明かに見ゆ。その大き、知るべし。

今に婚嫁を通ぜずといふ飛鳥路の孤村を對岸に見て、有市の鑛泉宿に投ず。笠置驛よりは二十五六町、大河原驛よりは十七八町の程也。線路に接し、兼ねて鐵橋に接し、山背に寄り、水に枕

みて、危樓、勢飛ばむとす。泉質は、炭酸泉に屬す。飲用にも適す。其味、ラムネの如し。泉源を見るに、川床に崛起せる大磐石の中において、滾々として湧く。一時間に幾石か出づらむ。鑛泉の宿は、唯一軒にて、浴用に汲み取るは、ほんの一小部分に過ぎず。惜しや、幾んど總べて川に流れ出づ。知らず、木津川の魚族、爲めに健なるや、否や。

### 六 明神の大瀧

あくる日、明神の大瀧を見むとて、上流さして行く。路、川と離れて、また逢ふ。大河原の停車場を過ぎ、北大河原の家竝の取付より右折す。兩山屏風の如く、川を夾む。一縷の細徑、有るが如く、無きが如し。石切場までは、すた／＼歩みしが、そこを過ぎては、歩行稍困難也。凡そ七八町來つらむと思ふ所に、石の洲ありて、水二派となり、凡そ四五十間の間、勾配稍急にして、川水奔騰し、怒つて鞞鞞の聲を爲す。これ即ち明神の大瀧也。瀧つ瀬といふべきものにて、普通の意味に於る瀧にはあらず。筏も下れば、鮎も上る。以て其の勾配の度を推すべし。瀧の上の方に、巨巖孤立して、兜の如く、小松を帯び、満開の躑躅をも多く帯びて、甚だ美也。

明神の大瀧は、われ物の本にて知りたるが、それに據りて想像せしとは、様も異なり、場所も異なるに、若しや、この外にもあるかとて、靴や、外套や、荷物やは、巖頭におき、身を軽くして巖をつたうて進む。處々の巖に、躑躅さけり。流鶯の聲も聞ゆ。凡そ七八町にして、川一曲して、一大深淵を爲す。弓ヶ淵と稱す。形によりて名付けたりとおぼし。而かも、引きしぼりたる弓也。その弓身には、巨巖虎蹲し、熊踞す。淵は靜にして、少しも波ださず、物凄きばかり紺碧也。深さ百尋に餘ると云ひ傳ふ。蛟龍や潜める、前の大瀧とは、好一對の對照なるが、余は、寧ろ、この淵の崇高の趣を取らむ哉。

又七八町ゆけば、川二つにわかる。木津川こゝに終りて、右は名張川となり、左は伊賀川となる。こゝにも可成りの急湍あれど、前の急湍には比すべくもあらず。伊賀川の右岸をつたふこと十三四町にして、終に笹瀬橋に達す。大河原より月瀬へ通ふの路に當る。こゝに始めて人に逢ひて、問へば、やはり、さきの急湍が、明神の大瀧なり。さらばとて、引きかへし、荷物などを置きたる巖頭に戻り、やれ／＼と、先づ帽子を脱ぎ、上衣を脱ぎ、ちよつきを脱ぎ、しやつまで脱ぎ、上半身の汗を拭ひ去れば、心すが／＼し。煙草吹かして瀧つ瀬を眺め、巨巖を眺め、躑躅を

眺む。去らむとして、顧みれば、帽子なし。さては、知らぬ間に、風伯の奪ひ去りけるにや。いと粗末なる、古びたる烏打帽也。それが風に吹き去られしとて、何の事もなければ、われには思ひ出無きにもあらず。先頃、一友人の家にゆきしことありしが、細君氣付きて、帽子が、かはれりといふ。そのまゝ、かぶりて、他の友人の家にゆけり。後、ふと路に相逢ひ、帽子がかはれりと云はれて、始めて、それと知りて、とりかへたり。つい、四五日前、學生の集會へ赴きしが、また、かはれり。いづれも、茶色が、りて居りしが、此度のが、裏が無ければ、直に、それと氣付きたり。元來、旅には、烏打帽を最も便とす。風に飛ばされぬこと、林藪の中を行きても枝にさはらぬこと、は、他の帽子の企て及ばぬ所也。また、他の帽子は頭の大小によりて、合ふ、合はぬが有れど、烏打帽だけは、何人にも合ふ。これは、便利でもなければ、烏打帽の特色也。その代りに、取りかへられ易き也。さるにても、三たびまで取りまちがへ、終に風伯に奪はる。よく／＼間の抜けた男と、帽子や笑はむ。

利根川の日

會の種類多かる中に、旅行家の懇親會もまた妙ならずや。さるにても、普通の懇親會の如く、徒らに一堂に集り、徒らに飲み、徒らに食ふのみにては面白からず。何か飛びはなれたる趣向もがなと、色々思案せし末、去年の今頃、水哉、橋牛、小波、天溪諸子、流山に住へる秋元酒汀に招かれ、利根川に舟を浮べて、鱧網を打たせしことあり。その興今に忘れ難し。第一回の旅行家懇親會は、この舟遊びと定めては如何にといふに、一議にも及ばずして、相談はまとまりぬ。そのまとまりたるは、五月の初め、書を酒汀に飛ばしたるに、大に喜びて、東道の主人とならむと言ひこし、が、さはることのみ多く、越えて六月八日に至りてはじめて實行すること、なりぬ。午後二時半上野發の汽車の中等の列車は、わざ／＼迎へに来れる秋元酒汀、小林天龍、坪谷水哉、遅塚麗水、寺崎廣業、その門生三浦北峽、及び江見水蔭、久保天隨、國府犀東、中内蝶二

田山花袋、及び餘の十二人をのせて進みゆく。一行十二人の外、萬綠叢中紅一點、知らぬ他人の婦人一人介するたりしが、間もなく田端にて下車し、一列車全く一行の專領に歸す。水蔭が持ち來れる一瓶の酒、一行の口に分たる、と共に、高談雄辯、汽車のきしる音を壓するばかりなりき。

松戸にて汽車を下り、流山まで二里あまりの長堤、車を飛ばす。右は一面の水田。處々森あり。茅屋あり。筑波の双峯、雲際に隱見す。左は利根の大河、溶々として流れ、蘆荻洲外、白帆幾箇風を孕んで走る。寫眞器を携へたる水哉、小首かたむけて眺め入れる様なれど、車上なれば、如何ともすべからず。流山に着きて一同酒汀の客座敷にひかる。閑庭苦むし、打ち水のしづく、涼しけなり。霎時休息しけるが、日なほ高し。往いて流山の町を見物せずやと水哉の發議に、一同さらばとて出づ。一古刹を過ぐ。鐘樓あり。扉東一躍して上り、柱をよちて鐘面の銘を讀む。その圓顛、その肥滿せる身體を夏外套につ、める風體、さながら辨慶の如しと、一同笑ひどよめきつ、寺を通りぬけて、赤城祠に詣づ。孤立せる丘上、木立ものふりたり。一同を祠前に立たせて、水哉こゝにはじめて寫眞器を利用しぬ。祠畔に碑あり。由来をしるせり。上州赤城山の土くづれ

て流れ來り、こゝに止まりて、この山を成し、かば、流山とは云ふなりとぞ。例の俗人をおどかさむとする古の坊主の慣用手段なるべし。流山の名、今は山に知られずして、町に知らる。町に知られずして、味淋に知らる。この地、名だゝる味淋の産地なるも、例の御利益とやらにや。歩を轉じて街上を散策す。一條の長街、ゆけどもく、そのつくる處を知らず。古道具屋あるを幸に、古錢道樂の水蔭、歩をとめて立ち入れば、歩きあぐみたる連中うちつれて入る。他の一半はなほ七八町ゆきて、秋元氏の支店にいこひ、茶を喫してかへる。歸り來りて一浴すれば、主人が心をつくせる膳羞、前に陳せられたり。酒十數行耳やうやく熱す。主人絹張りの唐紙をさして、廣業の揮毫を請ふ。この時廣業すでに八分の醉を帯びけるが、決然としてたち上り、立ちたるま、唐紙に向ひて、健腕一揮、一大老松を畫く。幾度か墨汁の滴るをば、蔦につくり成しつづ、また、くひまに畫きぬ。さすがに當代の名匠の作として、醉筆ながらも、墨痕淋漓、氣韻生動す。畫き終りて筆を投ずれば、一堂俄に光彩を添へ、墨香四座にほとぼしる。喝采の聲、しばしはやまず。一行の中に、巨頭公と字せられたるものあり。杯を廣業にさ、むとて起ちあがる柏子に、ひよろ／＼とよろけて、遂にさ、ふる能はず。どうと倒れて尻餅つき、煙草盆をくつがへし

て、忽ち灰神樂を起しぬ。廣業悠然として杯を傾けながら、その狂態は畫にもか、れずとて微笑す。巨頭公酔ひ未だ全く廻らず。面目ながりて、例の團扇頭を搔くも、しをらし。これぞこの旅行劈頭の失策なりける。

酒又十數行、主人更に銀屏風を持ち來りて、畫を請ふ。この時には、廣業既に酔へり。わたしやお前にもりつぶされてなど、こわいろつかひつ、竹を畫く。一線ひき終れば、ひとつ歌うたひ、うたひ止んで又筆を走らす。酔ひ愈々加はりて、畫いよ／＼奇なり。

主人更に素紗をのべ、一同を顧みて、今日の佳會の記念に、何なりとも書きてたまはれと云ふに、水蔭まづ狂畫をゑがき、天隨詩を題し、蝶二俳句を題し、花袋歌を題し、犀東和尚梵字を題す。主人また一つ素紗をのぶれば、廣業、墨繪の美人をゑがく。酔ひ愈々加はれるまゝに、終に筆を投じて、手にて畫き、ばたくと音たて、掌痕幅上に狼藉たり。墨汁つきて、手につばきして畫く。狂態颯爽、畫是に至りて奇の極に達しぬ。

筆を收めて、更に杯をとばすほどに、夜はいつしかふけぬ。食終るや、主人氣轉をきかして、是より舟に案内せむといふ。いざとて、座を顧みれば、巨頭公あらず。先程の失策にしよけて、

いづこにか行きたるものと見ゆ。まさか迷ひ子にもなるまじとて導かる、まゝに、門前の堤を下りて船に乗る。河はこれ坂東太郎、船は四五石も積まるべき高瀬船、十人餘り乗りたればとて、乗りたるやうにも見えす。涼風、面を吹いて、快き言はむ方なし。空はくもりて、薄墨をながしたらむが如し。東天稍々あかるきは、月出でむとするにや。船を中流にうかべ、五六町さかのぼる。流山の人家、一帯の黑影となりて、二三の燈火、闇を破る。波靜かなる水面、時に大魚躍りて聲あり。船中には、一同思ひ／＼の處に、座をしめて、話聲、吟聲、闇の中に相和して高し。廣業、水蔭、蝶二の三人、最も酔ひて最も騒ぎ、こわいろより芝居の眞似となり、終に角力となり、笑ひどよめく聲、船に滿ち、淵底ふかくひそめる蚊龍も躍り出でむばかりなり。船をかへさむとすれば、水に臨める高樓、燈光のまた、くあたり、かんばしりたる二三人の女の聲にて、頻りに上陸せよと呼ぶ。魔窟なり。近づくべからずとて、酒汀舟夫をうながし立て、もとの岸に舟を着けて、酒汀の家に歸り來れば、夜は既に十一時を過ぎたり。一同舟中のさわぎにつかれてひとしく臥床に入る。中に廣業ひとり眠らず。水を呼び、ビールを呼び、元氣よくさわぎ居りしが、終につかれはて、眠りけむ、ぐうの音も出でずなりぬ。かくてはやいびきの聲も聞えはじめしが

余は目さえて眠られず。轉輾反側せしほどに、同じく酔うては眠られぬ蝶二、碁をうたぬかと云ふに、起き出で、碁を圍む。十回ばかり打つほどに、夜はあけぬ。蝶二句あり。

酒さめて碁にふける夜の明け易き  
さるにても、巨頭公は如何にかしつらむ。蝶二また句あり。

みじか夜を終に歸らむ男かな

句なると共に、巨頭公、飄然として歸り來る。昨夜川畔の旅店に往きて、飲み居りしに、遙かに君等の舟を見て、俊寛の思ひも管ならず。大に呼びたれど、聲ひく、して到らず。女をして呼ばしめたれど、舟は知らぬふりして過ぎゆきしこそ遺憾なりけれといふ。さては昨夜の女の聲は、君の命じて呼ばしめし所なるか。魔窟なりと聞きつるま、に舟をとめざりきと云へば、魔窟は隣の家なり。余のゆきたる家は、魔窟にあらず、あやしみ給ふことなけれ。余は午前三時頃までに、ひとりにて五本をのみつくし、終に酔ひ倒れて、とろ／＼とせし程もなく、蚊にせめ起されて、直ちに歸り來れるなりなど語るほどに、一人起き、二人起き、終にみな起き出でぬ。淺酌し、朝食して、立ち出づ。この日ひねもす鯉漁をなさむとするなり。舟は都合五艘、中二

艘を結びつけて、我等一同うち乗り、今一艘には、酒肴の具を載せて、料理人ひかへたり。他の二艘は、即ち眞の流舟にて、漁夫二人づ、乗れり。かくて網をうちつ、下流に向つて下る。流山の町をはなれば兩岸はみな蘆荻、行々子相和して啼く。半里餘りも下りたれど、未だ鯉を得ず。衆すこし失望せしが、酒肴はや舟中に陳せられて、杯の飛ぶこと頻りなり。天龍最もよく飲み、水蔭最もよくしやべる。なほしやべることにかけては、行々子にも譲らざる水哉あり。飲むことにかけては、はれの場所に出で、も、ひけを取らぬ犀東、蝶二、廣業、天隨諸子あり。揃ひも揃ひし剛の者、一樽の酒また、く中に盡きて、更に一樽を買ひ來る。酔ひ加はりて、笑話百出し、歡聲舟に湧く。一里ばかり下りたる處にて、はじめて一尾の大鯉を網し得たり。長さ二尺許、料理人の翁、頭白くして雪の如し。左手に潑刺たる鯉を握り、右手に快刀をとりて、一たび揮へば、忽ち頭尾處を異にす。鮮血流る、こと泉のごとく、頭上の白髪と相映じて、觀殊に奇なり。切りはなせる鯉の頭を俎上に立つれば、なほ口を動かす。身を切りて、あらひとなせば、肉なほ躍る。翁が敏捷なる料理、目さむるばかりにて、一尾の鯉直ちにあらひとなり、煮肴となりて、盤に上りて、十二人食するに餘りあり。鯉の大なること以て知るべし。あらひの皿に、蘆の葉を

折りてあしらひたるも、いと心き、たり。溶々たる利根の中流、行々子の聲を聞きつ、この鮮魚を食ひ、美酒を飲むの樂しみは、また何にかたとへむ。

既にして、鱸を得たり。之を煮、之をなますにす。その味、鯉に譲らず。下りくして松戸に至るまでに、なほ鯉四尾を得たり。この日の漁は、鯉鱸都合六尾、みな食ひつくすこと能はず。餘れる二尾の鯉は、廣業が家づとにとて贈られたり。日一日こゝろよく遊び盡し、飲みつくし、食ひつくし、興未だつぎざれども、日は漸く西に斜なり。初めて鯉をとりし時、一同雀躍しけるが、水哉、水陰の二子尻はしをり、頬かぶりして洲の上にはね廻りしさま如何にも無邪氣にて寫眞にとりたかりき。酔ひよく熟しける頃、片瀬の荒波に腕をみがきたる水陰、大河の中にをどり入り、童男童女の遊べる洲に泳ぎつき、曇々として喪家の狗の如き精赤條々がつつたちたるも、寫眞物なりき。この外おもしろき話しも、出來事も多かりしかど、天機を洩らすの恐れあれば、一々しるさず。

今や我等はなつかしき利根川に別れむとするなり。尾花ならぬ蘆荻、風にそよぎて、人を招く。川畔客去りて、行々子の聲益々しけし。斜陽影裡、醉歩蹣跚、身よりも三四倍長き影をふみつ、

舟をすて、停車場にいたる。酒汀送り來りて、來年の夏も、この樂しみを共にせむなど語る。水哉、犀東、花袋、北峽の四人は松戸より汽車にてかへり、酒汀は流山にかへり、餘の七人は、遊興いまだ盡きず、歩き歩いて歩きたばるまで歩かむとて、國府臺に向ふ。酒汀の贈れる鯉は、この一行の肩にあり。長き夏の日をあるきくらしめて、一旅店の門をたゞきて、例の鯉を着に、またひと夜をのみあかしぬ。さても揃ひに揃ひしのんきの七人、翌朝都にかへりて、兩國橋畔の酒樓に飲みけるが、のんきついでにこれから箱根に遊ばすやと水陰まづいひ出し、他の人々ほとんどみな之を賛成しけるが、獨り天龍首をうちふり、歡樂は極むべからず。この上は、第二回の懇親會にゆづり置きて、今日はこれにてひと先づ解散せずやといふ。成程よく考ふれば、馬鹿けたる事なり。さらばとて、第一回、懇親會の二次會も、こゝに全く終りをつけぬ。斜陽金を流す利根の水、行々子蘆荻に啼くの處、夢魂なほ飛ぶ夏の夜な〜。



冬の榛名山

大に酔ひて、洋服着たるまゝにて、寢につきたるは夜の一時半、五時の出發には間もなければ、少しも睡らむと思へるなり。平生は背つ張りの朝寢坊なるも、氣の張れる故にや、五時半に目さめたり。目さまし時計を五時にかけて置きたるに、なぜ鳴らぬぞと、いぶかりて、よく見れば、鳴らぬもその筈や、五時にかけてたるつもりなるも、大酔のあまりに、誤つて七時にかけてたるなり。さるにても、三十分おくれたるのみにて、早く覺めたるこそ仕合なりけれ。昨夜時間表を見て、五時五十四分新宿發の汽車あることを記憶す。それに乘らむとて、朝飯もくはず、起きたるまゝにて、飛び出で、新宿停車場にかけつけて、時計を見れば、五時十五分なり。發車までにはまだ四分ありと喜ぶ間もなく、停車場の時間表を見れば、これも大酔の餘りの見そこなひにして、つい數字の上下を顛倒して、五時四十五分の發車を、誤つて五時五十四分の發

車と思ひちがへたるにて、やれ／＼、汽車は、正直に、時間通りに、五分前に出發したるなり。次の汽車にのりて、田端に着し、前橋行の汽車に乗りかへむとするに、まだ三十分も待たざるべからず。仕方なしとあきらめて、ベンチに腰おろしけるが、渴を催して堪へがたきまゝに、停車場外に出づ。休息店多けれども、朝早ければ、いづこもまだ寢しづまりて、戸をあけさうにもなし。井戸をさがせど、見當らず。あゝ、苦しや、酔ひ覺めの水の味を知るものは、酔ひ覺めに水を得ずして、人一倍の苦痛を感じることもあるなり。

あちこち、ぶらつく程に、うれしや、一軒の戸あきたり、戸あくと同時に、とびこむ。いづこにても同じためし、起き居たるは、老婆一人、老爺は、なほ眠れるなるべし。起きたるまゝにて、火もなく、湯もわき居らず。餘り早く客にとびこまれて、却つて迷惑せるさまなり。火もいらす、茶もいらす、たい水のませよとて飲む。一盃、一盃、また一盃、都合三盃、また、くひまに飲み干して、はじめて蘇生の思をなしたり。寒き冬の朝、水を三盃まで飲むを、何とか思ふらむ。老婆にありては、何の造作もなきもてなしなれど、われにありては、仙宮にて玉漿をのむも斯くや。水をのまし、ばかりにて贏ち得たる意外の收入、けに、朝起きは、三文のとくのみにも

あらずと老婆さとり顔なり。

前橋にて汽車を下りて立ち出づれば、休息店の樓上、欄によりて、我を招く者あり。これ翠葉なり。相見て一笑して樓に上る。天隨、天溪の二人、しやも鍋をはさんで對酌す。既に酔へりと思えて、その色、鍋の下の火よりも赤し。われも之に加はりて飲むほどに、十二時を過ぎたり。

余が汽車にのりおくれたるばかりに、三氏をして、空しくこゝに二時間も待たしめて、洵にすまぬことしたり。旅の路伴、面白きこともある代りに、迷惑することもあるべし。

澁川まで四里弱の路、鐵道馬車にて過ぎぬ。そこより伊香保まで、凡そ二里、勾配緩なる路を、徒歩して上る。微雪となり、微雨となりし空、雪と雨とは收まりたれど、いたく曇りて、日の暮る、こと早し。さらでだに足弱き翠葉、病氣上りのからだをまてあまして、よその見る目も氣の毒なり。十歩に二三歩おくれ、十町に二三町後る。たび／＼待ちあはせてゆく。御蔭の松、名のみ高けれど、見るには足らず。毫も趣味なき路なり。伊香保近くなりたるほどに、重荷背負ひ、草鞋はきて、とぼ／＼とたどりゆく老僧あり。名所圖繪専門の翠葉とは、話しも合ふべく、足も合ふべしとて進みゆき、水澤村への岐路ある處にて待ち合はす。待つこと十分ばかりにて、老僧

はとぼ／＼と歩み來れり。翠葉は來らず。更に待つこと十分にして、漸く來る。あの老いばれの老僧までも、君の路伴にならぬかと云へば、平生ならば、このやうには弱らざれど、病氣は如何ともし難しと、淋漓たる流汗を拭ひながらあへぎ／＼語るも、苦しげなり。薄暮、伊香保につき、石坂惠十郎氏の旅館にやどりぬ。

あくれば、雪後の風、つよけれど、空はよくはれたり。翠葉は、直ちに人力車にて、四萬温泉にゆくつもりなりしが、病氣は、靈泉に洗ひ去られたりけむ。俄に元氣づきて、同行して、榛名山にのぼらむといふ。さらばとて、導者一人やとひて立ち出づ。町はづれに、寫真店あり。翠葉曰く、この遊びの記念に、一同撮影せずやと。衆、同意して、導者をして、おとなはしむるに、答へなし。導者、地下の室をのぞきて、聲高く呼ぶに、なほ答へなし。けに、田舎の心安き、一家の人はみな不在と見えたり。されば、歸るさに撮影せて、むと立ち去らむとすれば、向うの家障子開きて、出で來る老人あり。これ寫真店の主人なり。伊香保前に待つこと十分ばかりにて、寫真道具持ち來る。四人、石碑の前に立ちて撮影せしむ。地には、雪皚々たり。北風獵々として、耳も飛びさうなり。老人、寫真器を右にやり、左にやり、前にやり、後にやり、冬の日脚

の短きにも頓着なく、いそぐ旅なるにも頓着なく、凍えて死にさうなるにも頓着なく、田舎人の、のんきなのみならず、寫眞にも慣れざるらしく、經營慘憺としてやうやうと、うつし終れり。この間、凡そ二十分、寫眞の上の顔よりは、刻下の寒さをとて、外套の頭巾、目深くかぶれるに、他の三子、いづれも、襟巻もしくは頭巾を脱して、凛々たる寒風の中によそ行きの顔してすましこみたるは、年若きだけに殊勝けなり。

丸子山を右に見、二つ嶽を左に見て、上る路、三十町ばかり。けはしからねど、雪あるが爲に、歩みやすからず。人の足跡はなくて、處々三又の痕跡あり。荒鷺などの歩みしにや、北風よく吹きて、地上の雪、まき上げられて、空に繽紛たるに、寒さもわすれて、覺えず見とれたること幾度なるを知らず。坂路つきて、前には、圓錐形の榛名富士あらはれ、左に崔嵬たる相馬山あらはる。春にならば牛羊點綴するなるべし。一目茫茫たる高原、白雪、地をうづめて、未だ枯草を埋めず。摺碓岩を數町の外に見て、奇と稱し、榛名湖の東岸をめぐりて、快と呼び、天神峠に上り、前後を眺望して、絶景と叫びぬ。朱華表の傍、立錐の地、さ、やかなる掛茶屋あれど、人なし。顧みれば、周圍一里ばかりの榛名湖、堅氷結びて、一大明鏡を開けり。相馬山や、榛名富士

や、烏帽子岳や、鬢柳山や、硯岳や、掃部岳や、湖をめぐりて、それ／＼秀容をあらはす。深くは山をうづめぬ雪の、處々、日光にとけたるは、曉に起きたる女の面に、白粉の消え残れるが如し。湖畔、鹿角の如き枯木の間に、五六の人家點綴して一縷の煙のたち昇るも淋しげなり。前を見れば、谷ふかしくて、兩方に山高く聳ゆ。その間、自然の一大扇半ば開かれて、上の方には、富士、淺間をはじめとして甲信の群山、淡く描かれたり。下の方には、武藏上野の山々、濃く描かれたるが中に、怪奇なる妙義山、殊に目だちて見ゆ。翠葉を待ち合はすほどに、煙草を吹かしつ、前を望みては、また後を望み、後を望みては、また前を望み、幾度となく、くる／＼廻りしさま、たゞ是れ菓子のみせびらかす主人の手につれて、身を轉ずる狗の兒にやたとへむ。下ること數町、咽ぶがごとき溪聲を聞く。天神峠の朱華表を顧みれば、鼻孔、はや天に朝す。眼界頓に一谷に限られて、十町ばかり、趣味なき路を下りしが、左に深き溪を隔て、葛籠岩を望むに至りて、一種の奇景、また露はれ始めたり。數十丈の大巖、下は大にして、上は小に、累累として、落ちむとして落ちず。その様、鴨の首を延ばせるが如し。其側に、具足岩あれど、これは山壁の骨をあらはせるものにて、さまで奇とするに足らず。路、溪と直ちに相接するに及び

て、こゝに始めて榛名神社の裏門に達す。溪の面、氷りて、水、その下を流れて聲あり。溪身、一落する處、氷缺けて、清泉迸出す。狭き谷の、溪畔巖側、また餘地なきまでに、祠宇巍然として立てり。神門に入らむとして、先づ驚く。笱の如き大巖、直ちに門にそひて、轟々として天を刺す。之を鉦が岳と稱す。門内、右に社務所あり。左に鉦が岳に接して、雙龍門あり。八つ棟造りの建築、精巧を極め、龍の彫刻、神に入り、鬩羽と張飛との彫像相對して、英姿颯爽たるを覺ゆ。門を入りて、また驚く。祠後鉦が岳よりも更に高く大なる奇巖ありて、幾んど落ち來らむとす。之を御姿岩と稱す。恰も人の懐手して、首を前に傾けて立てるが如し。如何にして上りしにや。その肩のあたりに、幣帛の立てるは、例の人をおどかさむとする神官の惡戯なるべし。拜殿、直ちに巖下にあり。本殿の半ばは、巖腹に入る。祠宇可成り高けれども、なほ巖の四分の一にも足らず。巖の高大、想ふべし。拜殿より連なりて、右手の前に國祖殿あり。更に國祖殿に連なりて、拜殿と相對して、神樂殿あり。三字ほとんど凹字形をなし、後に峭壁を負ひ、前は溪に臨めり。結構壯麗にして、彫刻の精緻、人目を惑眩せむばかりなり。神門を出で、行くこと數十間、小支溪に神橋かゝりて、朱欄、碧巖と相映す。橋畔の巖を、覗き岩と稱す。小溪の兩岸、大巖、

相接して長く連なり、のぞけども、その盡くる所を見ず。橋をすぐれば、左に袖すり岩あり。右にも大巖ありて、相觸れむとして、觸れず。その間わづかに人を通ず。巖腹の凹みたる處に、賽神社の小龕を安置す。巖の中より滴るしづく、滴りしづて、凍りて大氷柱をなし、小龕を圍みて、白玲瓏たり。三重塔の側を過ぎ、老杉の間を行きつくせば、左に溪を隔て、鞍掛岩を見る。小さく警ふれば、土瓶のつるの如く、大きく警ふれば、虹の如き奇巖なり。御祓橋を渡れば、隨神門あり。や、荒れたり。門外、數十の茅屋、山中に一寒村をなす。この隨神門より葛籠岩まで、凡そ十町、せまき谷あひにて、一道の清溪、白玉を躍らし、兩方の山、多く骨をあらはして、鞍掛岩、鉦が岳、御姿岩、葛籠岩を最も奇とし、その他、奇石怪石、一々數ふるに遑あらず。三重塔、連なれる老杉と高さを競ひ、畫橋縹渺、朱欄水に映じ祠殿宏壯、丹碧燦然として、峭壁の間に、光彩を放つ。自然の奇、人工の妙、よく相配合して、まことに天下有數の靈境なり。

一 旅店に入れば、恰も好し。一家の人、午食をすましたる處にて、つめたき客座敷よりは、むさくるしけれど、冬の山里の唯一の馳走、いざ入らせ給へとて、勝手の間、爐側をわれら一行に譲りぬ。いぶる生木に、都の紳士の知らぬ涙催さるれど、主人のいふに任せて草鞋のまゝにて上

り、足を爐に踏みのばす心安さ、火の上にかざす手よりも、心先づあた、まじたり。自在かぎに懸れる鐵瓶に、爛德利入れて、薪を加ふれば、やがて松濤起りて、酒香座にほとばしる。されど、例の田舎酒、到底酔ひを買ふべくもあらざれば、多くは飲まず。天溪も、酔うては歩かれずとて、多くは飲まず。いつも薄々の酒も茶湯に優るとすまし込む天隨も、多く飲まざりしは、これも酔うては歩かれずと氣づかへるにや。はた多少宿酔の氣味ありしにや。

歸るさ、榛名湖までは、同じ路を取りぬ。はじめおもへらく、榛名湖を眺め、天神峠を越え、榛名神社を看て歸るのみにては、尋常一様の遊蹤なり。相馬山か榛名富士かに上り、且つ沼尻川にか、れる辨天瀧を見むと。されど、出發の時刻おそかりしかば、日既に西に傾きぬ。榛名富士に上らば、辨天瀧は閑却せざるべからず。瀧を看むとせば、山は閑却せざるべからず。終に瀧を探らむとて、こたびは、湖の西岸を通りて、榛名富士と烏帽子山との間の峠を越ゆ。今や、なつかしき榛名湖とは別る、なり。別る、にのぞみて、一言、湖底に恨みを呑みし佳人の香魂を弔はざるべからず。

三百年前の夢の跡、干戈天下に旁午せし戰國時代に、木部宮内少輔忠近、あへなくも、上野國

群馬郡白井の城主、山名大膳重友に攻め殺され、その妻の立田、幼兒龍若丸と家臣実倉朝興とをつれて、泣く泣く難をこの山にさけて、湖畔に草庵を結びてひそみけるが、神ならぬ身の、かくとは知る由もなく、頃も今頃なる天正十三年の冬十二月、山名大膳は、從者數人をつれて、この山に獵し、はからずも、立田の草庵に休息し、從者のもて來れる酒あた、めて飲みなす。立田は年二十七八、絶世の美人にて、櫻ならば、満開の花、咲きも遅れず、散りも初めぬ風情、えも言はれず。大膳、一見恍惚として、酌させけるが、酔ふにつけて、抑へきれぬ匹夫の本性、あたり名花をむなく山奥に散らさむよりは、わが庭にうつして、手活の花と見はやさむと、みだりがはしき獸慾の嵐を柳にうけて、たしなみある女の、うはべには、すけなうもはねつけざるに、ますますつづりて、其歡心を得むとてや、たかや小さき城の主なるを、鼻うごめかして名乗り出せば、立田はじめて知る、嗚呼、これ不俱戴天の夫の讐敵、われは木部宮内少輔が妻、覺悟せよとて斬りか、りたるは、健氣なれど、悲しや、かよわき女の身、却つて返りうらにせられ、幾多の重創を被りて、鮮血淋漓たるに、今はこれ迄とて、われと我が身を躍らせて、空しく湖水に沈みけりとかや。

又俗説の傳ふる所によれば、のち二年を経て、子の龍若丸、穴倉朝興の力をかりて、山名大膳を伊香保に斬り殺して、父母の仇をうちけりとかや。されど、湖底の怨魂は、終に、之を知らざるべし。當時圓光上人、怨魂を慰めむとて、湖水のほとりに、龍體院殿白山貞性大姉と題する墓をたてたるよしなるが、斷碑、今何の處にか存する。行人時に古を弔へば、榛名湖の名物なる菖蒲の花、徒らに美人の佛を忍ばしむるのみなるべし。峠を下るに、斜に北に向へる處とて、積雪解けず。深さ一尺にあまれり。例の翠葉、大に疲れて、歩すること遅々たり。吹く風さむし。あとにて待ち合はすことにして、先づ暖を得むとて、天溪と共に走り下る。下りて、岩蔭の風の當らぬ處にて休むこと多時なりしが、今日の導者、年若うして、山の名岩の名など、よくは知らず。書物の上にて知れる我らが、却つて教へてやるくらるにて、導者の用をなさず。すべて榛名山上の路は、わかりやすき路なり。この具合ならば、導者を待たずとも、辨天瀧に至りて、待ち合はすことにせむとて、歩みかくれば、辨天瀧へのかむには、その手前の路を右折せざるべからずと、後の方より呼ぶ聲す。顧みれば、天隨、翠葉、導者の三人、案外に早く來りて追ひつけるなり。もし導者來らずば、とんでもなき方角に出づべ

かりしを、恥かしやく、妄りに人を侮りて、剛愎自ら用ひまじきものなり。

右折すれば、間もなく、辨天瀧を得たり。崖には氷柱を帯び、溪畔の石、みな氷の衣を被りて水晶宮の觀あれども、もと四五丈の小瀑、わざく來て見るべき價値はあらず。されど、下る路には、獅子岩の奇あり。顧みて、榛名富士を仰げば、完全なる三角形に尖り、谷いよく深うして、山いよく高きの概ありて、觀殊に奇なり。この山、之を湖の南畔より眺れば、その容温乎たるが、この谷あひより眺むれば、一變して峭乎たり。廬山八面の比にはあらねど、南北二面より眺めて、はじめて、榛名富士の觀を逞しうすべきなり。

歸路、また七重の瀧を見る。七折すといへば面白けなれど、二三尺に過ぎざる小瀑が、數重なれるのみなれば、辨天瀧にだに比するに足らず。溪畔、亭ありて、人なし。夏は、暑を避くる遊人の爲に賑ふなるべし。

薄暮、伊香保に着す。此日の行路、わづかに五六里に過ぎざれど、翠葉、弱りに弱り、青さめたる顔を、まうろく頭巾につみ、びつこ引きながら、牛の歩みを運ぶやうになりたるもあはれなり。そのつかれ、浴してもなほ愈えざりけむ、われらの快く飲むをよそに、早く蒲團の中にも

ぐりこみぬ。大に飲みて、盃を収めむとしたりし頃、主人出で來りて、更に座興を添へたり。われらを文人と知りて、なつかしげに話をもち出し、酒までもて來て、もてなすこと、ねんごろなり。田舎の口き、らしく、ほろ酔ひ機嫌に、口も軽くなりて、快く飲み、快く談す。細君も呼び給へといへば、憐れみ給へ、既にやもをとなりたる身なりといふ。さらば、息子なり、娘なり、一家の方々を呼び給へと云へば、それも呼ぶべけれど、君等に伊香保唯一の文人を紹介せむとて香山樓の主人を呼び來らしむ。この人、温泉業の片手間に、操觚の事に従ひ、文の舎とて、狂歌の老匠なり。娘も來りぬ。一座にぎはしくなるにつれて、翠葉も眠られざらむ、衾中より頭をもたけて、口を開きはじめたるさま、さながら龜の子の首をふる如し。かくて、一同如何に氣を吐きけむ、酔うて知らず。あくる日、立ち去らむとすれば、文の舎、使に兎一匹もたせて贈り來り手紙一つ添へ、手荷物に煩はしかるべけれど、例の坊主持ちとやらも、亦一興なるべしとて、狂歌までよみ加へたり。返事くれよといふに、手紙のみにては返事にならじとて、漸くひねくり出して、み、す書きの手紙の末に、

思ひきや冬枯れはてし伊香保根にかゝる言葉の花さかむとは

古くさき歌も、旅の恥はかきすてなり。

われらは、今や、伊香保を去らむとす。心ある人に一夜のやどかりて、慣る、もつらし明日の故里と詠じけむ。宿のあるじの情のみならず、自然の風致も世になつかしき處かな。伊香保の地は、日本有数の温泉場なり。戸數四百、三四町の間に層々鱗次し、伊香保神社に至りて盡く。温泉の源は、七八町上の溪間にあり。家々、樋を以て之を引き、浴槽に湯瀧をなす。その末、出で、水車を轉じ、更に下りて、田畝に灌ぐ。地高うして、眺望開け、夏、暑さを知らず。蚊帳をつらす。山下の澁川までは、前橋と高崎とより、鐵道馬車あり。澁川より二里、人力車を通す。泉質は、炭酸泉にして、殊に胃病に効ありとぞ。われ年來、胃を病めり。浮生半日の閑を得ば、こゝに來りて、優遊せむかな。

まして、三十町ばかり上れば、榛名湖あり。天神峠の眺望あり。榛名湖畔の奇觀あるなり。榛名山とは、榛名湖をめぐる山稜の總稱にして、烏帽子、鬘、硯、掃部、氷室、摺碓など、みな舊噴火口の外輪山なり。その中の榛名富士は、後更に噴出したるものなり。最高峯を掃部賦となす。高さ、五千尺に近し。南に、鏡臺山あり。東に、二つ嶽、相馬山、水澤山あり。みな寄生火

山なり。相馬山、峻峽を極め、頂上の眺望最もすぐれたりと聞けど、天神峠の景色に對すれば、既に甕を得たるなり。されど、われはなほ直ちに伊香保を去るべからず。天下の名瀑、船尾瀧を見ざるべからざるなり。

翠葉は、車にて四萬温泉に向ひぬ。余は、天隨、天溪二子と共に、裾野を横にめぐること一里ばかりにて、水澤觀音に到る。坂東第十六番の觀音なり。屋根は葺葺なれども、結構は凡ならず。古色を帯びて蕭散なり。なほ水澤山の裾野をめぐりて七八町行けば、裾野一落して、溪谷をなす。前は、船尾山なり。鋸齒長く連互す。その水澤山に接せむとする處の最上部に、船尾瀑か、りて上の半身を露はす。涯を下り、溪に沿うて上る。谷あひいよく、せまくなりて、瀧ますく、近し。瀧の音も聞え初めぬ。日かけなれば、谷の氷の結べること厚し。幾多の支溪、全くこほりて、地に細長き銀板を横たへたり。人、その上を踏みてゆく。心地すがくしけれど、誤つてすべらば、谷底に轉落すべし。辛うじて、足と手とにて歩みて、瀧壺に近づくことを得たり。瀧の高さ二十丈と稱す。山の頂上より直下す。崖をつたひて、落つる水もあれば、瀧の口の石に激して、躍り上つて、崖に觸れずに下る水もあり。相錯綜して落つ。夏にならば、水量更に多かるべし。高さ

に於て、既に關東有數なり。懸崖にかこまれたる瀧壺も、幽邃の趣を極む。殊に崖を傳ふしづくは、凍りて、崖を白うし、傳はざるものは、とがりたる氷柱となりて、千萬の劍鋒を列ねたらしたるが如し。夏ならば、それとは見えざるべき水のした、り、氷に大きくあらはれて、船尾山の上下よりかけて、いくつとなく、縦に長大白線を引けり。氷にすべる恐れはあれど、冬ならば、かゝる奇觀はあらざるべしと覺えぬ。この瀧、高く山の頂上にかゝるを以て、二三里隔たりたる澁川あたりより望むことを得べし。日光の華嚴を第一流の瀑布とすれば、こは、關東に於て、第一二流よりは下らざるべき名瀑なり。

船尾瀑を觀て、榛名山の遊びも、こゝに終りぬ。十二月三十一日なり。天溪はこの日の中に、東京へ歸らむとし、余は天隨と共に、明日を期して、赤城山にのほらむとす。澁川の旗亭、鼎坐して杯をあけ、斜陽の影に、天溪と手を分ちぬ。四人の同行、今は二人となりて、なほ酒とわかれず、夜ふかくまで痛飲し、文の舎の贈れる兎を煮て、之を食ひつくすと共に、卯の年をも送りぬ。



### 城崎温泉の七日

#### 一 観音寺

四五日、酒が續きて、今朝は、頭があがらず。手足をうごかすも、ものうし。漸く起き出で、は見たるが、とても坐つて居られず。朝早くよりの事なれど、これでは、どうにも、仕様が無し。今、ひと眠して見むとて、うとくせしほどに、十二時を過ぎたり。今はとて、起き出で、東道の主人なる結城善堂の家に駆けつけければ、遅塚麗水、久保天隨二氏、朝より來りて待ち居りたれど、終に待ちくたびれて、既に立ち出でたり。されど、國府津まで行きて、次ぎの關西行きの汽車を待たむと云ひおきたりといふ。さらば、國府津にて相逢ふを得べし。相逢ふを得ずともおちつく先は、但馬の城崎温泉、ひと足おくれるまでの事なりと、たかをくくりて、國府津まで行けば、日既に暮れたるが、うれしや、三人は待ち居りたり。

間に東海道を行きつくして、夜の明けたるは、大阪あたりなりけむ。朝日たゞよふ須磨の浦波を見れば、さすがに夜汽車につかれたる目も、心も、忽ち蘇生の思をなす。踊るに似たる青松の外、鏡よりも平かなる海の上、白帆も稀れに、淡路島あまりに、さやかに見ゆ。明石に至れば、淡路島は、あまりに近し。突兀として天を摩する天主閣に近づきて、車とまれば、こゝは姫路驛也。城で持つと歌はれし名古屋城趾には、金の鱧もあるべけれども、停車場を距ること、やや遠し。こゝは、近くして、雄姿、人に逼まる。汽車より見るの古城趾としては、名古屋よりは姫路を取るべし。

姫路より乗り換ふれば、一車室は幾んど同行四人の専有となりぬ。路は川に沿うて、山は左右より通る。生野まで僅か十里の程としては、小なる停車場、うるさきまでに多し。城崎の産なる善堂、汽車の通せざりし前に、この街道を往來せしこと幾度なるを知らず。或時、郷にかへらむとて、姫路まで來りしに、囊中わづか數錢をあますのみなれば、徹夜徒歩せしこともありきなど語る。生野、々と呼ぶ處にて、善堂、左方に近き寺を指して曰く、當年、澤卿を奉じたる平野次郎一味の義士が、銀山の官廳を襲はむとて勢揃をなしたる観音寺なりと。嗚呼、銀山の擧、成

らざりしといへども、云は、これ百花に魁するの梅花也。秦漢興亡の際にて云へば、十津川の義士と共に、これ陳勝吳廣也。陳勝吳廣ありて、然る後に、項羽、漢高あり。成功者の前には、いつも多くの犠牲あるかと思へば、われ平野等の志を憐まざるを得ず。蓄堂又曰く、山田顯義伯、甥の南八郎の亡き跡を弔らむとて、に立ち寄り、誤りて銀坑に陥りて死せり。されど山田伯の如き名士が銀坑に陥るでは、相濟まざるを以て、病死として世に傳へたるなりと。成りて怪我死するも、成らずして自殺するも、死に、かはりはなしなど、感嘆に堪へざりしに、蓄堂、右方、巨碑のある處を指して曰く、これ當年の義士南八郎等が勢窮まりて自殺せし處也。

二 竹田城趾

朝來山を右に見て、竹田を過ぐ。蓄堂、左方の山を指して曰く、これ竹田城趾也。竹田城は、もと山名宗全の居りし所也。のち、山名宗朝に至りて、豊臣秀長に攻め落さる。赤松廣道、秀吉に屬して、こゝに居りけるが、秀吉の死後、石田三成に與みして、田邊城に細川幽齋を攻めしことあり。關ヶ原の一敗の後、廣道は、進退にまどへり。徳川家康あまねく石田の殘

黨を亡ぼさむとす。龜井茲矩、家康の命を奉じて鳥取城を攻む。茲矩、廣道を誘うて曰く、われを助けて、鳥取城を陥れなば、その功を以て、家康に請ひて、君をして安堵せしめむと。廣道往いて助けたり。城かたくして抜けず。火攻によりて、終に降りたり。その代りに人民も多く死したり。家康よろこばず。茲矩を責む。茲矩罪を廣道に歸す。廣道死を賜はれり。

廣道は、かくて、あつけなき最期を遂げて、その家もその城も亡びたるが、よく民を治めて、人心歸服しければ、三百年後の今日にいたるまで、その祭祀なほ絶えざる也。廣道は、戦國の際に、早くも文教を興したる明主にして、藤原惺窩に師事せり。惺窩之に詩を呈して曰く、

能化ニ人心ニ務攬レ雄。右レ座講レ學得ニ精窮。君家更秘赤松術。有レ待成功似ニ祖風。廣道の死するや、惺窩は文を作り、歌三十首を詠じて、之を弔へり。その一節に曰く、赤松左兵衛佐廣道は、ゆかりある主にて、もとより親しかりけるが、一とせ、世の亂れし時龜井の何がし、しこちことに由り、罪なくて切腹せしが、年比秘めおきし書物など形見に残して、文いとねんごろに書きおくりけるを見て、斯くばかり終たゞしき筆の跡を

見る甲斐もなく亂れてぞ思ふ  
神無月おもふも悲し夕霜の

置くやつるぎのつかの間の身を

刃のくだけてし身を鴛鴦の

をしむ甲斐なく我ぞなくなる

廣道の知己といふべし。出石藩の高橋確堂が竹田城趾を咏じたる古詩の中に、

可憐因城火攻階三語訴。伏し劍聊謝赫々怒。誰記遺澤一弔三冤魂。八岡山下表墳墓。憶

古徒瀉行旅涙。千秋難霽因山霧。

これも廣道の知己也。櫻井舟山も、木村暢齋も、廣道の傳を作りたれども、いづれも徳川氏に媚ぶるの態なし。殊に暢齋曰く、

其朝黨三成。暮屬三枚。必有故矣。而事跡湮没不審。今無由知其詳。惜夫。

これ武士道を以て武士を律すべし。必ずしも武將を律すべからずとの意をほめかしたるものにて、これも廣道の知己也。ひとり篠崎小竹の廣道の傳に曰く、

聽レ讒殺三人於無辜。東照公必不レ然焉。則廣道之死也。或晩矣。

嗚呼俗儒は、唯、權勢に媚ぶる事を解す。而して天下の英雄を誤る。小竹は頼山陽と親しかりけるが、人物氣骨は、雪と炭也。小竹は書を賣るの儒商也。廣道の傳を作るが、抑の間違也。竹田には、太田六右衛門といふ志士を出したりき。平野次郎に與して、終に獄中に死し、從五位を追贈せられたり。これ廣道と性靈の相呼應せるもの也。世には、小竹の如き俗物多し。而して天下の事は、萬古かゝる俗物と共に談すべくもあらざる也。

### 三 池田草菴先生

生野銀山は、中國山脈の一部にて、山陰山陽の分水嶺也。その水の南するものは、市川となり、姫路城下を洗うて、播磨瀨に入る。北するものは、はじめ圓山川の名あり。豊岡を経て豊岡川の名あり。城崎温泉に至りて城崎川の名あり。一にまた蓼川の名ありて、終に日本海に注ぐ。長さ十六里。この川の流域が、即ち但馬の國なりと云はむも可也。銀山や、竹田や、和田山や、八鹿や、宿南や、出石や、豊岡や、城崎温泉や、みなこの流域に在り。宿南に至りて、菴堂、左方、

山麓の一字を指して曰く、是但馬聖人と呼ばれたる池田草菴先生が道を講じたりし青谿書院也。蓄堂の説く所に據れば、蓄堂は草菴先生に學ばむには、年まだ餘りに幼少なりき。當時、但馬の青年にして、草菴先生の門に入らざるものは、人に非ずとまで言はれたり。但馬のみならず、天下四方より來り學べるものも多かりき。北垣國道、久保田精一、その弟、讓、貫一、濱尾新、原六郎、西村敬藏、井上光、土屋鳳洲、吉村斐山、楠本礪水など、みなその門人にして、人材も多く出でたれば、學者も多く出でたり。久米次郎氏養子となりて、其後をつぎ、今、豊岡中學の教員也。但馬は小國のわりには、維新以後多くの人材と學者とを出したるが、それには、いはれがあるべしと思ひしに、草菴先生の青谿書院は、問ふまでもなく、その一大原因也。草菴先生の青谿書院の記の中に曰く、

夫奉身入山者。固無意於當世矣。然而不能無意於百世之後者。亦有志者之或所不廢也歟。

後世に意ありとは、名聞の末にはあらざるべし。學者人才のみにあらざるべし。智巧の世、人心は下つて禽獸と伍せむとす。嗚呼草菴先生、一たび逝きて、また聖人を生ぜざるか。蓄堂ま

た説いて曰く、久保田精一氏、豪爽の資を以て、維新の初、徴士となりて官に出で、その弟の讓、濱尾新など、多く後進をひきたてたることも、但馬が人才を出したるの一原因也。

なほ原因は無きかと問へば、加藤弘之博士は、幼にして、鼻ツたらしなりき。あの鼻ツたらしが天下の學者となるならば、我輩の子弟とても、豈に之れに譲らむやとて、人々、その子弟の教育に力をつくしたることも、或は一原因なるべしと、うはさしあへりといふ。誰か知らむや、世には、十歳で神童、二十歳で才子、三十過ぐれば、たゞの人となるもの、多きことを。

豊岡は、圓山川の流域の最もひろき處にて、言はゞ、但馬の中原也。もと、わづか一萬五千石の小藩なりしかど、濱尾、久保田の二大臣を出したり。和田垣博士も、この小藩より出でたり。京極氏の城趾はと問へば、別に城としては無かりきといふ。されど、産物には、有名なる柳行李あり。人口は一萬に近く、但馬第一の都會にて、その富も四隣を壓すとの事也。

豊岡を過ぐれば、線路は直に圓山川に沿ふ。左右の山、直に水溜より起る。川の幅ひろし。否、川と云はむよりも、江といふべし。但馬の國の小なるにも似ず、圓山川の下流は、大陸的也。この風致は意外に感じて、覺えず心躍る。生野銀山を越えてより、山陽方面とは急に變はりて、殘

雪を見しが、いよく北すれば、雪はいよいよ多く、城崎にて停車場を出づれば、滿地みな雪、四面の山、みな雪に封ぜらる。圍らざりき、山陰第一の靈泉の地は、斯く雪に天地を清めて、我等の一行を迎ふる也。

四朝嚴和尚

關東にては草津、畿内にては有馬、四國にては道後、北陸にては山中、中國にては城崎、これ古來天下に名を馳せたる温泉場也。草津には、總湯もあれば、内湯もあり。關東に温泉多きが、總湯の無き處はありとも、内湯の無き處は無し。有馬や、道後や、山中や、城崎や、皆唯總湯ありて、内湯は無し。即ち宿屋には浴湯が無くして、共同浴場が別にある也。

橋本屋の三層樓上に迎へられ、先づ何よりはとて、著堂の案内にて、一の湯と稱する總湯に赴く。城崎に總湯が五つ六つあれども、その構造の最も壯大なるは、この一の湯也。今の内務大臣當年、衛生局長たりし後藤新平男の『澤被萬世』と書せる額が玄關に掲げらる。泉質は、亞爾加里性の鹽類泉にて、最も儂麻質斯に効ありといふ。可成りの温度ありて、之を飲むに、味頗

る美也。

浴し終りて歸り來れば、日は暮れむとす。著堂曰く、君等、夜汽車に疲れたるべし。今夜は、旅に疲れたればとて、有志者の訪問を謝絶したり。氣兼ねなく、勝手に飲みて、勝手に寝よと。酒出づ。膝くみて放談しつ、飲むの快さは、旅にひとときは也。殊に一晝夜汽車乗りづめの後にひとときは也。橋本屋の主人を安田貞吉といふ。著堂の舊學友也。一寸挨拶に出でしが、氣を利用して早く去れり。油筒屋の主人西村六左衛門氏も來りしが、これも氣を利用して早く去れり。成程、畜堂の言へるが如く、我には、夜汽車の疲れあり、殊に數日來の宿醉もあれば、微醉を帯びたる處にて、御免被るとして、蒲團の中にもぐり込むより早く眠つて仕舞へば、罪も無し。麗水、天隨の氣烟如何を知らず。

明くれば、朝湯に、身を清め、一杯飲みて、温泉寺へと立ち出づ。同行四人の外に、助役の松村靜雄、安田貞吉、西村佐兵衛、伊賀多三郎諸氏も共にす。温泉場の盡きむとする處、小なりと雖も、擬寶珠を備へたる橋を渡れば、兩行の石燈籠と松とが路を夾みて、左右は田也。田も直に盡きて山也。前面も山也。一段高まりて山門あり。畜堂説明して曰く、仁王は運慶の作、末代山

の勅額は、寶鏡寺宮の御筆也。正面に藥師堂あり。右に十王堂あり。金毘羅教會の會堂あり。左の菴室には、芭蕉翁の像あり。裡にて作りたる偉大なる笠もあり。蓄堂曰く、茶翁といふ俳人、この大笠の下に芭蕉翁の像を奉じて、歩きまはりたり。城崎には、俳人少からず、安田氏の如きもその一人也。有志相圖りて、東山公園に芭蕉堂を作りて、この像を安置することになりたりといふ。芭蕉翁の遺徳大なる哉。生前の物質界に屈して、身後の精神界に伸ぶ。若し子孫ありしならむには、その慶、必ずや延びむ。

三町ばかり山路を上れば、山の中腹開けて、上に多寶塔あり。下に大悲殿あり。これ温泉寺の本堂なり。千年以前の建築に係る。古社寺保存建築物に編入せられ、本尊の千手觀音は、國寶に加へられたり。多寶塔の構造も、亦觀るべし。塔畔の眺望、殊に住也。城崎の人家、脚底に在り。後の峯を甘雷峯といふ。その峯東に延びて、愛宕山に連る。その間を八十八ヶ所に擬す。凡そ一里の間、南より東へかけては、蓼川を見下し、北には日本海を見渡して、風景よしなど、例の蓄堂説明す。

本堂より廻廊にて、別當坊に連る。山僧の案内にて本堂に入り、くさぐさの寶物を見て、書院

に休息す。蓄堂曰く、十年前までは、朝嚴といふ名僧が住み居りたり。雲照には兄弟子也。雲照は少しは出来る。われ死なば、佛敎亡びむなど、自から任すること大なりき。一室に座して終年動かす。二疋の蛇、常に來り慣れたり。二十年前、重野安釋博士來り訪ひしに、汝は、學問が淺ければ、まだ分らぬくと、博士を子供あしらしにしたりといふ。その時も、例の蛇が居りければ、博士一絶を作りて曰く、

明治戊子夏、到城崎温泉、一日遊温泉寺、寺主朝嚴講大小乘二頗詳、席上有二雙蛇、訖談不<sub>レ</sub>去、句故及<sub>レ</sub>之、

磴道攀來雲幾層、塵談半日對三山僧、胡牀不<sub>レ</sub>掃雙蛇臥、只合三點頭聽二大乘、  
城崎は、古來名士多く來り遊べり。殊に學者文人の遊べる者多く、従つて詩歌も多けれども、この詩ばかり奇抜なるものはあらず。詩の奇抜なるは、即ち朝嚴の奇抜なる也。さるにても、明治の世にも奇抜なる名僧がありたるもの哉。

五 玄武洞

但馬の玄武洞か、玄武洞の但馬か、但馬の山水は、玄武洞あるを以て、天下遊客の心を惹く。而して玄武洞は城崎温泉を距ること一里ばかりに過ぎず。温泉を主にして云へば、玄武洞は城崎温泉の一景物也。

温泉寺よりの歸るさ、極樂寺を訪ふ。本堂の唐紙や、對立や、すべて畫也。即ち稻嶺の畫也。蕭白の畫もあり。されど、多くは摩損して、折角の名畫も、空しく湮滅せむとす。惜しむべき也。午食の後、東山公園に逍遙し、玄武洞へとて、小さな屋根舟に乗る。同じく乗るもの、同行四人の外に、橋木屋の主人、麗水の所謂菩薩式美人、酒を行る。右岸、水に接して石碑立てり。例の菴堂説明すらく、これ柴野栗山の句を刻せるもの也。その句に曰く、

風零詠歸山吐月、濯纓歌罷水揚瀾

今一つの石碑には、村瀬藤城の詩を刻せり。もと茲に一亭あり。栗山之に命名して半夜水明樓と云へり。爾來、文人墨客の城崎温泉に浴する者、必ずこの亭に來り遊びて、栗山の遺韻を追慕せしが、今は、こぼたれて跡方も無し。栗山、老御病をこの温泉に養ひしが、土地の人は、たいの一老人とのみ思ひ居りたり。元來、城崎は、幕府の代官の居りたる處にて、土人の代官を視る

こと君主の如し。然るに、栗山は寛政三博士の筆頭にて、將軍の顧問なれば、代官などよりも、すつと上の身分也。されば、土人の君主視する代官が、栗山に向ひてひよこく頭をさぐるに、さては、栗山は代官よりも上なる天下の大儒なりしかと、土人始めて氣が付きたりといふ。大陸的の蓼川、水澄みて、波起らず。兩岸の峯巒、倒に影をひたして明か也。日は西に傾きて、半夜ならずとも、水明の光景を呈す。汽車の轆轤、山の彼方に消え去つて、天地寥廓たり。一路水に接して、赤毛布行き、紅裙行く。みな水に映じて、鼻目までも辨すべし。親子にや、一つの舟に、老女と少年とが乗り居りて、親は水中の粗朶を引き上げ、子は襁褓にて之を受く。あれは、何を取るぞと問へば、蟹を取るなりと云ふ間もなく、その舟に近づく。何の事やらさつぱり聞き取れぬ言語にて、しばし語りあひしが、終に數個の錢、彼舟にゆきて、數個の蟹、此舟に來る。菩薩式美人、直に之を燒きて出す。蟹ほど、うまきものは無しとて、麗水その甲を解きて、快けに食ふ。蟹を左手にし、杯を右手にしたりけむ。畢卓の筆落なる風姿さへ忍ばれて、江戸兒と聞きつるが、これは、まことに三河武士の血を傳へたる江戸兒なりと、些細なる事にも、人となりが見えてゆかしく、魚腥を好まざれば、食ふ氣にはなれず、唯その快けに食ふ様を看に、われは

杯を傾く。

舟を玄武洞下に繋ぎ、上陸して、洞内に入る。水より起れる一山の脚が呀然として口を開ける也。想像したりしよりは、や、小さく感じたれども、相並べる三洞、あはせて數百人を容るゝに足る。中央の洞は、水たまりて小池を成す。夏日の清冷、想ふべし。別に洞外にも、飛泉懸る。洞壁は木材を束ねたるが如し。洞の天井を仰げば、一面に、六角形を成せる石が相連りて、落ちむとして落ちず。この洞もと石山と云へり。石材を探りたればなるべし。石柱洞とも云へり。洞壁の形容也。蜂巢洞とも云へり。洞の天井の形容也。栗山來り遊ぶに及びて、玄武洞と命名し、それが一般に通用するやうになりたりと聞く。玄武とは、龜の事なり。これも洞の天井の形容也。今一層深く且つ廣からばと、望蜀の念なきを得ざりしが、栗山遊びて、名所となりしより、石材を探ることを禁じたりと聞き、成程と合點が行きて覺えず一笑す。欲を云へば、果てもなければども、とにかくに、玄武洞は、天下奇を好む者の必ず一覽せざるべからざるもの也。

六 小車漣

昨日は、玄武洞を見たり。今日は、日和山に赴かむとす。玄武洞も城崎温泉の一景物なるが、日和山も亦城崎温泉の一景物也。

同遊は昨日の顔ぶれなるが、酒を行るものは、變はりて、今日は、最もよく歌ふといふ老女也。舟夫も舟と共にかはれり。

蓼川を下りて、絹卷山に立寄る。絹卷神社は、但馬五社の一とかや。材木石が山骨となる。その山骨、祠前にあらはる。掘り取らばこゝにも、一種の玄武洞が出来るべし。

津居山港に出で、左して瀬戸に入る。老女は舟に残して、五人は陸に上る。潯陽江の風致は知らざれども、この女、琵琶を抱かば、白樂天の琵琶行をつくりなりなど、下らぬことを思ひ浮ぶ。頂福寺の門をくぐる。残雪、地に在り。「由良さん、おいで、手の鳴る方へ」とはやしつれて、十數人の子供走りまはる。男もあり、女もあり、嬰兒を負へるも交れるが、悉くみな素跳なるはさすがに、都の少年には見られぬ光景也。一二町のけば、日本海、右に開けたり。三景亭と稱す



る茶亭に至りて休息す。こゝが即ち眺望を以て有名なる日和山也。

脚下、左右にかけて、奇巖虎踞し、熊蹲す。巖上には老松躍り、巖下には怒濤狂ふ。見渡す日本海は、渺茫として、其盡くる所を知らず。一髪の青螺、淡くして無からむとするは、隠岐の島なりと、著堂説明す。茶亭の主人、年五十ばかり、髪あらくして堅立し、顔青くして額骨高し。船を浮べて、小車の瀧を見むと思ふが、舟が出されるやと問へば、海上を睨んで、今日は駄目也。あれ見られよ、海面黒くして、白き點多し。沖は荒れ居るなりといふ。起つて、右方を指點して、丹波は雨なり。若狭は曇れりといふ。その風姿、如何にも颯爽也。柴野栗山の文に、

文化四年六月初十日、征夷府待問儒員讚岐柴邦彦々輔、同播磨高見恭、本州醫生黒崎擇等來遊、左右睨隠岐佐渡及三越於肘腋、望滿州女直於雲天之外、把酒、浩然有二曠世之懷、門人三上順、及兒允升從、

この一文は、この日和山より一里許り西なる竹野濱にて作りたるものなるが、簡勁にして雄大、さすがに大家の筆致也。その栗山の意氣込を學問なき人に寓したるが、即ちこの老翁の風姿なるべしと、世にも痛快也。

海面は黒くなりまさる。これでは、船は出されぬかと、下りて瀬戸に來れば、船が出されるといふ。うれしきこと、言はむ方なし。別に船を雇ひて、北海怒濤の中に乗り出す。さきの船は、川船にて、海には出づるを得ざるもの也。日和山下を過ぎて西す。日本海のこととて、絶壁、怒濤と相闘ふ。巖のさま、怪奇幽峭を極む。凡そ半里、御待山、縦に裂けて、一道の飛泉、中腹より凡そ三折して、下りて直に海に注ぐ。小車瀧といふ。船にて來るに非ずんば見ることを得ざる一奇瀑也。齋藤崎庵の詩に曰く、

一帆波穩駕長風、遙見丹崖掛白虹、宇内瀑泉雖不乏、未聞飛沫灑洋中、  
千島には、直に海に注ぐ日本一の大瀑ありと、たゞ、人の話に聞く。小車瀧のさまは、崎庵の詩に盡きたり。

沖いよく黒くなりて、浪いよく荒し。ぐずぐずして居りては大變なりとて、船夫あわて、船を回す。船中、麗水一律を賦す。専門家の著堂、天隨をさしおいて、小説家の麗水の詩が先づ成るとは、頗る意外也。その詩に曰く。

日華山上望滄溟、靺鞨那邊一髮青、風動蜃樓鵬影黑、潮涵鮫室淡烟腥、天孫遯古

劍留踏、歌聖於今詞有靈、長嘯夕陽天渺々、水心彷彿老龍聽、

七 東山公園

今日は、午後、演説せよといふ。よしよしと受けあひて、朝、淺酌の後、運動にとて、橋本屋の主人に導かれて出づ。温泉場の入口に孤丘あり。辨天山といふ。その山下に、越中二郎平盛嗣の墓と稱する石塔あり。志賀劔川が、

欲訪遺踪寫斷腸、千年佳話付茫茫、落花滿地但州路、何處一杯醉二郎、  
と詠じたるは、これにや。壇の浦にて、平家全滅せし後、盛嗣は姓名を變じて但馬の人、氣比廣道に事へて、厩卒となる。一刀、腰に在り。丈夫豈に空しく死なんやの意氣込なるべし。其女に通ず。道廣、その盛嗣たるを知りたれども、措いて問はず、道廣京師に行く。盛嗣従ふ。もとの妾の家に遊ぶ。妾の家之れを源氏に告ぐ。道廣源氏の命を受けて、力士數人を遣はして、其の浴するに乗じて之を圍ましむ。盛嗣罵りて曰く、奴輩、遁れむとすれば、即ち遁れむ。されど、主人を煩はすを欲せずとて、泰然として縛に就きて、終に斬られたりとは、普通の説なるが、一説

には、この城崎にて捕へられたりともあり。道廣の居りたる氣比の地は、絹卷山の彼方也。赤松滄洲が、

斗膽曾稱壽永年、孤墳空鎖北溟烟、英魂若作大鵬去、重見圖南擊九天、  
と詠じたるは、よし。青山訥齋が、

斗膽重泉下、孤墳豐水濱、英魂猶鬱結、匕首既沈淪、空作三窺仇客、竟非二殉國臣、  
悠々何限恨、千歲且傷人、

と詠じたるは、恐らくは、英雄の心中を知らざるものにやと思はる。  
本住寺より磴道を攀ちて、日和山に上る。昨日遊びたる瀬戸の日和山と、名同じうして、處異なれり。一路東して、東山公園に至る。城崎附近の山水の景致はこゝよりの眺望の中に收まる。蓼川洋々として南より来る。水の幅ひろく、蘆荻しけりて、水郷の趣あり。山直に水より起るは、とても關東には見られぬ景致也。玄武洞の對岸あたりを二見ヶ浦といふ。伊勢の二見ヶ浦と同名也。兼輔朝臣が、

夕づく夜覺東なきを玉くしけ

二見の浦は明けてこそ見ぬ

と詠じたるは、この二見ヶ浦の事也。宗祇法師は、春の頃、伊勢の二見ヶ浦に遊び、秋になりて、この二見ヶ浦に遊びければ、

花を東月影西に二見かな

少し下流の右岸を結の浦といふ。その下の方、東に深く入り込みたる一灣を樂々浦と稱す。夫より北、靴掛山は横はり、太白山は立ち、絹卷山は低く水溜に鬱蒼たり。蓼川の左岸、南に高く天を衝いて、一大巨人の觀あるは、但馬第一の高山なる來日嶽也。大谷川西より來り、東山の麓を洗うて蓼川に合す。その大谷川の兩岸が、即ち城崎温泉の地也。辨天山、關門の觀あり。東山より西に連りて、秋葉山となり、これと相對して、愛宕山あり。その愛宕山西に連りて甘露峯となる。温泉寺の本堂や、多寶塔や、遙に樹間に見ゆ。北方を顧みれば、西に入り込みて、桃島湖となる。山ふところに、人家數十あり。こゝは別天地の中の別天地也。土民湖中に船を泛べ、大砲と稱する一種の漁具にて魚を取る。その桃島湖の蓼川に相合する處は、水あせて田となる。孤丘の桃山は、もとの一孤島なりしなるべし。なほ北すれば、絹卷山と相對して、津居山あり。わ

づかに瀬戸の水をへだて、一島皆山、一山皆島也。漁戸二百ばかりあり。そこにて、蓼川の末が、津居山港となりて、帆檣の林立せるを見る。その末は限りも知られぬ日本海也。東山公園の眺望は、宛然一幅のパノラマ也。

午後一時の約束が、延びて三時頃とやなりけむ。金毘羅教會の會堂に赴きて、同行四人、演説を爲す。外に、今井農學士の演説もありたり。歸路、瀧田清兵衛、由利由人二氏に要せられて、鶴鳴樓に飲む。聞く、瀧田氏は豊岡第一の富豪にして、由人は豊岡俳人の氣焔家なりと。歌妓數名出で、絃歌未だ發せず、主客未だ觀を盡さざりしに、先約なりとて、蓄堂に導かれて、西村六左衛門氏の家に至る。珍藏の書畫を見る程もなく、盛饌出づ。やがて、唐紙を隔て、管絃の聲起る。歌ふ聲は副はず。祇園ばやし、單に、はやしとも稱へて、如何にも悠長なる音樂也。主、主たることを忘れ、賓、賓たることを忘れて、打解けて快く飲む程に、いつの間にか酔倒したりけむ。朝、目をひらけば、われ唯一人、西村氏の客室に臥し居りたりき。

八大石陸子

今日は、豊岡へとて、いで立つ。瀧田氏は、昨日、城崎へ來りて、われらを饗し、今また我等をその家に招く。さらでだに、妻の父は、舊豊岡藩士也。豊岡は我に於て、夙に夢魂の飛びし處也。

豊岡驛に下れば、有志の人々來り迎ふ。昨日の氣焔家の由人、余の肩を叩いて曰く、城崎などには見るべからざる美形數人が停車場内に居りたるを見たりや。曰く、見たり。曰く、あれは豊岡の美形をより抜きて、君等を迎へさせたる也。

瀧田氏の銀行の俱樂部に小憩して、一同正福寺に至る。大石内藏助の妻、陸子の遺跡を弔らはむとする也。

陸子は、豊岡藩の家老、石東源五兵衛每好の女也。赤穂藩の家老、大石内藏助良雄に嫁して、三男二女を生めり。第一は男にて、即ち主税良金也。次は女子、その次は僧元快、その次は女子、その次は良恭也。末子の良恭は、良雄に別れて後に生める所也。赤穂の國難起るに及び内藏助は良金を伴ひて京師に赴き、陸子は二女一男をつれて豊岡にかへり。これ夫妻親子が一生の見納の秋也。夫と長子とは君に殉せむとす。陸子は二女一男を擁して、夫をして後顧の憂なからしめ

むとす。夫も夫なれば、妻も妻也。當時の陸子の心中を思ひやれば、何人か涕淚無きを得むや。一死、もとより武士に於ては、何でも無し。されど、後顧の憂は往々、鐵石の腸を寸斷す。當時同盟に加はりし連中にて、腰を抜かしたるもの少なからざるが、かゝる人々の事情をさぐりて見れば、或は、後顧の憂が加はり居りしなるべし。内藏助をして後顧の憂なからしめたる陸子は、賢なる哉。

陸子の祖父每術は、軍學の師なるが、職をその子に譲りて後、この正福寺を建てたり。英雄首を回せば即ち神仙、思ふに、熊谷直實と、ほゞ同型の快男子也。陸子が豊岡に歸りし時には、祖父は無し。父の每好、既に職を其子每明に譲りて、正福寺の住持たり。次男の元快をして僧とならしむ。元快とは、僧となりての名也。良雄父子切腹の報至りて、陸子、尼となる。年三十五。翌年、長女死し、後五年、元快も死す。年わづかに十九。残るは一男一女。男の良恭は藝州の淺野家に抱へられて、千五百石を食めり。凡物には非ず。女は、淺野監物の妻となれり。良恭藝州候に事へてより、陸子も藝州に赴けり。元文元年十一月十九日に死す。年六十八。その墓は、廣島の國泰寺に在り。石束氏は每明が直諫の故に、その家亡びたりと聞く。豊岡の正福寺に、陸子

の墓あるは、何人が建てたるにや。正福寺は陸子の祖父の創めし所、而して、陸子が夫と長子との菩提を弔ひし處也。寺に陸子の位牌あり。香林院華屋壽榮大姉とする。佛前の鈴には、享保三年陸子の寄附せし由をしるせり。良雄の位牌もあり。忠誠院及空淨劍居士とする。良金の位牌もあり、超倫院及上樹劍居士とする。超倫院はこゝの位牌にのみありて、泉岳寺の墓には無し。けにや、年十五にして、身長五尺七寸、容貌魁梧にして、天成の大勇を備へたり。超倫院とは、その當を得たる哉。末子の良恭も、その器量、良金に譲らず。かゝる偉丈夫を生みたる陸子の人となりも、實に思ひやらるゝ也。

歸るさ、瀧田清兵衛氏の家に饗應せられて、大に飲み、夜ふけて城崎に戻りぬ。

九鶴の詩

橋本屋の後、大谷川を隔て、石東氏の舊屋と稱する古き建物あり。何故に豊岡の石東氏の家が城崎にあるぞと問へば、石東氏斷絶の後、志ある城崎の富豪、その家の木材を運び來りて、もとの通りに建てたりといふ。何故に、石東氏の家を運び來りたるかは、問ふまでも無し。陸子の

貞節を慕ふ也。なほ進んで、陸子の夫大石内藏助等四十七士の義烈を慕ふ也。

大石内藏助の妻の生れし家なりとて、石東氏の舊屋を難有がるにても、城崎の氣風を知るべし。靈泉ある上にも、山あり、川あり、海ありといふ温泉場は、他に多く求むべからず。況んや、立武洞あるをや。又況んや日和山あるをや。蓄堂頻りに夏日舟遊の快味を説く。けに、さもあるべしと思はるゝ也。

蓼川に接し、日本海へ近ければ、河海の珍味に乏しからず。四面山なれば、山さちも多し。出石の出石焼、豊岡の柳行李も、こゝに求むべく、城崎には、別に桑細工が有名也。なほ麥蘘細工の精巧なること、到底、大森の麥蘘細工などの比に非ず。殊に余が驚きたるは、この地に長壽者の多きこと也。城崎は人家三百、人口二千人には足らず。さるに、毎年、例として、養老會を開き、七十歳以上の老人を集むるに、出席する者、八九十人の多きに上るといふ。温泉の効もあるべけれども、病は氣より起る。心だに平らかならば、人は必ず長命なるべき筈のもの也。

橋本屋の主人曰く、われら同業者は、さきごろ、畿内、中國、北陸、四國、九州の温泉場を見廻りたり。奮つて文明の進歩におくれざるむことを期すると共に、在來の質樸の氣風を失はざら

むことを期すと。從來、人の多く集まる處は、人情が浮薄也。殊に日本人は近ごろすき弊あり。今われ主人の言を聞いて、ますく城崎の前途を樂觀す。

麗水は、賢くも、酔中の狂態を演ぜずに、早く切り上げて、瀧田氏の席より歸京の途に上れり。その翌日、われは、宿醉に苦しき腹を抑へて、主人の求むるまゝに、いろく書きちらしたるついでに、

桂月漁郎醉似泥

と書けば、天隨は直に、

天隨嗜昔氣如霓

とつゞく。蓄堂、その次に、

蓄堂仙俠醒還飲

とつゞけ、結局は、橋本屋の主人の俳句にをさめて、鶴の詩が出来たるも、旅の一興也。余の「泥醉」の「泥」は、世人往々泥濘と解すれども、そは誤れり。動物の事也。即ち海鼠の事也。即ち、酔うてぐてんくぐにやぐになることが恰も海鼠の如しとの意也。天隨の「霓」は、説明の限りに非ず。

酒にくらし、酒に明かして、知らず、幾日をか過したりけむ。いつまでも、安閑として居らるべくもあらざれば、蓄堂は残して、天隨と共に、一足お先へとて、城崎を去る。われらの來りし時、蓄の紅梅一枝、床の間の花瓶にさゝれたるが、見る見る一輪さき、二輪咲き、終に我等の去る時には、満開となれり。恰も我等の爲めに開きたるが如し。可憐なる花かな。城崎温泉の前途よろづ足りそはむこと、此花の如くなれと祈る。

### 雪の草津

#### 一澤渡温泉

關東平原の西につくる處、赤城、榛名の二大山、恰も關門の如くならび立ちて、坂東太郎の名に負ふ利根の大河が其中間を流る。實に天下無比の壯觀也。山の中心に、火口湖あると云ひ、群峯の簇立せると云ひ、山の恰好までが、二山全く相同じ。唯赤城がや、大にして、榛名がや、小

也。赤城を兄とすれば、榛名は弟也。赤城の前にある前橋がや、大にして、榛名の前にある高崎がや、小に、赤城の後をめぐれる利根の本流がや、大にして、榛名の後より來れる吾妻川がや、小に、利根郡の都會なる沼田がや、大に、吾妻郡の都會なる中之條が小なること、山の大小に相應するも、また奇也。唯、赤城方面には、温泉なし。榛名には、伊香保といふ有名なる温泉場を控へたり。なほ吾妻川を溯りて、吾妻郡に入れば温泉甚だ多し。實にこれ關東に於る温泉國也。從來、草津、四萬、澤渡、川原湯を吾妻の四温泉と稱せり。其他、鹿澤、川中、萬座、花敷など、温泉到る處に涌く。その中にも、むかしより、西の有馬か、東の草津かと云はれ、「お醫者さんでも草津の湯でもわしの病氣は愈りやせぬ」と歌はれしほどにて、草津の名、最も高し。草津の温泉に、糜爛を生じて諸種の體毒を去り、身體がつかれるれば、去つて澤渡なり、四萬なり、川原湯なりに浴して、その糜爛をなほし、健康を補ふやうになり居れり。自然の配合も、亦妙なる哉。赤城の西北麓なる沼田に一夜やどりて、曉、乗合所にいたりて、時間馬車を待つ。時間は來りたれど、馬車は發せず、田舎は田舎だけに、悠長なるもの哉。二人の小兒、登校のさまして前を過ぎけるが、忽ち喧嘩をはじめ、一兒泣き出して、袖にて顔をおほひながら、とぼくと歩く。

その泣く兒は、草蓑をさけ、着物もよく、草履もよし。他の兒は、きたなげなる風呂敷包をさけて、着物も、草履も悪し。五六人の生徒どや／＼來りしが、さすがに弱を扶けて強を挫くの同情心は、子供にも、そなはりて、「なぜ泣かした」と、威嚇すれど、肩を上げ、氣を張りて、多勢にも屈せざるさま也。勝ちし子強きか、泣く子弱きか、社會は、鬭争の場とは云へ、才と力とのみが、武器には非ず、力を持つて才なきもの、才を持つて智なきもの、智を持つて徳なきもの、豈に竟に大に勝たむや。支那の詩人も「剛強必死仁義王」と歌へり。

時間馬車にのりて、利根の右岸を下る。學校行きの生徒、ぞろ／＼來る。ふと、今日は、日曜日なることを思ひ起し、「日曜なるに、どうして學校へゆく」と、大聲に問ひて見たれど、一兒ふりかへりて、につと笑ひたるのみにて、答は言はざりき。鯉澤にて、馬車を下る。吾妻川の利根川に會する處、かねて、澁川よりの馬車の沼田と草津方面とへわかる、處也。茶店に就いて聞けば、一時間も待たねば、馬車來らずといふに、さらばとて徒歩す。左に吾妻川を見る。濁るとまではあらざれども、利根川の清きには比ぶべくもあらず。これ温泉のわざ也。聞けば、利根川には、香魚を産すれども、吾妻川には産せずとぞ。村上村にいたりて、右の方直に路に接して、

巖の峯の參差錯落せるを仰ぐ、崖腹に觀音堂あり。岩井堂としてこのあたりに名高き勝地なるが、妙義を見たる目には、さばかりの事も無し。堂前の茶店に休息し、飯のにゆるを待つ間に、爐にあたりて酒を飲む。黄梁一炊の間に、盧生は五十年の榮華を夢みたりけむ、白米一炊とでも云ふべき間、さても、まのあたりに、いろ／＼の人を見ること哉。五六人の馬方去るかと思へば、新婚の披露にとて、一老女、飾り立てたる少女をつれて来る。ほんのかたばかりの挨拶して、去るか去らぬかに、われに尻むけて飯かきこめる女房、箸を動かしながら、「かあいさうに、年が若くて、飾り立て、は居るが、母よりは、數段下の器量だ」と、すぐに蔭口たたく。その女房は、小ぶとりに引しまりて、色白く、口は揃ひたるが、氣と小才とが餘りに鋒鋭を露はし過ぎて、器量自慢が鼻先にぶら下り、思慮は淺さうな女也。少女が白粉の香を残しゆきたる跡に、白鬚高懸被布を着て、風骨稜々たる一老人來て腰かく。尋常一様の村民にはあらずと話しかけて見れば、果してこれ橘守部の孫弟子との事也。われに二三首の歌かきて示す。この人歌をつくらむには、餘りに剛骨あり。お世事にも褒められず。力瘤入れて、非難するまでの事もなしとて、たゞ難有うと一禮して袖にをさむ。「何處へ」と問はる、に、「中之條を経て、今宵は澤渡にやどるつもりな

り」と云へば、「われも中之條までのく身なれば、同道仕らむ」といふ。「馬車來らば、或はお別れして乗るかも知れず」と断りおきて、午食を終へて共に發足す。七八町ゆく程に、馬車後より來る。われは乗らずともよしと思ひしが、老人氣を利かして、馬車まで呼び止めてくれたるに、さらばとて、別れて乗る。突然話しあひ、突然相別る。形は所謂悠々たる行路の人なれど、われは、この翁の稜々なる風骨を忘る、能はざる也。

中之條にて乗りかへ、下澤渡にて四萬温泉への路と別れ、晩方澤渡温泉に着きて宿る。温泉宿二軒、總湯をかこむ。別に旅店あり、料理店もあり。温泉場は、どこも夏は繁昌すれど、秋は寂し。夜、ひとり杯を傾くるに、絃聲聞ゆ。聞けば、唯一人居残れる藝者の徒然を慰むるなりとぞ。

## 二 大岩の瀧

朝食の出来る間にとて、宿を出で、散步す。澤渡温泉は、狭き谷にあり。されど、一寸天神山に上れば、眺望や、開けたり。天神の祠あり。道祖神とて、石の表に、抱きあひて立てる男女を刻み出せり。女の風と云ひ、髪結び方と云ひ、元祿時代の駈落としか見えざるもの也。



澤渡より暮坂峠へ二里、この峠より小雨へ二里、小雨より草津へ二里、草津まで都合六里と稱す。一日の旅程としては、至極氣樂なりとて、朝おそく發足す。右に巖の山に孤立して紅葉の點綴せるを仰ぐ。人に問へば、曰く、有笠山也。

凡そ一里も來つらむと思はる、處にて、右に巖の二峯を見る。右折して、十町ばかり行けば、巖腹に不動の祠あり。この間、老杉の竝木ありけるが、多くは切られたり。祠の別當、この頃賣拂ひたりとの事也。澤渡の一風景を損せるは、惜むべき也。祠は、成可りの大さあり。左に數十間のけば、飛流百尺の絶壁より滴る。水量少なければ、『疑是銀河落九天』とも云へず。仰げば、けに天より落つるかと思はるれど、水は、ほんの雫也。日光之を射て、虹を生ず。巖には岩蔭生ひたり。喬杉數株、瀧と高さを争はむとす。巖頭の木は、霜に染みて赤し。風なきに、一葉落つ。右へひらり、左へひらり、ひらり／＼と、地に着するまでには、大分手間取る。又一落つ。幾秒かゝると、時計とり出して、巖頭を仰げば、あひにくなものにて、十分あまりも待ちて見たれど、落ちさうにも無し。時計を納めて去らむとすれば、微風來りて、五六葉同時に落つ。村店に酒を得て、ゆる／＼午食をすまして暮坂峠に達すれば、『例の峠の茶屋』唯一軒あり。休

息して時計を見るに、午後二時に間も無し。今朝、澤渡の宿を出でしは、午前九前なりき。大岩の瀧へ十町ばかり迂回したれど、二里の路に、五時間もかゝるは、餘りゆつくりし過ぎたり。どりや、これから急がむと思ふ處へ、一人の旅人、茶屋へはよらずに、すた／＼と急ぎゆく。もともと脚の早きを持みし身也。十分後から發足して、何分にて追いつくかと算術の問題にありさうな事を、まのあたり、演じて見むと思ふも、我れながら、若い哉。青年時代には、旅行するに、人を追ひこすとも、追ひこされし例なし。唯或時、晩方、驛近くなりて、一人の男を追ひ越したるに、その男、それとさとりて、脚を早めて余を追ひ越す。余更に脚を早めて又追ひ越す。あとになり、さきになり、無言の裡に競歩をつゞけしが、敵もさるもの、我が脚力終に屈しぬ。我は終日十里以上も歩きたる身也。敵は、まだ、さうは歩いては居らざるべしと、驛得手勝手に、己れを心に辨解せしこと、今にして思へば、齒のうく次第也。茶店を出で、眼を放つに、西に近く白根山を望み、東にや、離れて、榛名山を望む。附近は、みな草の山にて、眺望のよき峠也。十分と思ひしが、八分にて程に上りて疾歩す。三十分にてやつと追ひつく。一時間にて、草津川をわたりて小雨村に達す。路は二里あれど、下り路也。これよりなほ二里、こんどは上らざるべから

す。疾歩をつゞけしが、下り坂のやうには急かれず、やうやうと一時間半にして、草津に着きて大東館にやどりぬ。

### 三 雪の白根山

草津温泉に一夜とまりて、明くれば、白根山に上り、萬座温泉に出で、吾妻川に沿うて下らむと思ひしが、あひにく雨也。ならば晴天に上りて、眺望を縦にせむとて、室にとちこもり、いろいろ草津の案内記をとり寄せて讀む。「草津温泉療法」といへるは、坪谷水哉の序あり。著者は、下屋學氏、草津に住める醫師也。逢ひて、いろく草津の事問ひたくなりて、往いて之を訪へば、下屋氏も、其夫人も、我文を讀める未見の知己也。喜ぶこと甚しく、一見舊知の如し。白根登山の事を語りけるに、同道せむといふ。思ひがけずも、面白き路を得たり。路伴は、なほ増して都合十二人となりたり。下屋學氏、その夫人、補習科の教師佐伯正氏、小學校長の川村新次郎氏、寫眞師の富澤仙二郎氏、その小僧、中村屋の娘、小林亭の息子、半玉、知らぬ浴客二人、これ也。七千尺の白根山上、一尺の雪を踏み、美人の酌に、快く酔ひて、關東の山野を見下すと云へば、

如何にも大袈裟に聞ゆれど、實は草津より白根の絶頂まで、三里と稱す。そのうち二里は、巖越の路にて、馬も通る也。あとの一里も、ただらく上る路にて、一日が、りとしては、至極氣樂なる遠足也。

草津より北を指して、白根山腹の高原を十町ばかりゆけば、下に一溪路を横切りて流る、を見る。右手の絶壁に向ひて、オーイと云へば、オーイと答ふ。鸚鵡岩とて、有名也。紅裙隊は、小林亭の息子をつけて先き立たせたが、こゝに來れば、遙に前方に行くを見る。後隊にて、岩にオーイと呼びかくる聲を己れを呼ぶものとや思ひけむ、鸚鵡岩の外に、またオーイと答ふ。思ふに鳥や獸の鳴聲は、人間のオーイ也。鳥獸は、たゞ雌を呼ぶ爲めに、オーイといふ。人、山中に入れば、同行ならぬ人を見ても、なほオーイと呼ぶ。愛情は、鳥獸も之を有す。博愛の趣を解するに至りて、はじめて人間の人間たる所以は見ゆる也。

後を見れば、淺間山六里の裾野をひかへ、雄姿堂々として煙を噴く。その裾野の東端に鼻曲山を起す。恰も二段鼻の如し。榛名山は、掃部、榛名富士、相馬、水澤の諸峯簇立し、赤城山は、黒檜、地藏、荒、鍋割の諸峯簇立し、武尊山は高く孤立し、男體山は最も高く連山の彼方に頭を出

す。前には澁峠、天半に横はる。元白根は左に見ゆれど、白根の本山は、未だ見えす。元白根も澁峠も、雪を帯びて白し。『蟻の戸渡』にて、女隊に追ひ付く。左右は深谷也。安積良齋の紀行には、こゝに至りて、戦慄して、躊躇せしことを記したるが、聖代の難有さ、今は棧道さへ出来て、毫も危険らしくも無し。當年とても馬が通りしとあるより推すも、例の神經過敏に失する文人誇張の筆法なるべし。途上遙に一瀑布を見る。常布の瀧といふ。や、行きて、右折すれば、近くなりたるが、なほ、さしわたし五六町もあり。富澤氏曰く、『今見え居るは、三分の二だけ也。下方より溪を溯らば、瀧壺にいたるべし。一日が、りの仕事なるが、白根山に上るよりも、すつと困難なり』と。直下十二三丈ぐらゐるかと思はる、可成りの瀑布也。一溪流また路を横切る。川村氏曰く、『これが有名なる毒水也。高野長英その毒水なるを知りて、碑を立て、後人を戒めけるが、その碑は、明治十五年の噴火に埋れたり。五百金を懸けて、搜索せしめたれど、終にわからず。代りの石碑を立てたるが、馬鹿者がこの通りに破壊したり』と指すを見れば、碑の上半部のみ残りて、路傍に倒れたり。馬鹿者の一言に力を入れたるに、一同覺えず笑ふ。澁峠近く前に見えて、路平らかに、一高原を成せる處、一軒の小屋あり。芳ヶ平の茶屋と稱す。ひと先づ休息せ

むとて、中に入れば、爐に火燃えて、旅の女一人當り居たり。我等を見て、何とも云はず、にやにや笑ふ。『何處から来た』と問へば、『澁温泉から』と唯一言いふ。『草津へのゆくか』と問へば、黙つてうなづく。夏はこゝにて茶を賣る由なれど、冬は、住む人なし。燃料の堆きは、何人の情けにや。しばし火に當りけるが、小蓋の池の浮島を見むとて女隊は残りおきて、富澤氏、導を爲す。處々に小池多し、水、草原にしみわたりて、足いと冷たし。茶屋より凡そ二町にして達す。ほんの小さな池なり。浮島あり。草一面に生ひたり。ひろさ一坪までは無し。われらが立てる岸も、水上にうかべり。切り去らば、島となるべし。水は濁れりとはあらねど、紺色を帯びて凄涼あり。富澤氏と小林亭の息子と二人にて浮島に乗り、丸太にて棹して、池の中心に出でたるが、水忽ち二人の臍を没して、浮島の舟、あはや、沈落せむとす。岸にあるもの、手に冷汗を握る。されど、全體は沈まず。一方が沈めば、一方浮く。二人、浮きたる方へ移れば、沈みて、他の一方浮く。あちへ移り、こちへ移りつ、棹して漸く岸へつくことを得たり。一同ほつと胸なで下す。深さも知れたものにて、命に別條は無かるべけれど、この寒天に全身水に没してはと氣をもみたる也。『夏は三人にて乗りても、こんな事は無きに』と、富澤氏小首を傾く。小林亭の息子、再び

一人にて浮島に乗り、われらは岸に立ちて、撮影を待つ間も、足の先つめたくて、ふるへあがる。終るを遅しと、急ぎて茶屋にかへり、先づ足をあたゝむ。二本の正宗は爐の中へ置くに、自然に爛がつきたり。三つの大杯を飲める口の男五人の間にまはす。半玉酌してまはる。山賊の一群里から婦女を掠め来て、酒宴を張るに似たりなど笑ひ興す。

頂上へとて、少し戻りて右折す。燒石路に錯落して、頂上の一隅、枯木の末に高し。路は急ならず。硫黄小屋を過ぎて、路少し急になりたるかと思へば、早や頂上の湯釜の岸に立てる也。小さき火口湖、湛ふるは、水にあらずして湯也。湯氣高く天に上る。一風かはりたる活火山也。火口壁を右につたひゆけば、左にまた一つの池を見る。瑠璃池と稱す。めぐりくつて、湯釜の壁をも過ぐれば、また一つの池あり。水釜と稱す。湯釜を中央にして、三小池相並ぶ。大さほゞ同じく、まはりが三四町に過ぎず。三池を總括せる火口壁は、十四五町もあるべし。足を投ずればぐざと少し地に入りて、毫も滑る心配は無し。東にや、離れて、弓池を見下す。四池、いづれも、火口の池となりたるもの也。火口小に、外壁の傾斜も緩にして、散歩がてらにまはりても、氣持よし。言はゞこれ箱庭的活火山也。この日、關東方面は霽れたれど、信越方面は、一面の雲也。

頂上の最高峯の地蔵ヶ岳も、雲につまされたり。その地蔵ヶ岳の眺望をとて、雨に登山を延ばしたれど、人力の如何ともすべきにあらず。山に縁なきものと諦むるの外なき也。

夏ならば、暑さの爲めに苦しむべけれど、頂上に雪ある頃は、上り易し。下りは、なほ更らく也。草津に歸れば、草津郵便局長の市川安一郎氏發起者となりて、有志の人々、わが爲めに、歡迎會を小林亭にひらく。冬ごもりにさびれたる草津の一谷、絃歌涌きて夜を徹す。山下の村には天狗、夜出で、亂舞すとや聞えけむ。

#### 四 草津温泉の二十五日

われ草津温泉に滞留すること、二十五日に及びぬ。

草津温泉は、温泉場として、天下無類の特色を有す。在來、温泉と云へば、必ず先づ指を草津に屈せしも、偶然に非ず。東京に硫黄花をわかす風呂あれば、必ず草津の名を冠するを以て見るも、その草津の効能が世に知れわたりたるを知るべし。されど、東京の諸處の草津温泉の白濁せるを見て、本家の草津も亦然るべしと思はゞ、これ大に誤れり。本家の草津温泉は、すき通る許

りに澄んで居る也。硫黄も含み居れど、游離硫酸、游離鹽酸等を多く含めり。酸性泉にして、かねて硫黄泉なるもの也。酸性峻烈、強く人の體を刺す。梅毒あるものは、言ふも更なり。無きものとても浴し居れば、必ず「たゞれ」を生じ、あらゆる病毒を驅除し去る。言はゞ、これ人の身體の噴火にて、灸をすゑると同じ筆法の東洋的療法也。「たゞれ」出来ては、微温湯では、却つて疼痛を感じ。これに於て、時間湯なるものあり。その數、六七、各、湯長ありて號令して、三分間を限りて入浴せしむ。一同揃つて、板にて湯を揉む間に、運動もすれば、湯氣をも呼吸して、けに一舉兩得のみにあらず。その時間湯の熱度、百二十三度より百二十五度に及ぶ。「あらか可笑し風呂へはひるに號令かけて、揃つて三分、改正の二分、残つて一分、ちつくり御辛抱、辛抱のしどころで飛び上る」と云へる俗語は、よく簡單に時間湯の有様を説明せるもの也。時間湯の外、總湯もあり、内湯もあり、湯瀧もあり。温泉の性質の強烈なるのみならず、涌出の量の多きこと、實に天下無比也。湯畑を始め、白旗の湯、地藏湯など、いづれも直に小川を成すばかり熾に涌出す。西の河原の如きは、温泉、絶壁より出で、流れて溪となり、かゝりて瀧となる。草津川は全くこれ湯の川也。

草津は、明治以前にありては、關東唯一の遊山場なりき。今の大磯、箱根、夏の角筈の十二社などに淺草公園を加味したるやうなる者なりき。十返舎一九の草津往來に、「林下の桐屋の酒店、騷客集ひて絶えず。山中と雖も、生簀の鮮魚の鰯振るあれば、難波屋、美濃屋も是を調理し、旅客の徒然を慰む。揚弓、吹矢は、美婦を選びて、矢取とし、軍書講釋、落咄は、名家を請じて興をなす」とあるを見ても、繁昌推して知るべし。十七條の湯瀧並びかゝりて、湯舟には、數百人を容るべく、遊女屋さへありて、白根山腹に一大樂園を現出したりし也。のち、いつしか、草津の本區は花柳病患者の「たゞれ」を出す處となり、谷下の湯の澤は、癩病患者の巢窟となりぬ。花柳病に靈効あること、入浴者一般に認むる所也。癩病にも効能ありと見えて、こゝに浴し居れば、如何なる難症のものとても、決してくづる、ことなしの事也。湯の澤の御座の湯の側に、白旗祠あり。源頼朝を祀る。頼朝は、こゝに浴して癩病が愈えたりとて、崇敬せらる。あ、清和天皇の御胤、源氏の謫流、六十六國の總追捕使、源頼朝公は、とんだ處に、思ひもかけぬ功德を施しけるもの哉。

草津温泉は、花柳病と癩病とのみに非ず、心臟病、肺病を除きては、あらゆる病氣に靈効あり

といふ。近年は、病人以外の遊山客も増加したる由也。海拔四千五百尺と稱す。先づ、恰好の避暑地也。白根の山腹、方一里にあまれる高原、春は蕨生ひ、秋は尾花招く。薬研の如き温泉場を擁して、赤松立ち、落葉松つらなる。後は、白根の本山、低うして見えざれども、遊峠、元白根の高嶺、天然の屏風をめぐらす。入山、小雨、大津、長野原、羽根尾の諸村、遙に脚下に低し。六里ヶ原の彼方には浅間山煙を噴き、暮坂峠の彼方には、赤城や、大に、榛名や、小也。高原を少し上れば日光山も見ゆ。霧れし日、白根か、元白根から上らば、富士も見ゆべし。花も紅葉もなけれど、秋は野草の美あり。五六月の交は、石楠さき満つ。石楠は、高山植物也。温泉場に石楠の花を見るも、都人には珍らしかるべし。これ草津の大觀也。かばかりの壯觀は、在來避暑地と稱せられたる輕井澤にも無く、箱根にも無く、日光にも無し。今の處にても、一年二十萬の客ありといふ。他日更に交通の便加はり、旅館の改良をはからは、避暑の客、遊山の客も多くなりて、草津當年の繁華を回復することも決して難しとせざるべし。

草津十五瀑の名あれども、觀るべきは、常布と姫仙との二瀑也。姫仙は、草津の東一里にして近し。十丈の絶壁にかゝる。中腹より別に湯の瀧かゝる。このあたり、樹木しけりあひて、可成

り幽邃也。西に元白根の谷を上げれば、氷岩とて、夏日も氷ある巖窟あり。草津よりほんの十二三町の程也。なほ十二三町も上れば、殺生河原あり。硫氣一谷に薰じて、鳥獸の屍骸を見る。獅子岩は、形似によりて名あり。形似もこゝに至れば、成程とうなづくに足る。このあたりに、二三の小池あり。白根山頂の四池、小蓋の池など、池の数は十數もあれど、いづれも小也。東北三里の山中に、野反の池あり。これは、周圍一里にあまる。榛名の伊香保沼、赤城の大沼と共に、上州に鼎立するに足るべき「山湖」也。白根山頂に四池並び、その中に湯の池あるも奇也。小蓋池の浮島鸚鵡岩、みな遊客の徒然を慰むるに足る。けに白根の活火山を控へたる草津温泉は、關東の一大勝地と云ふべき哉。

姫仙の瀑は、一たび訪ひぬ。殺生河原は二たび訪ひぬ。遊ぶや、多く下屋、佐伯二氏と共にせり。下屋氏は醫者にして醫臭を帯びず、佐伯氏は哲學を學びたるが、宗教を解して學究的ならず。をりくゆきて、運動茶屋に憩ふ。浅間山を望むには、こゝが最もよし。或る日、茶店の老人と共に石古根山に上る。眺望益よし。老人に野反の池の事を問ひしに、「案内しようか」と言ひ出し、「案内してもらふか」と答へたりしが、雪ふり出したれば、終に果さざりき。

むかしは草津千軒と稱せられたりき。されど、地勢より察するに、半分は、かけねなるべし。今  
は一等旅館と稱するもの五六軒あり。二等、三等より五六等にいたり、旅館の數四五十、人家あ  
はせて三百、小學校には、高等科も備はり、補習科さへありて、生徒の數は、百五十人に及べり。  
人家は、藥研の底にあれば、光泉寺、白根神社の境内などより脚下一目に見つくすを得べし。社  
寺ならぬ温泉宿の望雲館に、家鳩多くかはれて、湯氣熾に昇れる湯畑のあたりを翱翔するも、温  
泉場には、めづらしきさま也。

散歩するうちに、面白く感じたるは、『入浴逝者之塔』と『凍死人供養塔』と也。察するに、前  
者は、入浴中病死せしもの、靈を慰め、後者は草津附近にて、雪中に行倒れとなりたるもの、靈  
を慰めむとするものなるべし。二者ともに多くの設立者の名を刻す。而して、前者はすべて男  
の名前のみにして、後者は、すべて女の名前のみ也。宿屋を業とする山中の婦女、知らず、涙あ  
るか、崇を恐る、か、とにかくに、一種の宗教的現象也。

藥研の底ともいふべき草津温泉場を流る、湯の川の上流を、西の河原と稱す。賽の河原の字面  
を改めたる也。朱の鳥居のまばらに行列せる稻荷祠の下に茶店あり。極樂亭と稱す。をりく行

いて茶を飲む。主人は、七十ばかりの老人也。手先まで、かたきこと岩の如く、頑丈この上もな  
し。長き尾を立てたる小猫を拳にてじやらつかせて、猫の鋭き齒と爪とに當り、もつと、しつか  
りなど、一向平氣なもの也。東京の猫は、概して尾短し。草津にて見たる猫は、みな尾長くし  
て、而かも眞直に立ちたり。猛烈想ふべし。けに、こ、は極樂亭の名むなしからず。店前に石を  
おもしろく高く掛置し、小松や石楠を植ゑつらね、水を引きて、小池をつくりて、金魚さへ養へ  
り。この老人は、なほ熱湯を利用して、眞水を湯にわかつて、浴客を待つ。草津に眞水の湯ある  
は、こ、のみ也。昔に賽の河原の極樂なるのみならず、草津全體の極樂也。

草津の民は、もと舊曆の十月八日を以て、家を鎖して、山下の里に下り、翌年四月八日に上り  
來りしが、三十年前より今のやうに冬も住むやうになれり。學校もつい近年までは冬休ありて、  
夏休なかりしが、今の川村校長就任するに及びて、普通一般のやうに、これをあべこべにせりと  
聞く。小人閑居して不善をなす。小兒が半歳の間、火闇にのみ當り居りては、ろくな事は覺えず。  
川村氏は草津の教育上、面目を一新したる哉。

下屋氏、隣房の客、宿の主人、みな筑碁の好敵手、二十五日の間一日も碁うたぬ日はなし。を

り、下屋氏の家に飲み、酒樓にも飲みぬ。草津の地は、今や浴客幾ど無くなりて、心のどかに冬籠りせむとす。われは、いつまでも山中にのんきになりても居られず。都には、妻子われを待つこと久し。また塵ふかき都に出でむとす。日頃相識れる人々、泣燈籠までと云ふを、この天氣なればとて辭すれど、なほ五人ばかりは送り來る。地に五六寸の雪ありて、乾坤一望白く、日は照りながら雪ちらちら降れる朝也。

桑尾福太郎といふ人、獸醫として雇はれて七年間、草津に住みけるが、余と前後して、この地を去れり。二度目に殺生河原に遊びし時、共にしたる人也。この人、メリンスの湯揉細工に一種の簡便法を發明したるが、去るに臨みて草津の有志者を集めて、その法を傳授せり。嘗に起つ鳥水を濁さるのみに非ず。卵さへ生みおとせる也。甘棠ならぬ湯揉細工、遺徳は長く草津の地に傳はるべし。共に白根山に上りし娘子、早速その法を應用して、登山の紀念にとて、壽金の地に青く大町の二字を點出せる錢入をつくりてわれに贈る。桑尾氏の遺徳も忍ばれて思出の多き錢入哉。



桂月學生文範

第二篇 叙事文の卷

### 一 淺草公園

東京の淺草公園、西京の新京極、大阪の千日前は、日本國中、最も多く人の群集する處の三幅對也。この頃、淺草公園を散歩せしに、殊に目に付きたるは、活動寫眞の多くなりたること也。されど、千日前には、なほ一層多し。新京極には一つ二つ有りしが、幾んど記憶に存せず。凡て見世物は、一面に、その地方の氣風趣味を代表す。活動寫眞の多き大阪は、さすがに商業の地なる哉。之に反して西京は、お寺の國也。美人の國也。十二三世紀以前の故都也。蒲團着て寝たるは、東山のみならず、西京一般に眠れる也。

### 二

われ子供をつれて淺草公園にゆく毎に必ず先づ花屋敷を見物す。次に玉乗を見物す。玉乗は、青木と江川と二軒ありて、それ〴〵面白き藝を演ずるが中に、余の最も驚歎せるは、二三丈の上に二條の綱、鐵棒を横へてぶらさがる。恰も、ぶらんこの如し。人あり、その鐵棒の上に立ち、手を離して、綱と共に動揺す。これなほ驚くに足らず。次に、鐵棒の中央に、鍋の如きものを置き、頭をその上にのせて、逆立を爲す。人をして、はあはあ思はしむ。次に、その鍋の如きものをも取り去り、直徑一寸とは無き鐵棒の上に、たい頭のみをのせ、手を離して逆立す。技、こゝに至れば、神也。

### 三

花屋敷は、日本國中の見世物の王也。西洋操人形あり。山雀の藝あり。活動寫眞あり。役者の似顔の人形あり。五百羅漢あり。獅子吼え、象跳り、孔雀尾をひろげ、猿、木を上下し、鶴飛び、鯉遊ぶ。大人とても、半日遊覧しても、あくことを知らず。この花屋敷にて、特に呼び物となり居りし狒々の、この頃、死亡せるこそ惜しけれ。聞く、多年相慣れし飼養人に去られて、他の飼

養人來りければ、佛々大に悲しみて、絶食して死せるなりと。嗚呼、動物もなほ恩義を知る。寄語す、今の世の文士、若し檻中に醜態をあらはすが佛々の自然にして、恩義の爲めに絶食するは不自然なり、虚偽なり、道德に囚はれたるなりなど云ふものあらば、これ、其心、佛々よりも劣れる也。

花屋敷のすぐ隣りの凌雲閣の上より、さき頃自殺をはかりしものありき。文明益々進むにつれて、自殺者ますます多し。さるにても日本特有の割腹、幾んど其跡を絶ちて、明治の世には、新しき自殺法出來たり。轢死、華巖、淺間など、これ明治以前には無かりしこと也。たゞ苦痛の輕きと時間の短きとを求む。卑怯なるに似たり。泰然として食を絶ち、泰然として餓死するを、自殺の最も勇なるものとなす。伯夷叔齊嘗てこの方法を取れり。我國にても、信者往々この方法を取れり。今、佛々もこの大勇なる方法を取れり。華巖の亡者輩、佛々に對して、應に顔色なかるべき也。

日比谷公園

何人のこころ、たつらもせよ。日比谷公園は、我が國の誇るべき名園なり。其の風景、草木、花鳥、すべて自然の妙作なり。人々の心を癒し、精神を爽快にす。是れ、我が國の光榮なり。我々國民として、是れを愛せ、是れを護らば、我が國の発展も亦た是れに在り。日比谷公園、我が國の誇りなり。我々國民として、是れを愛せ、是れを護らば、我が國の発展も亦た是れに在り。

欠

# 欠

出て来て、僕の家ぼくのうちにに宿を取つて居る。久しぶりで相會しやうぢや無いか』會しやう』僕ぼくの家に會しては、どうだ』有り難う、往かう』とて別れぬ。

春雨のしめやかに降る日なり。高田八幡祠畔なる中村君の家を訪ふ。座に延かる。入浴中なりとて、主人は未だ出で来らず。楣間を見れば、横長き額かゝれり。司馬温公の書齋銘を書す。日下部鳴鶴の筆なり。床の間を見れば、三幅あり。右は蘇東坡の書、左は中島錫胤男の書、中央は夏同和といふ支那人の書なり。先づ床の間の書より讀み始めしが、夏氏の書にも鳴鶴の書にも、一つ宛、讀めぬ字あり。主人が出て来ぬうちにと、首をひねりしに、副島君出で来る。名は、義一、久しく獨逸に在りしが、半年前に歸朝し、この頃、法學博士となりたるなり。暫くして、中村君も出て来る。品坐して、互に舊を話す。思へば、早や、二十餘年のむかしとなりぬ。今の第一高等學校が第一高等中學校と呼ばれて、豫科が三年、本科が二年にわかれし頃、豫科を終ふるまで、三年の間は、われこの二君と同じく、獨逸學部に學びたりき。今もなほ記す。副島君は、制服以外のぼろ服をつけたり。ぼろく裂けほころびて、惡臭よみに迸る。靴はくことも稀にして、多くは、竹の皮の草履をはきたり。一見、職工よりも更に下りて、宛然たる乞食なり。知ら

ぬ學生は、鼻つまみて路をさくるばかりなれど、副島君は一向平氣なり。思ふに、大學に入りたる學生にして、かばかりの弊服をつけしは、恐らくは、空前にして、兼ねて絶後なるべし。その弊服の爲に、一場の滑稽劇が起りたることあり。即ち、野田兵次郎君に、余は頭をなぐられ、飯尾君は火鉢をこはされたるなり。

當時、同級の有志者、相會して、平凡會といふ一團體を組織したり。名は、わざと平凡としたれど、期する所は、その反對なり。今の通用語にて言へば、ハイカラの反對なる蟹カラなり。會員には、野田兵次郎、飯尾元之進、副島義一、伊藤獻橋、中村進午、吉浦平六、古川五郎、及び余の八人ありしが、下の級にも及ぼして、本間九介、鈴木榮太郎、飯尾元四郎、寛克彦、夏秋龜一の諸氏も加はりたり。僅々二錢を以て相會するを例とす。大會の場合には、十五錢を出し、鍋、貧乏徳利などを道灌山にもち出し、豚を煮、酒を飲み、餘興には、角力など取りたりき。夜通し遠足したることもありき。これら諸氏の中にて、野田君、最も血性にして、最も狂熱を帯びたり。腕力は強からざりしが、氣勝ち、辯舌するどくして、言はゞ、慷慨悲歌の士なり。われ腕力には勝ちて、辯舌は、到底、その敵にあらざりき。平凡會員の五人まで同じ組に居りたることあり。

即ち、中村、飯尾、副島、古川の四君及び余の五人なり。或る日、副島君は、主任の某先生に、弊服を着ることを吐られ、制服を着よとさとされたり。副島君は唯々と答へて、腹に笑ひたり。余等も、そのまゝに聞き流したりき。血性の野田君この事を聞き、「何故に副島君の爲に辯解してやらざりしぞ。平凡會員たるの實、何所にかある」とて、烈火の如くに怒り、先づ中村君の家にゆきて、「今日は首を頂戴したいから、飯尾君の下宿まで来てくれ給へ」といふ。留守なりしが、歸り來りて往く。野田君は、中村、飯尾の二君を前に据ゑて、論難數刻、終に鐵火箸をふりあげて、火鉢を叩きこはしたりとぞ。「君は借金でもして返さなかつたから、あのやうな、ひどい目に逢つたのかと、下宿屋の人々に疑はれて、大に弱りたり」と、飯尾君、のちに中村君に語りし由なるが、世俗の判断、けに、さもあるべし。その翌日、余は、何事の起りたりとも知らず、野田君が激怒せりとは、夢にも知らず。野田君より來よとの知らせのありたるまゝに、學校の稽古終りて、その下宿に赴く。室に入りて、未だ坐せざるに、いきなり來て、余の頭をなぐる。めづらしや、野田君の不得意の技を以て、余のむしろ得意とする技に向ひ來れるなり。これは何事ぞと一向、合點ゆかず。たゞ呆然として立てり。中村君は當時これを目撃せし人にして、記憶、今尙

新なり。』あの時、君がびつくりして、口をもごごくさせた様は、宛然一幅のボンチ繪なりき』とて、大に笑ふ。』副島君、君の爲に、とんだ目に遭ひたり』と笑へば、副島君も、にや／＼笑ふ。『あの弊服は、柳原あたりにて買ひたるにや』と問へば、『いや／＼、當時舎監たりし安田彌藏氏のおふるを買ひつけたるなり。今も尙安田氏の恩を記せむとて、藏して行李の中』とあり』といふ。『それは、君の家の名寶なり、飽くまでも保存して、子孫に傳へ給へ』

話が一段落ちつきたるを、しほに、『どりや、庭を見せ給へ』とて椽側に出づ。丘に據りて、林を負ひ、眺望は下に開き、遠くに及ぶ。庭いとひろし。下の方に池あり。木立まばらにして庭外の樹、却つて庭の趣を添ふ。見下す一面の平地は、早稲田中學の運動場なるが、その彼方の林樹參差として、恰も深山幽谷の如き心地す。たゞ樹木を見て、人家を見ず。都門の中の一仙境なり。

『君に逢つたら見せやうと思つて、保存して置いた』とて、中村君、數冊の帳面みたやうなものを持ち出し來る。見れば同窓會雜誌と不羈會雜誌との殘片なり。會員の文章を月毎に一冊にまとめて、廻覽して、互に批評したるものなり。以文會と同窓會と二種ありしが、間もなく相合して、不羈會となりたるなり。一冊の餘白に、何人が書きたるにや、その筆蹟は、中村君も思ひ出す能はず。余も思ひ出す能はず。

不羈會々員資格概則

- 第一條 本會々員は、飯尾、大町二氏の磊落氣象を養成すべし。
  - 第二條 藤浪氏の文章を學ぶべし。
  - 第三條 甲野氏の議論を眞似るべし。
  - 第四條 水哉氏の評を倣ふべし。
  - 第五條 吉浦氏の風采を慕ふべし。
- 水哉氏とは、中村君の事也。觀察公平にして、批評に長じたれば、かく云はれしなるべし。吉浦平六氏は、頭腦明晰にして、學問も優れ、人物も、しつかりして居りしが、惜むらくは夭折せり。藤浪氏とは、今の醫學博士藤浪鑑君の事なり。學力優等、文才も、全級中第一と稱せられたりき。當時、われ美文は藤浪君に如かず。論文は野田君に如かず。二君を強敵として、ひそかに自ら奮勵したりき。例の野田君も、不羈會々員なりしが、會員の資格にかぞへられず。不平にや思ひけむ。

第六條 野田兵次郎様の公明正大なる心術を仰向服膺すべし。

これは、野田君の筆蹟なり。様として自ら例の快男子の意氣込をあらはせるなり。以下、また別人の追加あり。それも何人の筆蹟なるか、中村君も、余も、今は判する能はず。

第七條 大町芳兵衛君の健歩を羨むべし。

第八條 甲野君の團々主義を學ぶべし。

第九條 野村君の勤勉に習はんことを希望す。

芳兵衛とは、余をひやかしたるなり。野田君は、中途に退學したり。朝鮮に飛び出したり。明治三十四年の頃、一度逢ひたる事ありしが、その時は、前とは一變して、腹も大きくなり、渾然として、わけのわかりたる紳士なりき。今日、中村君に聞けば、「一昨年、長崎に客死したり」といふ。悼ましいかな。當時、余は文章を練るのみを以て満足せず。長野純藏君と共に發起して修辭會を起したりき。演説し、討論して辯舌を練らむとするを目的としたるものなり。中村君も野田君も、勇將なりき。丸山嵯峨一郎君も、勇將なりしが、今、衆議院にて、をりく言を吐くこと、新聞に見ゆ。知らず、當年修辭會に雄視せし如く、議會に雄視するや、否や。

「隨意科として、鳥居枕先生の唱歌の教授ありしが、二三箇月學びたり。されど、餘り無器用に於て、到底物にならざるを知りてやめたり」と云へば、中村君も、「學びは學びたるが、拙劣の上も無し。或る時、大に笑はれたれば、終に恥ぢて、斷念したり」といふ。副島君は云ふ、「僕は當時、豪傑を以て、自ら期す。學課の外には、たゞ擊劍を學びしのみ。平凡會には入りたれど、文章の不羈會にも、辯舌の修辭會にも入らざりき。唱歌などは猶更なり。おもへらく、文章辯舌は、未技なり。大丈夫の事にあらず」と。當時、われ副島君の心事を知らず。二十年後の今日、親しく聞いて、始めて知るは、遅いかな。余も當時、學者、文士などにならうとは思はざりき。三年の豫科を終りて、中村君も、副島君も、獨逸の法律を修めむとて本科に入りたるが、余は別れて、英語を専修したり。されど、文科へとは思はずして、政治科へと思ひしなり。嗚呼、思へば、當年の事は、さながら夢に似たるかな。余は副島君と相反して、何事にも手を出したりき。副島君とは、たゞ平凡會にて相親しみのみ。中村君とは、平凡會の外、不羈會に、修辭會に相親しみたりしが、中村君のみならず、平凡、不羈、修辭三會の會員の何人とも相離れて、運動場裏、別に親友、強敵を有したりき。今の法學博士、岡松參太郎、高橋作衛二君の如きも、英獨、

部を異にしたれど、運動場にて、相識りたる人なり。當時、われ運動を好むこと、文章を好むが如し。而して、どちらも、へたの横すきなり。文章にては、藤浪、野田二君に及ばざりし如く、運動場にては、到底、同級の那珂、齋藤二君に及ばざりき。知らず、二君、今、好在なりや否や。中村君曰く、「さきほど、風呂に入ると同時に、家人、君の來るを報せり。出るにも出られず。殊に湯がぬるかりしかば、急には、あた、まらず。大にお待たせ申したり。十年の舊友に對して申譯なし。君は、定めて立腹せしならむ」「いや、成るべく、君の出で來ること、おそからむことを願へり」「それはまた何故に」「實は、あの四幅を悉く讀まむとするに、未だ讀み終らず。殊に二字だけ、どうしても讀めず。とやかくやと考ふる間に、早や副島君が出て來て、邪魔せられたり」と云へば、中村君すらくと讀む。讀めぬ二字もわかりたり。「もつと何か面白きもの無きか」と云へば、二幅をもち出し來る。「これは、先年、尾崎紅葉が聞きつたへて見せてくれよとて、來り見たるものなり」とて、一幅をひらけば、蕪村の筆にて、古今の人物、數十人を描きたり。義家あり、頼朝あり、曾我兄弟あり、一休あり、利休あり、公卿、武將、僧侶、風流の士などいろ／＼さまざまなり。一人毎に、十七字を書き添ふ。幅の上の方に、いはれを記す。其要に

曰く「俳句は、遠き神世には生まれり。その證として、こゝに、古來いろ／＼の人物を描くと共に、その句を録す」と。これ、和歌は神世に生まれりといへるより、わざと俳句もまた然りと云ひたるなり。知れ切つた虚言を言ひて、人を笑はさむとするなり。その俳句として取りたるものには、まことの俳句もあれど、多くは、古書中にある本人の言葉を、そのまゝ、十七字だけ取り來りて、俳句に擬したるものにて、頓智即妙、人をして絶倒せしむ。畫も書も、共に飄逸にして逸氣奔放の趣あり。まことに珍品也。「これは、君に見せようと思つて居た」とて、今一つをひらけば、狸々が樽のかゝみを抜けるさまを描きて、その上に蜀山人自筆の酒の頃の狂文を題せり。これも珍品なり。賞玩未だ終らざるに、杯盤既に陳せられたり。いざ／＼と促されて、杯を把り酒くみかはず。

燈火點ぜられし頃、藤浪鑑君歸り來る。辰野宗義君も中村君の招きに應じて來る。今日の一座は、都合五人、いづれも二十年前の舊同窓なり。中村、副島二君は法學博士、藤浪君は醫學博士、辰野君は臺灣銀行の理事、みな世に重きを爲す。副島君は沈毅、嚴の如く、中村君は溫潤、玉の如く、藤浪君は清純、花の如く、辰野君は豪放、潮の如し。なほつゞめて形容すれば、中村君は



高く、藤浪君は優しく、副島君は堅く、辰野君はひろし。なほ他の語にて言へば、辰野君はよく容れ、副島君はよく守り、中村君はよく察し、藤浪君はよく感ず。中村、副島、藤浪の三君は、少量なるが、辰野君は、よく飲む。十六七ばかりの美少年一人、酌に待す。美人の酌なら得易し。美少年の酌は容易に得べからず。二十歳前後の青年を相手に一種の説法をする事は、余の最も趣味を感じる所なり。この少年の酌にて、大に酔ふ。時に中村君、細君を紹介し給へ」と言へば、夫人出で来る。さきに床の間の掛物を讀みし際、中島錫胤男は夫人の父なるやうに聞きたれば、そのつもりにて、話しかけしに、夫人通ぜざる様子なり。「あれは、僕の兄の家内の父なり」と。中村君かさねて説明す。「僕の嫂と云へば簡單明瞭なるに、僕の兄の家内など、長くいふ故、つい兄を聞きおとしたり。これは失禮しました。さらば、奥さんのお里は」と、夫人を顧みれば、日本婦人のたしなみ、さすがにすぐにはこたへず。中村君ひきうけて、「三島通庸の娘なり」と説明す。少年とかはるく酒を侷めらる。ますく酔へり。

辰野君とは、第一高等中學校より以前、獨逸協會學校時代の學友なるが、今、二十年ぶりにて相會したるなり。頻りに、文學亡國論を口にし、「大町君の如きも、與つて力あり」とけなす。亡

國の氣風を助くと聞きては、黙つても居られず、「恐らくは、君は、一冊も今の文學の書を読まざるべし。また一篇も、僕の文を読まざるべし」といへば、中村君ひきうけて、「さうだく」。僕は平生注意して、大町君の文を讀んで居る。大町君の文には、毫も亡國的分子なし」といふ。藤浪君も、「さうだく」と合點うつ。余は、有力なる應援を得て得意になりて、大にしやべる。辰野君ひやかして、「羅漢の木像が動き出したやうなり」といふ。中村君しやべり出せば、「これも羅漢様なり」とひやかす。藤浪君は俯して考へ、副島君は仰いで黙す。

辰野君去る。余未だ去らず。中村君と碁をうたむことを約したればなり。副島君は、藤浪君としきりに相話す。さらばとて、中村君と共に碁盤に對す。平凡會時代には、優秀なかりしやうに記憶す。一番上りと約して、石をつかみて黑白を決す。余、白を取る。「君、そんなに酔つても碁がうてるかね」「大丈夫、酒は量なし。亂に及ばず」と大言を吐きてうつ。大に勝つ。一番上りの約に従ひて、中村君、先番となる。又大に勝つ。「これは、段ちがひなり。一足とびに四目おき給へ」と威張れば、「いやく約束なり」とて、二目おく。われ大敗す。「まけたく」。今夜は、これで止めて置かう。時にもう何時かね」と、まだ十時ぐらゐのつもりにて問ひたるに、早や、「一時

を過ぎたり」といふ。大に驚きて、「これは、大に失禮した、歸らう」と云へば、「おそいから、とまり給へ」と云はる、まゝに、終にやどりぬ。

明くれば、用事をひかへたる身なり。蒲團ならべて臥したる藤浪君に呼び起されて、直ちに辭し去る。雨は、やみたり。戸山の射的場を過ぎ、わざ／＼迂路して、このごろ、新聞に評判高く、一婦人が痴漢に辱しめられ、終に殺されたりと云ふ處を過ぐ。新聞の記事によりて、その最後の現場は、こゝぞと思はる、處、鳥は人生の事に關せず、一羽の雄雞、數羽の牝雞を領し、傲然として餌をあさるもあはれなり。

嗚呼、花は、美人と共に看るべし。雨は友と共に聴くべし。高田の雨の一夜、十數年來見ざりし舊友に逢ひて、胸襟をひらき、おぼろなりし二十年前の記憶を呼び起して、世にも面白く過しけるかな。

## 柏木の閑居

老書生の身、いつまでも寄居蟲なり。東京の西郊、角筈村の林泉清らかなる所に、一年ばかり住みし程に、その家賣られたり。借家證文の約束、一ヶ月以内に立ちのけばよけれど、買ひたる人は、早く住みたがるべし。氣に入らむ家は、ゆる／＼さがさでは得べからず。たゞ假りにとて直ちに千駄ヶ谷村に轉居す。その家、新宿停車場より五六町、ちかく汽車の線路に接す。汽車の往來うるさけれども、小兒のなぐさみにはならむと思ひしに、下り列車、このあたりに來りて汽笛を鳴らすこと、住みて後、はじめて知りぬ。その音はけしく、耳も聾せむばかりにて、話聲相聞えず。生れたての兒、其のたびに、夢驚かされ、さめて居りても、驚きてふるへあがるばかりなるに、終に堪へかねて、四月ばかり住みて、大久保村に移る。庭はせまけれど、近き畑、遠き森を見渡す眺望の佳なるに、吾は長く住むつもりなりしが、一年の間に母病んで死せんとせり。長子の學べる學校、旋風につぶれて、幾んど壓死せむとせり。幼兒病死せり。盜來りて、物をぬすみゆき、その後、又忍び入らむとせしこと、しば／＼なり。轉居したる方角鬼門にあたり。家相悪しと、母まづ言ひはじめ、姉和し、妻和し、親族の人々も和す。われはたゞ一笑に附するのみなりしが、世に家相も方角もあるべきにあらねど、家相方角を氣にすることが、即ち家相方

位の悪しきなりと思ひて、柏木村にうつりぬ。

大久保村は躰にあらはるれど、其中百人町の通りは、長さ幾んど十町、眞直なること、東京には稀なるに、兩側には、櫻樹ならびつらなりて、陽春四月、花の隧道を作ること、他の街路にその比を見ず。その花の隧道をゆきつくせば、屋根門の左右、生塙を壓して、櫻樹數十本、枝をかはして、義満の花の御所もかくやと思はる。これ余の借りて住へる處なり。

春日の局、自ら茲に梅櫻を植ゑけるが、丘を擁して、楓樹多く、三代將軍、鷹狩しける時、望み見て、蜀紅の錦の如しといひけるより、園の名に負ふに至り、維新後には、江藤新平も住みたることありきとかや。宅地三萬坪、満園みな樹木、庭と云はむには、餘りにひろし。公園と云はむにも狭からず。眺望と云ひ、樹木の趣と云ひ、東京の諸公園に比するも、五指の中には入るべし。周圍十町にあまる。前は平地なれど、後は、丘陵をなし、清き小川めぐり流れて、自ら境をなす。その水導かれて、池となれる者二つ。さまでひろからねど、その一つの池には島あり。鳥にも池の周圍にも百日紅相並んで立ち、夏、花さけば、花、影を清き池面に落し、上下相映じて、此世ながらの神苑の心地す。庭に最も多きは梅の樹、二百本にあまるべし。櫻の樹、楓の樹も百

本に下らず。杉林あり、竹林あり。栗の樹、柿の樹、いづれも四五十本あり。一反ばかりの畑、三つありて、路、縦横に通ず。梅、櫻、楓の類、春日の局時代のものは残り居らねど、古き大木も少からず。その他、種々の樹木、亂植せられて、箱庭的ならぬ處に、却つて自然の風趣を見る。後方一帯の丘、眺望は、生ひ立てる樹木に妨げらるゝも、圓錐形の小山ありて、樹梢を越えて、眼界、頗るひろし。近きは田、遠きは陵丘、茅屋散在し、塔尖、樹林の間にはあらはる。更に遠きは、甲相の連山を壓して、富士山、巍然として立てり。豆人のき、寸馬來るに、中野より雜司ヶ谷に通ふの路、それと知られて、眺、自ら枯寂ならず。

門外、行人稀なれど、野譚の外、時に號外賣の聲を聞く。夜ふけて、殊に轆々たるは、水車の音なり。遙かに殷々たるは、汽車のすぐるなり。蝶飛び、蟬鳴き、冬は群禽和鳴し、夏は滿地みな蟲聲なり。殊に樹林蒼鬱として地自ら幽に、心、自ら澄む。われ四年前、都の中より出て、角筈に住みし時は、塵外の仙境と思ひしが、こゝに住まふに及びて、如何なれば斯く角筈の居を喜びしかと、自ら怪しまるゝばかりなり。

角筈に住みし頃は三兒ありき。大久保にて一兒を失ひたるが、今はなほ四兒あり。上の三兒は

男にして、末の一兒は女なり。われ性、植物を好めど、動物を好むこと更に甚し。花美なれど、久しく之に對すれば、變化なきに厭く。動物には變化ありて、終日相對して厭かず。されど、四兒をもち立つるに、手のかゝるを以て、妄りに多く動物を飼はず。雞を飼ひしが、犬、常に來りて襲ひ、其一つ、終に犬に奪はれしより、かあいさうに思ひて、飼ふことをやめぬ。小池を掘りて、鯉、金魚を飼ふ。われ執筆にうみて、庭に出づる時は、先づ必ず之に對す。其泳ぐさま、何となく趣味あり。されど、それを見て喜ぶ小兒のさまを見れば、なほ一層の趣味を感ず。うつり住みしより二三箇月の間は、たゞ庭園を逍遙することが面白かりしも、なれては、初めのやうにはめづらしう思はず。小兒をつれのけば、庭園常に一種の趣味を生ず。小兒のために蟬を捕へたり、栗を拾ひたり、また枯木を拾ひたりするにつけて、庭園の逍遙、常に愉快なるを覺ゆ。目的のある處、活動あり。活動のある處、常に新趣味あり。世に生れて、目的のなき者は、終に人生の趣味を解せざるべきなり。

家庭に小兒あるは、庭園に花あるが如し。四兒もあれば、閑を銷するに餘りあり。なるべく戸外に運動せしめむとて、まづぶらんこ二つ設けぬ。生れて一年半ばかりになれる女の兒も、兄の眞似して蕨の如き手に麻繩しかとつかみて、運動するを、こよなき樂とするを見るが、こよなき樂なる親の心、子もたぬ人は知らざるべし。ひとり逍遙して、面白きもの見つけては、兒にも見せむとて、戻り來ることあり。兒、庭に出で、久しくもどらざるに何をなし居るにかと、なつかしくなりて、そこへ尋ねまはり、兒の名を呼ぶ聲を、むなしく木魂に答へさすることもしばしばなり。

暇ある毎に、庭園を逍遙するにつけて、樹木のさまを見つくし、蟲を見つくしぬ。枝ぶりの面白き木は松、梅、楓、柿、櫻、百日紅などなり。松は庭園につきものなり。種類多く、枝ぶりもさまざまなるが、頑健のやうにて、何となくいやし。宴席に侍する割間の如きか。梅は、あばずれ女の如し。されど花をつくれば、にくらしくはあらず。百日紅の枝ぶりは、垢ぬけしたる女のやうなれど、皮のはぐるが、きずなり。美人の肌にしつ出來たるが如し。楓は勇み肌の男の如く、柿は實のみ賞せらるゝものなれど、われその枝ぶりの、一種の風情あるを愛す。その一朝にして落葉すること、最も面白し。さかり久しき百日紅は、人にあかるべし。されど、其花の色、桃李にはまされり。概して花の美なるは、實甘からず。實の甘きは、花美ならず。たゞ桃李は、二つ

ながら併せ得たれど、花は梅櫻に若かず。實は栗柿に若かず。常磐木、四時葉をつくれど、また常に枯葉を落す。木は、花をつけたり、紅葉したり、兀然として骨立したりするものこそよけれ。蛇は、にくらしく、蝦蟇はいやらしく、雨蛙はかはいらし。その雨になく聲、殊にかはいらしけなり。されど、その保護色を利用して、青桐などに上り、大口ひらきて小蟬をのむは、美人の立食するよりも興さむるわざなり。蝶は、蟲の中の美人なり。されど、野におけるとは、蓮華草のみの事にあらず。その花に舞ふさまをながめてこそよけれ。手にとらば、手は、はくにけがされむ。食膳の上にまひては、之を追はざるを得ざるべし。草にすだく蟲も多けれど、こほろぎの聲、最も可憐なり。佳人の恨を訴ふるが如し。きりくすは、都なれぬ田舎女の、切口上にて物いふが如し。蟬にも種類多し。ひぐらしは、午後より、晩にかけてのみ啼くと思ひしが、こゝに住みてより、はじめて、夏の朝のひぐらしの聲にあけそむることを知りぬ。その聲、幽寂なり。老僧の經よむが如し。くま蟬は、車夫などの喧嘩するが如く、つくく、法師は、小兒の書を讀むが如く、あぶら蟬は、裏店の山の神の如く、みんく、蟬は、わんばく小僧の如し。中二階を、わが勉強室に充つ。蝶、時に花に舞ひあきて、來つて欄干にとまりて、動かざるも

あはれなり。夜、ふくろふの聲きけば、何となく、ものかなし。夏の夜ふくるまで机に對するに、蟬、往々座に飛び來る。つかみて、欄外にすつるに、地に落ちずして、また飛び來る。彼も光明を渴仰するなり。されど、燈蛾の身を殺しても顧みざるまでの狂熱なきは、くちをし。衣食住の中にて、われおもへらく、衣は垢つき居らずして、冬寒からざるだけなれば、十分なり。われ他に望なし。食物も、からだ相當に滋養を取れば足れり。必ずしも美味あるを望まず。樹木あり、眺望あらむことを。この望は、角筈に住みて、家のまはり込み合はず、ゆるやかにしてへり。一生すめば、この上もなけれど、我が所有にあらず。賣物となり居れば、いづれ、買ふ人ありて、追ひ出されむこと、角筈村に於けるが如くなるべし。されど、事の終りたる後より見れば、一二年もあつけなければ、十年もあつけなし。一生も亦あつけなし。一日すめば、一日の願足り、一年すめば、一年の願足る。買ふ人あらむまでは、余にとりては、浮世の樂土なり。

### 小石川臺

東京に移り住みてより茲に三十有餘年。東京は、第二の故郷なり。その東京にて、居をかへしこと、幾十度なるを知らざるが、感化と印象との最も多く残れるは、小石川臺也。そは、杉浦重剛先生の稱好塾に寓したれば也。聞く、先生この頃、毎土曜日の夜に、徒を集めて、孫子を講ずと。往いて教を乞はむと欲して、未だ果さず。夢魂空しく傳通院畔に飛ぶ。茲に一絶を作る。

危機潜在ニ太平日。輕薄爲賢誠實愚。誰識百千餐舍外。白鬚學士講孫吳。

建物にて、小石川臺の王者とも云ふべきは、傳通院也。惜しや、さき頃、焼け失せたり。されど、徳川家康の母の墳墓の在る處、今や徳川の天下にあらざれども、徳川氏は、第一流の貴族也。豈に久しく之を等閑に付せむや。

小石川臺の南端、平地にかけての大なる一構は、もと水戸侯の邸宅の在りし處、義公の住みし處、烈公の住みし處、藤田東湖の住みし處、今や、砲兵工廠となりて、幽趣を極めたる後樂園、

新

深く煤煙の奥に鎖さる。天を焦す煤煙、閉眼を破る機關の音、市民諸君、うるさしと歎つこと莫れ。日清の大勝にも、日露の大勝にも、この數十の煙突、與つて偉功あり。煙突もし人ならば、金鶏動草をうくべき也。

砲兵工廠の西に隣れる一角、牛天神の境内は、小石川臺上、唯一の遊覽地也。江戸川の櫻花、目白臺の暮靄、牛込、麴町の瓦鱒樹木、眼界甚だひろく、殊にこゝより眺むる富士山は、東京にては、最も高く見ゆ。眺望の奇、余は推して都下第一となさむとす。

小石川臺より大塚臺へかけては、高等、尋常の師範學校あれど、特に天下の珍とすべきは、嘉納治五郎氏の講道館と、伊澤修二氏の樂石社と也。嘉納氏は、柔術を柔道と改め、精神教育を加へて、自から嘉納流を創め、天下の柔術界を風靡するの勢あり。嘉納氏は現今東京高等師範學校長なるが、饅上りに文部大臣に進むかも知れず。されど、嘉納氏をして不朽ならしむるものは、講道館也。嘉納流の柔道也。

伊澤氏の樂石社は、吃音を矯正する一種の學校也。翁も社會の地位は高し。されど、翁をして不朽ならしむるものは、樂石社也。其發明にかゝれる吃音矯正法也。現に余の二兒は、翁の教授

を受けて、吃音を矯正せり。われ深く翁を徳とす。かねて、之を天下の同病者に知らさむと思ふこと切也。

茗荷谷の奥、小日向臺と相接せむとする處に、深光寺といふ寺あり。そこに徳川時代の小説家の泰斗なる瀧澤馬琴の墓あり。これも小石川臺の一名物なるべし。

思ひまはせば、早や二十年の昔となりぬ。稱好塾に寓せし頃、巖谷小波、江見水蔭も共に寓したりき。その頃は、傳通院と植物園との間の低地は、水田なりき。丘には狐棲み、水田には雁下りたりき。水蔭などは、よく狩猟りに出掛け、雁に石を投げたる當年の豪傑兒也。

### 豊島ヶ岡

江戸川の終點にて下り、目白臺を左にし、小日向臺を右にして、音羽九町を行き盡せば、護國寺の門につき當る。そこをば豊島岡と稱す。一帯の丘陵、樹木鬱蒼として、秀色掬すべし。殊に音羽の道路の坂ともつかずに次第々々に高まること、他に其比を見ず。門前より牛込を見渡して

も、はれ々しく、音羽の入口より豊島岡の秀色を仰ぐの風致は、けに都の中にもと驚かる、ばかり也。

豊島岡は、一に墳墓の岡とも云ふべくや。豊島御陵は、皇族御埋骨の地也。護國寺には、三條公、山田顯義を始め、墳墓多し。陸軍埋葬地は、入營中に死せる兵士を葬る處。墓も規則正しく行列す。西に雜司ヶ谷埋葬地あり。第一青山、第二谷中、第三染井と東京の墓地を數へ來らば、第四には、この墓地が入れらるべし。豊島御陵の東に接して、儒者棄場もあり。この墳墓の岡に、眞言宗豊山派の豊山大學、豊山中學もあれば、女子大學の寄宿舎もあり。晩香寮とは、中等教育程度にて嫁する女に對しての名にや。大鬼小鬼夜哭するの地に、明日の榮華を夢みる青春の男女の集れるかと思ふにつけても、つくづく「孤村至曉猶燈火。知有人家夜讀書。」のあはれなるを覚え、「骸骨の上を粧うて花見かな」の一層痛切なるを覺えずんばあらず。

儒者棄場、今は學者塚と稱す。護國寺の門前を東に行き、坂に就かむとする處より北に行くこと一二町、路三つにわかる。中央の路最も大に、右の路や、小に、左の路最も小也。其最も小なる路を取り、つき當りて右折し、間もなく左折すれば、儒者棄場に達すべし。室鳩巢、岡田寒泉、

柴野栗山、尾藤二州、古賀精里、同侗庵など、江戸時代第一流の儒者の墓多く集まりたり。いづれも、みな幕府の儒官也。

鳩巢の墓は、今は畑の中に、杉垣にて、かこひこまれたり。四つの小さき石塔相並ぶ。最も左なるが鳩巢の墓にて、次が其の妻の墓、次の二墓が、鳩巢の子の勿軒夫妻の墓也。鳩巢は新井白石と學友たり。而して白石は才を以て働き、鳩巢は徳を以て立てり。殊に鳩巢に偉とすべきは赤穂義人録を著はしたること也。赤穂四十七士が君讐を報じて間もなき程にて、群議紛々として是非一定せざりしに、二たびこの義人録出で、天下の公論始めて定まれり。水戸義公の湊川の碑、鳩巢の義人録、これ當時好一對の美事也。

鳩巢の墓の南に接して柴野氏の墓地あり。その中に栗山の墓あり。またその南は尾藤氏の墓地、二州の墓あり、またその南は古賀氏の墓地、精里の墓あり。其子侗庵の墓もあり。侗庵の子茶溪の墓もあり。茶溪までは、三代相つぎしが、茶溪は明治十七年に死して、未だに木標のみにて石塔が立ち居らず。鳩巢より始めて、墓地はだん／＼南に開けたり。而して墓もだん／＼大きくなれり。即ち精里父子の墓最も大にして、鳩巢の墓最も小也。岡田寒泉の墓は、栗山の墓の前方、

雜木草莽の中に孤立す。よく／＼注意せずば、見おとすべし。栗山、二州、精里は、寛政の三博士と呼ばれたる巨儒也。この際、學政の上には、林述齋といふ林家中興の英傑あり。政治の上には、松平樂翁といふ賢相あり。儒教の最も盛なりし時代にして、今日存する聖堂は、この際の建築に係れるもの也。寒泉も栗山と同じく儒官にして、好評ありしが、二州精里と入れちがひに、出で、代官となり、治績大に擧れり。當年の一人材也。

鳩巢は享保十九年に七十七歳にて逝けり。寒泉は、夫より後七十三年、文化四年に、七十一歳にて逝けり。栗山も同じ年に七十四歳にて逝けり。二州は文化十年に六十九歳にて逝けり。精里は文化十二年に六十八歳にて逝けり。何れもみな學者といふ者は、長壽也。儒者棄場とは、學者を誣辱したるやうに聞ゆれど、儒學盛なるにつれて、儒葬行はれ、其儒葬のさまが、普通の葬式とは異なりて、餘りに無造作にて、俗眼には、たゞ死人を棄ててに行くやうに見えしかば、世俗は世俗通りに解釋して、棄場とは云ひける也。



### 小日向臺

小日向臺は、南は江戸川に臨み、東は茗荷谷を隔て、小石川臺に對し、西は音羽谷を隔て、目白臺に對し、北は小石川臺と一つになりて大塚臺に連る。四方いづれより往くも、坂路あり。従つて馬車の往來稀なる市中の別天地也。彈藥庫の側に立てる一株の銀杏樹、甚だ高し。小日向臺の王者の觀あり。和田垣博士の門内に、偉大なる檜葉の樹あり。云ふこれ東京市中の檜葉の最も大なるものなりと。主人の博士も、この檜葉の如く、當代一種の偉人として世に仰がる。内に誠を藏し、血と涙とを湛へて、包むに奇才と博識とを以てし、或は磊落に、或は飄逸に、或は奇抜に、或は嚴正に、或は滑稽に、卓然として名利の荏より逸出せる博士の人格は、今の世、絶えて其比を見ず。人も木も共に小日向臺の名物也。

なほこの臺には、新渡戸博士も住めり。英詩人野口米次郎氏も住めり。舊會津侯舊津輕侯の屋敷もあり。徳川家の別荘もあり。さばかり壯大なる屋敷もなく、また陋屋も無し。小日向神社境内の稻荷祠畔は眺望開けたり。小日向臺の西南臺は久世山として、眺望は更に佳也。凡そ一萬坪、今に空地として存す。少し手を加へて、市の一公園となさむは如何にや。

何人の子にや、まだ幼少なる雜種兒の、日夕、この臺を上下するものあり。服装は洋にあらず、和にあらず。ちぐはぐの様せるに、行人目をそばだてざるはなし。この兒、學校に行きても、誰も相手にするものなし。悄然として獨り遊ぶなりと聞く。憐れなる哉、雜種兒の境遇。されど、知らず、日本の文明も、いつ雜種兒の境遇をはなる、にや。

### 目白臺

電燈輝き、電車走る世の中に、輦轂の下、今もなほ時の鐘鳴る。目白不動の鐘の如き、その一也。その鐘の音、江戸川を中心として小石川、牛込兩區の大部分に聞ゆるが、パンを求むるにのみ忙殺せらる、現代の人々、つくづくと之を聞きて、諸行無常など、感ずるの餘裕だにも無かるべし。

江戸川の兩岸に櫻樹つらなりて、新小金井の稱あり。その櫻花のつくる處、大道遙に西北に向つて通ず。音羽九町と稱す。維新の後までも遊廓のありたる處、今は鳩山博士、芳賀博士なども住めり。音羽九町の盡くる處は、豊島岡となりて隆起す。護國寺之に據る。三條公の墓もあり。堂宇の大に形勝の雄を併せ得たること、都下寺院中の第一也。皇族の墓地なる豊島御陵之に隣す。音羽九町の東に連互せる臺地を小日向臺と稱し、西に連互せるものを目白臺と稱す。目白不動は其東南端に在り。駒込の赤目不動、目黒村の目黒不動と共に都下三幅對の不動とて、世に有名也。江戸川の水聲、脚下に聞え、早稲田、牛込の人家遠く見渡さる。

目白不動に接して、山縣公の椿山莊あり。伊藤公亡くなりてより、今や、山縣公は元老中の元老也。今の總理大臣は、古の大納言の如し。元老が古の左右大臣に當る。山縣公は古の太政大臣にも擬せらるべきか。臺下の早稲田には、大隈伯住めり。これ在野政治家の巨魁也。かく、目白の臺上臺下に朝野第一流の政治家の對峙せるも奇觀也。政治家のみならず、官學の學習院も臺上にありて、私立の早稲田大學は臺下にあり。學習院には、英姿颯爽たる乃木大將控へたり。學習院は乃木大將を戴きて、始めて校長としての適材を得たり。乃木大將に取りても、旅順に二子を

失ひて、華胄の子弟を子視する今の境遇は、晩運の宜きを得たる者といふべき也。

女子大學も、目白臺上に在り。女子大學に就ては、かれこれは非の聲なほ絶えざるが、とにかく、之を創立したる成瀬仁藏氏は、教育界の異材也。賢母良妻を標置せるも大いに善し。獨立せる女子の出來む日は、即ち日本國の亡びる日なるべし。世に女子大學を冷笑して曰く、賣れ残りの仕込所と。容貌醜にして、而も貧家に生れたる女子は、世にも氣の毒なる哉。すべて物事には例外あり。賢母良妻の例外として、男まさりの女豪傑が男を離れて獨立するも亦妨げず。現に女子大學の卒業生にして、目白臺に少年寮といふを設けて、少年の男子を保管せる人あり。殊勝なること也。但しその人は四十歳以上にして、既に結婚したることもある由也。結婚したることのなき女子の獨立は危い哉。されど、結婚の甘味をのみ嘗めたるものは、益危し。結婚の苦味を嘗めたるものは、や、たしか也。殊に二十歳の後家は立て易く、三十歳の後家は立て難しといへる俗諺も、亦考ふべきこと也。さは云へ、我國も他年米國の如く男早の起ることなしとも限らず。女子大學は竟に是れ時代の要求也。余は、つくづく賣れ残りの語の痛切なるを覺えずんばあらず。なほ目白臺には獨逸協會學校もあり。朝な夕な、臺上の諸學校へ通ふもの、臺上より市内の諸

學校へ通ふもの、引きも切らず。男あり。女あり。少年あり。青年あり。馬車も通るかと思へば、肥料車もつづく。

目白臺に住める貴顯は、山縣公の外、細川侯、田中伯、榊山伯、岡部子などあり。細川侯の門前に、一大老松あり。もとは二本ありて、鶴松龜松とて、昔より有名なるが、惜しや、近年、鶴松は枯れたり。けにや、鶴は千年、龜は萬年。鶴の命早く盡きたるか。されど、今残れる龜松も、さばかりの元氣も無し。知ず、餘命いくばくぞや。聞く、松樹は酒を愛す。酒をだに注がば、老いて益々壯なりと。龜松ならば、一年に凡そ一石の酒にて事足るべし。一石の酒、貴顯の家に於ては、何かあらむや。鶴松龜松は、江戸名所圖會にも特筆せられて、東京の一大名物也。名物を保存するは、市民の義務也。貴顯富豪は猶更の事也。二本の中にも殊に恰好のよかりし鶴松を枯したるは、細川家ともあらう貴族に、人無しといふべし。されど、枯れたる松は、再び活きず。願くは、龜松をして萬年の壽をたまたしめよ。

楓の紅葉もよけれど、今一步自然を見るの目が進まば、人は必ずや銀杏の黄葉を愛するなるべし。目白臺にては、鬼子母神の子授銀杏、最も偉大也。都下にては、麻布善福寺と小石川光圓寺

とにあるものを除きては最も大なるものなるべし。世にこの銀杏の靈驗を傳ふ。子の無きを憂ふる女、この銀杏をいだけば、必ず子が生るゝとぞ。目白不動にも正八幡にも、可成り大なる銀杏あり。目白の一臺、黄葉の美に富める哉。茲に一つ都下他に見るべからざる壯觀は、鬼子母神の櫛の並木也。武藏野には、櫛多し。農家ある毎に、必ず櫛あり。されど、並木をなせるは、この鬼子母神と府中の六所明神とのみ也。新緑の頃が最も美觀也。

鬼子母神は、郊外の名利にして賽者常に絶えず。その賽者の一半は、境内の稻荷に詣つるもの也。この稻荷は威光天と稱す。佛化せる名也。『伊勢屋稻荷に犬の糞』の語は、元祿時代にや行はれたりけむ。いづれも東京に最も多かりしもの也。さしにも多かりし稻荷も、今は悉く羽田の穴守稻荷に壓倒せらる。穴守稻荷を除きては、最も賽者の多きは、この威光天也。

寺は、目白不動、鬼子母神の外、根生院の大師、八十八ヶ所の中に加はりて、賽者絶えず。丘を負ひて、瓢箪池に土橋かゝり、扁舟浮び、家鴨群がる。明治の名僧雲照律師逝きて、目白僧園荒れたり。一時世に生佛と云はれし阿吟鉢羅婆、醜聞を傳へられてより、其名世に聞えざるに、江湖に落魄せるかと思ひの外、目白不動に接して邸宅堂々、堂宇も壯大なるが、門内深く鎖された

り。天主教會といふ耶蘇舊教の建物もあり。その門に、玫瑰塾と署せる札がか、れり。玫瑰とは目新しき字なるが、海邊に生ふる草の名なりとのこと也。

永樂病院とて、官設にして、何等入院中の費用を要せず。時には小遣まで與へて患者を收容する病院さへありて、目白の一臺、扱も、さまざまなる人のよりあつまれる處なる哉。學習院は、華胄の子弟の學校なるが、その建築如何にも質素にして蒲酒、都下の學校中、絶えて其比を見ず。目白臺の風致を味は、むと欲する者は、請ふ、江戸川を溯れ。殊に扁舟にて溯れ。都下には思ひもかけぬ幽趣あるを見む。關口の畔、駒塚橋の上、最も風致に富む。目白不動より學習院に至るまでの間、すべて貴顯の占むる所となりて、樹木しけり、松樹參差、ところ／＼屋宇を見る。丘陵としての風致は、都下他に比類あるべしとも覺えざる也。

### 月の隅田川

荒川堤へとて、川蒸汽にのりて、隅田川を溯る。つれば、福田瑞村なり。われ、この川蒸汽に

て隅田川を上下せしこと、幾回なるを知らざるが、今、瑞村と共にするにつれて、十年の昔の、そいろに忍ばる、かな。

われに、中村香峰といふ友ありき。その香峰は、瑞村と友たり。されど瑞村と余とは香峰を介して人物性行を傳聞せしのみにて、未だ相識らざりしなり。

香峰は、好男子にして、多情多恨の才子なり。短艇の選手にて、常に墨陀に遊びけるが、その粹な角帽姿は、墨陀の教坊を動かしぬ。名だ、る美人に思はれて、契りかはしけるが、いよく、卒業の曉にいたれば、浮世の風は、二人につらし。美人の親は、香峰の貧なるを嫌ひ、香峰の親は、美人の素性の賤しきを嫌ひて、良縁おはや、破れむとす。瑞村は俠骨と金とを以てし、余は貧なるまゝに、たゞ、舌を以てして、彼此の間に周旋して、事、やうやく、まとまりぬ。而して瑞村と余とは、未だ相逢ふの期なかりしなり。

都の残暑をよそにせる水郷の別世界に、香峰は、瑞村と余とを呼ぶ。勢を謝せむとするなり。かねて、未見の知己なる瑞村と余とを相逢はせむとするなり。溶々たる隅田川の流れ、櫻の葉越しに見えて、樓上、風いとすゞし。はじめて、瑞村と相逢ふ。互に胸襟を開きて、いはゆる一見

舊知の如し。三人とも、娛樂は、碁に於て、相一致す。負けのきにて碁を鬪はず。いつの間にや、杯盤既に運ばれて、例の美人しきりに酒を脩む。日暮れて、興ます／＼酣なり。仰いで、明月を見る。此の如きの良夜は得易からず。舟をうかべて、夜と共に語りあかさずやと云へば、二人踴躍して應ず。ひとり美人のみは、舟がきらひなりとて應ぜず。東坡の赤壁の遊にも、美人は無かりしやうなり。酒と月とあれば十分なりと、早く、あきらめしが、妹は、舟に酔はず、侍らせむといふ。妹、化粧して来る。その美、姉にゆづらず。老いたる舟子一人にて舟を漕ぐ。上流に溯る。月は白く、風は清し。四面蒼茫として、往きかふ舟も無し。櫓の聲、舟の水を切る音、天地の寂寞を破りて、美人の顔ばかり光る。さしつさ、れつ、ます／＼酔へり。

荒川と綾瀬川と相合する處、蘆荻しけれり。舟をその蘆荻の中にといめ、舟夫をも呼びて、杯をめぐらす。美人、十七八。下ぶくれの愛くるしき顔なり。月下に酌する手、雪よりも白し。われには、既に妻あり。瑞村には、未だ無し。月下の氷人とならむかと云へば、赤らめたる顔を袖にうづむ。青々たる蘆荻は、自然の屏風、四顧たゞ月を見る。涼風醉面に吹いて、快言ふべからず。且つ飲み、且つ語り、興酣にして、惜しや、一樽の酒、既に盡きたり。

香峰の家に歸りて、また飲む。いつの間にか酔倒しけむ。曉にいたりて、漸く醒む。瑞村はと問へば、昨夜歸りたり。明日の午後は、ひまなり。今日の碁の復讐をなさむとす。俗塵を離れたる上野の茶亭に會合したし、傳話してくれよとの事なりといふ。われ碁を好むこと、食色よりも甚し。されば大に銳氣を養ひおかむとて、また眠る。さむれば、午を過ぎたり。香峰と共にゆく。瑞村既に在り。碁を圍みて晩に至る。瑞村、晩食しにゆかずやといふ儘に、諾してゆけば、われを不忍池畔の一酒樓に導きぬ。酒いたる。大小妓數名來る。あ、われ圖られたり。昨夜舟中の費用は、われこれを辨じけるが、江戸兒氣の瑞村、そのま、にしては置かれず。言を余の好める圍碁に托して、余をこの酒樓に誘ひ出したるなり。

十年の歲月は、夢の如くに過ぎぬ。瑞村と相逢ふことも稀なりしが、此頃、同じく大久保村に住めるを以て、日夕相往來す。今日この行を共にし、舟中より墨堤を指點して、感いと切なり。當年舟をといめし處、舊に依りて、蘆荻はや芽を吐きたり。あ、山水は移らずして、人事は非なり。われ、逝く水に對して、覺えず、涙をおとす。悲しいかな、香峰は、才子多病のたとへにもれずして、その後間もなく病みて逝きぬ。知らず、墨陀の二嬌、今、在りや、無しや。

夜の電車

神田の西洋料理で催された第一高等學校文藝部の懇話會へ赴いて、歸りは、午後十一時を過ぎた。駿河臺下から、新宿行きの電車に乗る。乗客が多くて、腰かくる餘地がない。一隅に襪履着た老夫が腰かけ、その隣に、若き女が腰かけて居た。縞の着物に縞の羽織を着た一人の男、風呂敷包を二つ結びあはせて、之を肩にかけて立つて居たが、普通の商人とも見えず、職工とも見えぬ、刑事巡査かと思はれた。女をいたはつて、老夫を叱つて居る。女の隣に腰かけて居た男、席を女にゆづり、自分が老夫に接し、女をして、老夫に觸れしめないやうにとした。それに安心して、刑事巡査らしい男は、車の中央に進んでいつた。女の方は、ふりむきもしない。同じく立つて居たまゝに、顔を覗いて、聲をかけ、「君は感心だ、口がうまい」といへば、「お上手だ」と、不服な顔付をする。さては、我が思ひしことと、口にしたことと、しつくり相合せずして誤解を招いたかと悟り、「感心だとは、君が弱い女をいたはつてやつたのを褒めたのだ。口が甘いとは、辯

舌がさわやかで、言ふ事がてきばきして居るのを褒めたのだ。君は實に雄辯家だ」と云へば、はじめ、我が意を了解して、は、アと顔を解いた。

腰かけた老翁と、しきりに話し合ふのは、その路伴であらう。一目眇す。土佐の音を帯びて居たので、なつかしうなり、「失禮ですが、君は四國のお方ではありませんか」と問ひかくれば、「土佐だ。君も土佐だらう。僕は河野敏鎌の弟だ。君、河野敏鎌を知つて居るか」「お名前は知つてゐる。土佐の名士ばかりでない。日本の名士であつた」僕は、その弟だ

九段坂下に来れば、座があいたから、余は、老翁の隣に腰をかけ、例の男は、余の隣に腰をかく。例の男の顔を見るに、目はするどく氣は口邊にあつまつて居る。その顔付の鋭敏なのを褒めて、一つ手を見せ給へとして、手を見る。「お金もてる相がある」とのみ言へば、「お金もてるかネ」と喜ぶ様子だ。老翁口を出して「人相見かネ」といふ。「人相見なら、僕は日本一だ」「僕も人相の書を一二冊讀んだ事がある。どれくらゐの眼力か、一つためして、いたいかう」「君の妙は、世俗は、へんに思ふかも知らんが、人相學上の趣味をもつて居る目より見れば、何でもない」「二十八歳の時にこのやうになつた。生れつきでは無い」顔全體から、諸道具に至るまで、すべて、大きく出來て

居て、堂々たるものである。男の顔として、實に申分のない、立派な顔である。たゞ一の難を言へば、眉と目が餘り接近しすぎて居る。失禮だが、頭を見せ給へ」と、手を出して、烏打帽子をとれば、てらく／＼禿けぬけた頭の上に、汗の玉いくつとなく溜つて電燈の光を宿して居る。

「夜涙如く眞珠」とは、白樂天が月前に泣く少女の涙を形容した語であるが、老翁の禿頭の汗では、眞珠とも形容せられずと、をかしくなつたけれども、笑を忍ぶ。心は同じと見えて、向側に腰かけた人々、一時にどつと噴き出す。汗故にとは知らず。「何を笑ふか」と、喧嘩腰にならうとする。笑ふものは、笑はして置き給へ。人の笑を氣にするやうな小さい腹で、人相が見られるものか」少し言ひすぎたかと、老翁の顔を守れば、「さうだ、く」と、例の男も合槌うつ。老翁も、「さうだ、く」として黙つた。

「僕は河野敏鎌の弟だが、大に貧乏して居る。これを見給へ」と、袖を出して示す。黒の紋付、羊羹色と言はれたのも、早や數年の昔であつたらうと思はれる。われは、ふるぼけた飛白の羽織の袖を示し、「君は紋付があるから、まだ僕よりは、ました。僕は、この羽織の外には、紋付も持つて居らん」と云へば、老翁はハアと笑ふ。例の男、忽ち余の靴を撫で、見て、「君はこれだから

貧乏するのだ」といふ。思ひもかけぬ目のつけ方だ。六七圓であつらへた靴である。「驚いた。君はえらい處を観察する。そんなら君、僕を何者と鑑定するかね」と云へば、じろく／＼余の顔を見て、「役人のおふるだらう」

いつの間にやら、四谷見附は通りこした。「こゝでおりる。失敬」と、例の男起つ。老翁も起ち上り、その頬をつまんで、「これが人相學で貧相といふものだよ」とて、二人つれだつて、下りて往つた。

## 夜の村店

同郷の青年二人來り話す。何れも、新聞記者なり。小酌せしが、ちと運動せむとて、家を出でて、戸山の原をぶらつくに、いつしか日は暮れたり。一生何思ひけむ、角力とらぬかといふ。よしよとして取る。三人かはる／＼取り、つかれて渴を催す。どこかにて水を得むとて、落合村さしてゆくに、村店あり。これも一興と、入りて、矢大臣となる。これだけにて間に合ふやうにせ

よとて、袖中にありあはせの一圓札一枚出して、一生に托し、主婦にも、それとなく「しらせにこは、幾度か料理屋などにて足るつもりで、油断して飲み、いよく勘定して見れば、足らざりしことの多かりしに懲りての、良き分別のつもりなり。

客とおぼしきは、他に二人、いづれも職人體の男なり。一人は、年の頃三十ばかりにや。色赤黒く、頬骨高く、眼鋭く、肩を聳かして、さかんに飲む。肴は、一皿未だ盡きざるに、爛徳利は五本だけ、膳上に行列す。「おれは大工の龜だ」と、幾度となく云ふ。今一人は、たつた一本飲みつくしたるだけにて、腕をくんで、うとくねむるさまなり。

われら三人、下地がありければ、酒早く發す。よきこい節を歌ふ。「これは、よきお聲なり」と、主婦お世事を云ふ。「おぼあさんに褒められても、張り合ひ無し。どうだ、姉さん、うまいかね」と、女中を顧みて云へど、ほ、とばかりにて答へず。二十歳には足らず。まだ悪くすれては居らず。丸ぼちやの頬、ひとしほ赤し。主婦は四十前後なるべし。長き顔、青味を帯びて、額は出でたり。頬骨高く、眼凹みて凄し。何の話のついでなりけむ、女郎買の事話し出せば、うとく眠りし男、忽ち目をひらき、きよろく、見まはす。けにや、心掛ある武夫は、響の音にも、目

をさます。この男は、女郎と聞きて、目を覺ましたるなり。「女郎買なら、何處へでも、お伴申さむ。私は、妻も有ります。子も有ります。然し、おつきあひは致します。」と、急に肩を聳かす。柔和なる顔付なり。一人の男がしきりに、「大工の龜」をふりまはせば、この男は「濫澤組」をふりまはす。いづれ肩書の必要なる世の中、一人は己を恃む。一人は組を恃む。對照が面白し。その面相の猛柔の對照もまた面白し。

大工の龜なる者、今一本と注文す。一本は一合入りなり。「五本がきまりなり」と、主婦びんと刎ね付く。「客が注文するに、何も出さぬと云ふ理窟はあるまい」と、荒々しき聲を立つ。「このあたりでは、五本以上飲ますなど、注意せられて居ります。お前さんも今晩は、もう大分酔つて居るから、これで切りあけて、あとは、明日の晩の樂に取つておいたら、い、ぢや無いか。明日は明日、今夜は今夜だ。今一本つけた。そのやうに飲みたけりや、つけるにはつけるが、この五本の代をお出し、それから上の事にしよう。」大工の龜、こゝに至りて、大に凹む。主婦は煙草をふかして、そりや見た事かと云はぬばかりの顔付なり。「すこし待つて呉れ」「待たれせん」さらでだに凄かりし主婦の顔、こゝに至りて、忽ち般若の面となる。これではなくば、んな商賣は出



來ざるべしと思へど、腹の中で、覺えず、ぞつとす。大工の龜は首をひねりて、しばし考へしが、終に思ひ切つて、腹かけの中をさぐりて、錢少しばかり出す。六七錢の不足なり。主婦これを受取りて承知す。われ杯を龜さんに廻しけるに、うけて飲む程に、主人、ぬうと歸り來る。龜さん之を見るや否や、さきの威勢は、どこへやら、そこそこ出で、ゆく。一方の「遊澤組」も、いつしか去れり。

三十分は経たりけむ。大工の龜、また元氣よく入り來る。捲上重來の意氣込なり。今少し腰をすゑて居らば、龜さんの氣煩がはじまるべしと思へど、われらも拂の不足せぬうちにと、相促して去る。

### 雨の日曜

五月七日、日曜日なり。雨ふる。雨を冒して、庭の牡丹を見に行く。終に一枝を手折り來て、瓶にさす。細君見て、一つ花は不吉なりといふ。また行いて、更に一枝を手折り來て、さし添へぬ。

午後、雨はれたり。市ヶ谷佐土原町にて催せる「女子の友」の誌友會に赴く。演説すべき約ありたるを以てなり。一同撮影す。女は三四十人、男は丸山正彦氏、田邊井竹香、丸岡月のや桂小森松風、河合咀華など七八人。

ゆく春を白粉かゝる團圓かな

男女十二三人、居残りて雑談しけるが、竹香短冊を出して書けといふ。字は、へたなりと辭すれば、それは、承知の上なりとて笑ふ。さらばとて、舊作の詩歌など、幾枚となく書く。竹香畫をよくす。竹を畫く。一女學生、そをもち來りて、何か戒になる句を題せよといふに、

若竹や思つた程にのびもせず

竹香また蘭を畫く。他の女學生、そをもち來て、われにもと云ふに、

岩かけにふと見いだしぬ蘭の花

出雲出身の男、短冊をもち來て、君は出雲に赴任せしことありたれば、何か出雲に關することを書けといふ。

出雲名物園子に瑤瑤わけて尊い大社

### 雨の日曜

團子とは、出雲の方言なり。わざと、ふざけてつくりたる都々逸なれば、こゝには説明せざるべし。

座を顧みるに、青年の學生五六人あり。誰か腕押しでもやる人はなきかと挑めど、應ずるものなし。白髪の老人なる丸山氏、慨然として、左の手ならば、相手せむといふ。さらばとて、十分あまりも、汗を流して苦戦せしが、知らず、やさしき女子達は、之を見て、何とか思ひけむ。

### 馬野山

「何と寒い晩ではござらぬか」

石見の豪族、益田藤包は、雪ふりしきる空をながめながら、かくつぶやいた。

「まだ十一月にもならぬに、實にめづらしい大雪でござる」と相槌うったのは、出雲の豪族、三澤爲虎である。

「しかし、益田氏、雪が寒いどころの話ではござらぬ。たつた六千の兵が、八萬の大軍に押し寄

せられて、我等はまるで、囊の中の鼠ではござらぬか。この馬野山は、別に要害といふではなし。あの高い山の上から大軍に見下されて、たまつたものではござらぬ。敵の大將は、智勇兼備の木下秀吉、如何に味方の大將吉川元春公が、鬼神のやうな勇者でも、六千と八萬との對陣では、とても勝てる筈がない。それに何ぞや、後の大川の橋をうちこはされて、一足も後へは引かぬといふ御決心、拙者は餘りの無謀と存するが、貴公の御考は」

「拙者も至極御同感でござる。さりながら、陰でいかほど愚痴をこぼしたとて、しかたのない話これから共々に本營へ參つて、元春公を諫めて見やうではござらぬか」

「承知いたした」

馬のいな、き合ふ聲ばかりを残して、雪は、山陰の山野をうづめつくした。その白雪も、ものすごい夜の色につ、まれて、日本海をわたつて來る風ばかりが元氣に叫んで居る。

兩將はやがて元春の前へ出た。

元春は一向平氣で、少しも平生の様子と變らない。

「これは、よくおじやつた。われ等無骨なる武士の身では、この初雪に、一首といふ風流も

出来ないが、せめて酒でも飲んで寒さを凌ぐといたさう」  
爐の前で、酒宴が開かれた。

あまり元春の様子が平氣であるから、兩將は氣おくれがして、それを言ひ出しかねた。

その中に、元春はだん／＼酔うてくる。終にねてしまつた。

嗚呼わが豪膽なる吉川元春は、八萬の大敵をひかへながら、ぐう／＼と眠つたのである。

兩將は、たゞあきれて、空しく陣屋へかへつた。

かくて、夜があけた。

秀吉の兵數千人、糧食を種石城へ送らうとして出掛けたのを見て、元春は鐵砲組に命じて、之

をうたせ、敵の一將を斃した。敵の兵なほ萬人餘りついで出て來たから、元春の子の元長、經

言の二人、わづかに二千の兵を率ゐて向つた。秀吉これを見て、急に命じて兵を收めた。南條元

續が「なぜ戰爭なされぬか」と問ふたけれども、秀吉は笑つて答へなかつた。

翌日、秀吉は、兵を引いて去つた。元長これを追撃しやうと請うたけれども、元春が許さな

つた。二三日たつて、元春は、馬野山を出立して、安藝へ歸つた。

元春がわづか六千の兵で、おちつき拂つて馬野山に據り、橋まで斷つて歸路をなくしたのは、

どういふわけであらうか。秀吉が八萬の大軍を率ゐて居ながら、戦はずに去つたのは、どういふ

わけであらうか。英雄たゞよく英雄の心を知る。とても益田、三澤などの知り得る所ではない。

とにかくに、元春が孤兵を以て馬野山にたてこもり、秀吉の八萬の軍と對陣して、遂に秀吉を

して空しく引き返さしめたのは、古來山陰道で起つた出來事の中で、最も壯快なる出來事である。

この時、元春の弟の隆景は、出雲の富田まで來て、そこにとまつて、馬野山へは援兵を出さな

つた。翌年四月、秀吉は備中に入つて高松城を攻めた。隆景は、この城を援はうとして、更に援

を元春に請うた。元春の諸將は、異口同音に「去平馬野山の陣の時、隆景公は、高見の見物をし

て居ながら、御自分の都合の悪い時ばかり援兵を乞はれる。餘り自分勝手な話であると不服を唱

へたが、元春はひとり首を振つて、「去年、隆景が援に來なかつたのは、何かわけがあつたであら

う。今その急を聞いては毛利家のためにだまつては居られぬ。諸君がいやならば、拙者は一人に

てもたすけにゆく」と言ひきつた。諸將はその情のあついに感服して、ひたすらに詫び入つた

といふ事である。

馬野山にこもつた勇ましい決心と、何事も打ち棄て、弟を援に出掛けたやさしい心根とは、よく元春の人物性格を顯して居る。實に元春は日本武士の粹である。

風 船 玉

ばつと日がさして、風なきまゝに、運動にとて、電車を閉却して、家路さして歩く。雨餘の泥濘残り。危くも轉ばむとして漸く支へたるが、その拍子に、右足に穿きたる足駄の前齒抜けた。それを入れむとして見れば、やれく前齒の入るべき溝の底より前へかけて足駄の臺が一面に横に割れたれば、最早溝の用をなさず。新に買ふだけの錢は持たず。止むを得ず、片足だけは一本歯にて、のそくたどりのゆく。

路に風船玉を賣るものあり。子供にとて、五つばかり買ふ。下女とおぼしき女、四五歳ばかりの男の子をおぶひ半纏に負ひたるが、一つ買ひて子供にもたすより早く、子供誤つて絲をはなして、風船玉ふはくと空に浮き上る。あれよくと言へど、甲斐なし。風船玉賣る男、氣の毒が

りて、その代りに今一つ下女にやらむとすれど、下女辭して受けず。強ひて止まざるが、こんどは子供が承知せず。さきを買ひたるは、青き玉なり。今、風船玉の代りにやらむとするは赤き玉なり。赤は厭なりと、かぶり振る。出来て居るは、あいにく赤のみなれば、別に青玉をつくり、別に錢を拂ふ。子供は唯風船玉の面白さを知る。錢の尊さを知らず。さすがに、前の失敗にかんがみけん。しつかりと握りつ、うれしげに何やら唱歌らしきもの歌ふ聲。次第々々に、風船玉と共に、霞みゆく。

わが手にさけたる五つの風船玉、路上の子供の心を惹くこと一方ならず。到る處の子供、見付けては、近寄り來りて目を凝らす。犬に牛肉、猫にまたび、狐に油揚、青年に戀、俗人に錢、氣を負ふものに功名、釣られて面白がるが、浮世にや。五六人集まり居りたる中の年最も幼なき子、われを風船玉と思ひけむ。賣つておくれと小聲に言ひけるが、他の年や、長じたる子、あれは風船玉では無しと言ひきかするに、それと納得して口をつぐみ、目をひからして見送る。店屋の前に、三人ばかり遊び居りたるが、三人の眼、忽と風船玉に向つて凝る。その中の一人、おくれよといふ。眼を凝らす子供は幾十百人といふことを知らざるが、おくれよと云ひたるは、唯

此子のみ也。こは商家の子也。近年流行の出齒るとは、これにや。女に出齒りて大久保の龜とやらになり、金に出齒りて成金黨となり、政治に出齒りて陣笠連となり、學問に出齒りて街學先生となり、文學に出齒りて自然派文士となるにや。

家にかへりて、風船玉の二つは、親戚の子に與へ、あとの三つを三男、長女、四男の三兒に與ふ。上の二兒は既に中學校に通ひ居りて、最早風船玉など欲しがらざれば也。四男忽ち縁をはなして、風船玉空に消ゆ。欲しがりて泣く。三男に向ひて、お前はもう三年生だから、風船玉などは譲つてやれといへば、能く聞きわけて譲る。長女の持てる玉、ひしなぶ。欲しがりて泣聲出す。お前も一年生だからと云ひきかす程に、四男のもてる玉もひしなぶ。親が子を喜ばせむとせしも、子が喜びしも、ほんの僅々二三時間の事なりき。

宴 會

殊に我國の宴會こそ可笑しけれ。けに初は處女の如く、終りは脱兎の如し。酒三行、一座なほ

鹿爪らしき顔しておとなしき也。大妓うたひ、小妓舞ふも、なほ眞面目也。既にして漸く酔ひて席を離る、もの多く、談話の聲高まるかと思へば、搦戦の聲早や起る。喉自慢は歌ひだし、藝ある者は更に尻はしよりて躍り出す。手持無沙汰に獨り坐して、煙草をふかすものは、所謂野暮なるべし。おつに澄まして、聞いた風の事しやべりたつるは、所謂半可通にや。得意氣に昨夜の芳夢を語るものあれば、目を細くして、ひそかに藝者の顔ながむるものあり。下らぬ事に腹立て、口論するものあれば、甚しきは、なぐり合ひをはじむるものあり。をどり、跳ね、歩きまはるにつれて、塵埃座中に滿つるをも顧みず、平氣にて且つ飲み、且つ食ふ。かゝる程に二次會にゆくもの多く、一人へり、二人へり、終に幹事のみとなり、勘定とりて見て、互にがき顔するは、案外に酒多くして、自腹をきらざるを得ざるなるべし。すべて今の世、送別會と稱し、歡迎會と稱し、親睦會と稱して、宴會を開くこと多けれども、實は名をこゝに假りて、たゞ己が酒を飲み、女に戯る、興を取らむとする也。悪しき風習なる哉。

### 少年の大食

余が知れる家の子、年十四、中學に通ふ。その母、用談ありて、我が家に来り、話しのついでに、こぼして曰く、この頃、せがれの學校にては、遠足したり。朝三時に起したるが、氣はせく心は躍る、飯は二杯だけにて、飛び出したり。辨當の外に、菓子類を持參せよとの事なれば、壽司二十七個、パン十個、うで玉子三個、林檎二個、チョコレート三個、蜜柑二個をもたしてやりたるに、歸り來りて語るを聞けば、八時になりし時、腹がへこついてたまらず。されど菓子を食へとの命令出です。九時になりてもなほ出です。漸く十時になりて、午食の命令出でければ、やれうれしやと、もてるもの、みな一時に平らけて仕舞ひたりとの事なり。あれだけのものを一時につめこみて、それでも、よく腹のさけざりし事かな。考へても見られよ、小兒は二三時もすれば腹がへるものなり。歩けば、なほ更の事なり。菓子をもたすなら、大抵時間を見はからひて、午食とは別に食はすべき筈なるに、凡そ六七時間も、何も食はずに歩かせて、辨當も菓子も一時に食へとは、今の中學の先生と申すものは、あまりに、わからずやの、おとうちやんならずやと。東京辯のはきくしたる舌を揮ひて語る。事もとより小なれども、この婦人の言ふ所、一理なきにあらず。聞くがま、にしるして、世の教育家の參考に供す。

### 健氣なる雜僧

年若き僧、重き荷物を負ひて、突然、余の草廬を訪ひて曰く、われは、羽後の産なるが、越中の禪寺に養はれ、後、北海道の寺に移れり。以爲へらく、今の世大に佛教を興さむとするものは、大に學ばざるべからず。大に學ばむには、大學に入らざるべからず。大學に入らむには、高等學校を経ざるべからず。北海道にありては、學ばむに、其人なし。薪水の勞を執らむに、願くはわれを僕として使ひて、暇々に我に教へて高等學校に入り得るだけの學力をつけさせ給へ。洵に唐突なれど、學生訓を讀みて、先生を慕ひて、遙々都に上れる也。

其容貌を見れば、壯健らしき體格にて、顔は溫和にして、何處となく、かはいらしく、所謂慈

悲忍辱の相あり。年を問へば、十九歳なりといふ。其學問の經歷を問へば、たい尋常小學校を卒業したるのみなりといふ。これ迄、わが廬を訪ひし少年すくなからざれども、未だかばかり愛くるしき人を見ず。われあはれに思ふこと、太だ切也。答へて曰く、高等學校に入らむは、容易の事に非ず。中學校の課程をふみて、人並より出來のよき人ならざるべからず。中學校の課程をふまむには、中學校に入らざるべからず。今日、中學校の課程を悉く一人にて教へ得るものは、恐らくは之なかるべし。一、二の課目ならば、余も教ふるを得べけれども、自分の修業に忙しく、且つ年が年中著述に追はれ居れば、毎日二三時間を割きて、人に教ふることは、余の境遇の許さざる所也。われも學生の頃は、家より學資を得るに由なくて、人の家の立關番をしたることもあり。自活したることもあり。當時以爲へらく、他日志を得ば、獨身にてくらし、殊勝なる貧書生數名を養ひて、死ぬるまで、書生の境遇をつゞけむと。然るに、ふと誤つて妻を設けぬ。多くの子を擧げぬ。家貧なるに、養ふべき母あり。姉あり。叔母あり。甥あり。當年の素志、今や畫餅に歸しぬ。今、君を養ひ、君に學資を給して、中學に學ばせむことは、余の境遇の許さざる如何せむ。今の世、大に學ばむには、大に學資を得ざるべからず。君は何とかして、學資を得る

の途なきにや。

僧曰く、高等學校に入らば、學資を乞ふを得べけれども、それまで二三年間、先生の爲めに薪水の勞を執りて、教授を仰がむとばかり思ひて、都に上れり。今の處學資を得るに由なし。

余曰く、學資なくば、大學に入るに由なきも、學資なしとて、必ずしも學問が出來ざるに非ず。殊に佛敎を興さむ準備の爲めとならば、一通り普通學の書を読み、同時に英獨の語學を修めて、西洋哲學の書を読まば可なるべし。さすれば、大學に入らずとも、自活獨學にて、之をよくするを得べく、中學、高等學校、大學を経るよりも、準備の年月が、遙に短縮すべし。學資なしとならば、大學に入るの志を翻して、他に修學の途を講じて、如何にや。

僧斷然として曰く、如何に多くの年月を費して、頭に白髮を生ずるも可也。又如何なる苦痛を嘗むるも、余は、大學に入らずんば、止まじ。先生の言によりて、僅々二三年の修業にて、高等學校に入る能はざることを知りぬ。今の力量にては、中學に入らむことも、覺束なし。これより去りて、佛敎の學校の小使ともなりて、苦學して、ひと通りの學力をつけてのち、來りて先生に見えむ。

ひと夜、わが家にやどりて去りぬ。われその後影を見送りて、何となく涙こぼれぬ。後、數日、さる佛教の學校の小使となりたる由、端書にて、言ひおこせたり。健氣なる少年かな。その志を變ぜずして、其言を實行せば、必ずや、宗教界の偉人とならむ。かけながら祈る。好在なれや。

懶惰漢

一人の懶惰漢あり。握飯を懐にし、手も懐にして出でゆく。腹が減りたり。握飯を食ひたし。されど、手を懐より出すが、面倒也。さればとて、口は懐には届かず、誰か来て、握飯を出して呉れるものは無きかと、人をあてにして、のそ／＼と歩行をつゞく。来れり、来れり。菅笠をかぶりて、大に口をあけたり。口をあけたるは、腹が減つて居るに相違なしとて、もし／＼、懐の握飯を出しては下されずや。半分を進呈せむと云へば、案にはづれて、答ふらく、われも菅笠の緒が弛みて、締め直さねばならねど、手を出すが面倒さに、斯く頭をつ、ばりて、笠を支へ居るくらゐなれば、どうして／＼、人様の事に我手を出し申さむや。御免被るとて、ふり向きもせず

に去りゆけり。

嶺雲に逢ふ

山本氏と共に熱海に下り、久しぶりにて嶺雲に逢ふ。思ひしよりは顔色もよけれど、不治の病にて、自ら歩行する能はず。薄倖なる才子の一生、斯くて寂寞として終るかと思へば、心中涙なきを得んや。嶺雲曰く、この前の日曜、快晴に乘じ、今生の思出にとて、山輿に乘りて日金山に上りたりと。これ恰も余が神山に上りたるの日也。日金山より神山見ゆ。神山よりも日金山が見ゆる筈也。人こそ相見えされ。二人の視線は期せずして相合せしならむかと、感慨に堪へず。都は、これより寒風吹きささばむとす。君今、熱海の如き暖地を去りて、都に還るは、花を見ずて、歸る雁に似たらずやと云へば、けにその通りなれど、あまり久しく都を離れたり。病の爲めには都合よけれど、金を得るには都合悪し。命ある間は、都に出で、金儲けの算段せざるべからずといふ。我とても同じ文を賣る身の上、巫陽未だ我魂を招かず。住みたくも無き塵の巷



に住み、さけたくも無き頭もさげざるべからずとて相笑ふ。

歩行の出来ざる嶺雲は、都へかへるにも、交通機關を詮索せざるべからず。輕便鐵道は苦し。人力車も苦し。熱海より國府津までは汽船に由らむと思ひさだむ。一夜あくれば、天氣よく、風も無し。嶺雲は人に扶けられて立ち出づ。埠頭まで送りて袂を分つ。吾は輕便鐵道に乗りて、伊豆山、門川、吉濱を過ぎて、眞鶴に下る。昔、頼朝が安房へ渡る時に、船出したる處、三方小山に圍まれて、波靜かなり。

學生演說會傍聽の記

一

青葉しけれる五月の半、博文館の中學世界の主催にて、東京學生聯合演說會を、都の中央なる青年會館に開き、學生の演說十五、先輩の演說四、之に永井樂長の指揮にて二十五人の合奏

に成れる陸軍軍樂をも交へ、聴衆は二千人に近く、おくれて至りしものは、入るを得ずといふの盛況を呈せり。東京にて中學以上の諸學生を集めて演說會を開きたるは、之を劈頭第一となす。余は博文館の思付と勞とを多とする者也。

十五人の學生は、いづれもみな各學校の辯論部の選良也。之を學校わけにすれば、帝國大學、明治大學、早稻田大學各一人、慶應大學一人、其豫科、其普通部、第一高等學校、外國語學校、高等工業學校、錦城中學、東京中學、日本中學、高輪中學、明治學院普通部各一人也。更に之を原籍の地方別にすれば、東京、名古屋、兵庫、岡山、千葉、福島、青森、鹿兒島、松山、長野、熊本、伊勢、常陸各一人、上州二人也。二つの組に分ち、第一の組に中學程度の學生を收め、第二の組に大學及び豫科程度の學生を收む。中學生と大學生とは、年齢に於ても、學問に於ても、思想に於ても、非常なる懸隔あれば、二組に分けたるは、至極尤もの事也。

二

有繋に血氣の青年揃として、態度潑刺として、見ても氣持よく、意氣軒昂、氣焰、場を壓す。日

糖事件は何度となく昇ぎ出され、世を罵る聲、幾んど一貫したるが、年少の組にては青年自勵むといふの聲多く、年長の組に至りては、一轉して、青年を楯に取りて、老人の聲も起れり。帝大法科の大澤一六氏は、論文的に老人を罵り、慶應豫科の和氣律次郎氏は、美文的に老人を罵れり。いつの世、いかなる國にても、老人と青年とは、常に相闘ふもの也。昨日紅顔今白頭」と詠じけむ。昨日罵りし人、今日は罵らる。今日罵る人も、明日は罵らるべし。老人の多數は、今一度青年に成つて見たしと思ふもの也。

演説中の花とも思はれしは、和氣氏の演説也。その美文的演説は、恐らくは、和氣氏の獨舞臺なるべし。その容貌、その音聲、その演説、すべて相一致す。紅顔可憐の美少年にして、其容貌既に美文的也。音聲情を含みて、而かも強みもあり、流麗圓轉として美文的也。否、音樂的也。其演説の内容は、無形の美文也。巧に例を引き、譬を取りて、才思涌くが如く、態度も生動し、辯舌も、生動して、聴くものをして唯恍惚たらしむ。利根河畔の月夜、逝く水に對して、暗涙を催すかと思へば、一轉して、青年の血はあかし、三十以上の人は褐色になり、終に黒くなるとして青年の爲めに氣焔を吐く。けにや、初は處女の如く、終は脱兎の如し。氏は抒情的演説に於て、

其獨特の妙を見る。

和氣氏の演説の美文的、情的演説に對して、一高英法二年の岩切重雄氏は、硬文的演説の妙を極めたり。活氣の迸れる顔付にて、態度もがつりして居り、而かも温みもあり。題目の捉へ處も一寸目新しく、説く所も陳を化して新となし、暢達の辯にて、落つき拂ひ、引く古言も切にして、譬喩も面白く、微頭微尾、隙間なくして、氣力溢れ、覺えず、人をして襟を正さしめたり。最終の番に當りたる高工本科三年の鈴木誠一氏は、難局を引き上げたものと云ふべし。然るによく落つき、快辯縱横、既に倦み、既に疲れたる聴衆をして耳を澄まさしめたるは、天晴のお手際也。對清政策の不振を論じ、清國留學生に同情を表して、日本の學生を罵れり。清國留學生聞かば、必ずや感涙に咽びしなるべし。

最終の前に出でたる明大法科三年の廣瀬繁太郎氏は、最終よりも一層の難局に當れる者也。聴衆に對しての苦心は、最終と異なる所あらず。その上に、最終の演説者に對しての心遣ひもあるべし。さればにや、氏はあせり過ぎたり。辯は流る、が如し。説く所、聴くに足るべき箇條も少なからざれども、元來憲政觀などいふ大問題を短時間に演ぜむとするが無理也。されど、要點を

稿出すれば、まだしも、のべつにて、だらしなく、散漫にして、人をして、こゝぞと思ふ感起さしめざりき。氏にして落つきて腹に力を入れ、内容が今少し條理立つやうに工夫をめぐらさば、好辯者たるを失はざるべし。

慶應理財科一年の金子伴次郎氏は、「大隈伯の百二十五歳説を惜む」といふ題をか、けたるが、精神的不死といふ陳腐なる説を取り來り、どこが、えらいといふ捉へ處もなく、唯大隈伯はえらしと謳歌したるは、演説としては、あつけ無し。辯は達者にして、一寸した頓才も利く。聲には力あるが、時々たるみたり。氏は、この度は、内容の撰擇に於て、既に失敗せり。殊に草稿なくとも思はる、演説なるに、而かも、その草稿と首引したるは益々失敗也。

外語英三年の片山俊氏は、一風變りて、英語演説を爲したるが、英語は余には不可解なれば、評なし。唯達者なものとのみ思ひたり。

早大師範三年の上井磯吉氏は、聲も大にして演説振りも壯快也。眞面目に青年の現状を訴へて自家の覺悟を説けり。何處かに教育家らしき、じみなる處あるやうに見受く。帝大法科二年の大澤一六氏の青年論は、ひと通り聞えたり。態度からして元氣にして、辯は雄也。演説壯快よりも

一步進みて痛快也。まづ出來のよき演説と云ふべし。慾を云は、感情に偏するは青年の習とは云へ、又時間の制限ありとは云へ、法科大學生ぐるるの人ならば、今一步進みて、老人と青年との長所短所を明確に論述しては如何にやと思はる、也。

三

第二部の演者は、八人ありしが、第一部の演者は七人ありき。この七人の演説が、僅々一時間餘にてすみたり。その中にて、白眉を推すべきは、慶應普通部五年の三上忠雄氏也。井伊大老を論じて、知己の恩に感激して職に殉したるものとなし、今の評判の瀆職政客に及び、大老の歌を誦し、美辭をあやつりて大老當年の心中を思ひやるなど、上出來の演説也。明治學院普通部四年の岩永一郎、東京中學補修科の大木康孝、錦城中學五年の佐山毅氏の三氏は、いづれも活氣ありて可成りの出來也。どうした事にや、岩永氏は聲が嘎れ居りしが、進むに従つて、益々大きく強くなりたるは、さすがに練習の功と、嬉しく思はれたり。岩永氏の演説も、や、耶蘇説教くさく思はれしが、京北中學五年の石川正儀氏は、まだ年がゆかぬだけに、耶蘇説教口調の皮想のみ學

びたり。その演説、浮華に失して、罷もぐにやつきたり。その流暢の辯は、みが、ば、物になるべし。日本中學五年の野村一雄氏は、壯士的態度あり。その演説も、慷慨悲歌的也。柔術でも學びたるらしき體付なるが、まだ演壇で落ち付くまでには至り居らず。さきがつまると水を呑むは拙也。聲は強けれど、能辯は、氏には不可能なるべし。されど、内容に苦心せば、必ずや雄辯家たるを得べし。高輪中學四年の秦玄誠氏の説く所、中學生とは云へ、演説としては、あまりあつて無し。そのあつてなき處に、氏の誠實あらはれたり。氏は風采揚らずといふ先天的の損がある上に、兩手をつきて、俯して草稿と首引したるは、大に失敗也。氏の取柄は、誠實に在り。その誠實に内容の美を加ふれば、始めてよく人を動かすを得べし。その落つて居るは、さすがに練習の功なるべし。

## 四

學生の演説には、時間の制限あり。殊に聴衆は、どりや一つ冷かしてやらうか。といふ意氣込あり。殊に晴の場處の經驗も乏しかるべし。そこになると、先輩は、利ある地位に立てり。既に

幾多の戦場を経て、勳功赫々たり。聴衆は、始めより仰ぎて見る也。この日、學生の演説の外、主人側として、巖谷小波開會の辭をのべたり。例の輕妙流麗の辯、簡單に切りあけたるは、大に氣が利きたり。來賓の演説には、安部磯雄氏先づあらはれたり。氏は、當代有名なる演説家也。常識よく發達して、よろづ堅實なるは、氏の人物の本色なるらしく、その堅實なる風は、その容貌にもあらはれ、その演説にもあらはる。どつしりとしたる體付にて、年なほ壯なるに、頭には早や白髪あり。斯くの如きは、必ず根が正直なるの人也。志賀矧川、千葉鐵藏諸氏も、この型の人也。徳富蘇峰も根はこの型なるが、才多きと腹のひろきとの爲めに、いろ／＼に變化す。この日安部氏は、讀書と人格修養とを、演説の益として、簡潔に、而も趣味多く説き去りて、早く壇を下りたるは、よくこの日の場合を考へたるものにて、さすがに場慣れたる人也。言はゞ將軍輕騎を率ゐて敵を追ふもの也。演説を好むものは、必ずや表裏なき人なりとて、島田三郎氏を公人の標本とほめ、翻つて日糖事件に及び、更に沈黙を利器とする醜類にとゞめの刃をさしたるは、この演説の山とも云ふべきものにて、堅實の中に鋭鋒のこもれるを見る。

建部文學博士は、慷慨悲歌の學者にて、その容貌、巖立して虎視す。儒教の所謂治國平天下の

趣味を解して、一家などは、その眼中に無かるべけれども、惜むらくは自我の城壁あまりに堅く、常に好んで勇ましく一騎打の戦闘をなす人也。外山博士の跡をつぎて、文科大學に社會學を講ぜるが、教授としては、外山博士は建部博士に及ばず、人物の大は、建部博士とても外山博士の足下にもおつ、けざるべし。われ曾て學生時代に建部博士の詩吟を聞きしことあり。激越にして沈痛。その音今なほ耳に存す。その詩吟にて推すも、博士は腹中必ずや涙ある人也。而して、その涙は常に國家に向つて瀉ぎつ、ある也。一寸氣取るやうに見ゆれど、氣取ると云ふよりは、むしろ氣張る也。これ博士の自我の城壁の外にあらはれたるもの也。この日、超達にして沈痛なる快辯を修辭的にふりまはして、我國條約改正前の窮狀より、獨逸勃興の原因に説き及ぼし、風霜烈日、殺氣、場を溢る。更に『今の三十歳以上の人は詛はれたる哉』と叫びし學生の言を捉へて、『國家の爲めに心配するを要せざる今の青年は幸なる哉』と、例の一騎打の勇闘をさへ試みたり。賢明なる聴衆は、必ずや、博士が國家に瀉ぐの涙を汲み知りしなるべし。

建部博士は、さきに對露硬派の七博士と歌はれたる一人なるが、今一人、同じく七博士に列したる中村法學博士も演説せり。博士は、仙骨ある學者也。温乎たる其容、仰ぐべし。其辯舌、流暢自在、春水の溶々として流る、が如し。一言一句、凡てこれ金言名句、徹底せる達觀あれば、温かき涙もあり。例證綿をくり出す如く出で、満場水を打つたる如になり、聴衆をして、感歎措く能はざらしむ。建部博士を利劍を擁する不動様とすれば、中村博士は蓮花をもてる觀音様也。演説終はりて後、晚餐の卓上、更にいろ／＼卓上演説がありたるが、所謂血のあかき和氣氏の才辯、最も傑出し、今日の日記は、赤インキで書かねばならずといふ。けにや、朱にまじはればあかし。われもこの日は、所謂褐色とやらの血が、また紅くなりたりむ心地したりき。

### 余の悪癖

われに、一悪癖あり。斯う言へば、何と云ふか。斯うすれば、何とするかと、己れの腹に無きことを言ひて見、して見て、人をためすこと、これ也。かくて、われは、人の賢愚、正邪、大小高低などを判す。いつも必ずやるといふ譯では無し。をり／＼やつて見る也。今こゝに一例をあけて見むに、曾て、酒宴の席上、初對面の高貴の人に向ひ、人相の話を爲したるついでに、あな

たの顔は、女が好くの相ありと云ひたることありき。これあまりに突飛なる言也。また無禮なる言也。されど、余の腹中にては、この突飛なる、無禮なる言に對して、何と答ふるかを試さむと思ひし也。もしも、如何なれば、女を好くの相ありと云ふかと問はゞ、これ余の術中に陥りたる也。人相の書に、かうく書いてありますと、にけて仕舞ふ也。そのやうな人ならば、未だ共に談ずるに足らざる也。もしも、突飛なり、無禮なりとて怒るやうな人ならば、雅量が無き小人物也。もし又、所謂鸚鵡がへし風の答をなさば、小才子也。われ若しか、ること言はるれば、笑ふより外の事を知らず。これ智の無きわざ也。この高貴の人は、何と答ふるか、例の余の惡癖、ひそかに他を試して見たる也。

然るに、余の言終るか、終らざるかに、早く、且つ軽く、「いや、さうぢや無いよ。女を好く相だよ」と、答へぬ。けに、頓智即妙、余をして唯啞然たらしむ。すべて、談論にしても、行爲にしても、このやうに行けば、實に申分なし。余は、かくて、其人となりの大にすぐれたる所あるを知れり。

人を試すは、余のみにあらぬやう也。この頃、杉浦重剛先生が、東京日々新聞に西芳菲山人を

引ふの文を出されたるが、その中に、

某年紀元節に臨み、塾友諸氏二十有餘名を率ゐて、松陰神社に詣でたりし途次、山人の家、青山南町にありしかば、余は諸氏と共に、山人を訪うて、茶を乞はむとせり。蓋し山人が家族は極めて少數なるが故に、如何なる方法によりて、二十有餘名に茶を與へむとするかを心潜に試みたりし也。

かくて、杉浦先生は、芳菲山人の才を試みられし也。然るに、芳菲山人は頓智のある人也。

然るに、山人平然として、大茶碗三四個を出して、直に飲むべしとて進められしかば、衆先を争うてこれを飲むに、これ正に茶にあらずして、清酒なりけり。蓋しこれ山人の當意即妙にして、茶は回し飲をなす能はざるも、酒は乃ち回飲を得るを以てなり。山人の頓才は、斯くの如く少數の茶碗を以て、一時に多數の人に満足を與へたりき。

織田信長も、曾て森蘭丸を試したる事あり。蘭丸或る時、信長の佩刀の鞘の千段巻を數へしを信長ちらと見たり。他日、信長、その刀を諸侍臣の前に出し、千段巻の數をあて、見よといふ。諸侍臣、それ／＼數を云ひしが、蘭丸のみは、黙して言はず。何故に言はぬぞと問へば、臣嘗て

數へしことあり。故に云はずと答ふ。信長いたく、その正直なるに感服せり。  
 信長は、また會て蘭丸を試したることあり。次の間の障子をしめて來よと命ず。至れば、障子は、しまつて居たり。これが正直一方にて智の淺き人ならば、そのまゝ、歸り來るべけれど、蘭丸は、さすがに智惠のある人也。障子を靜に少しあけて、然るのちに、強く音たて、しめて、歸り來れり。信長問うて曰く、障子はあきてありしかと。答へて曰く、しまつて居たりと。さらば、あのしめる音のしたるは如何なるわけぞと問へば、しめて來よとの命なりしが、至り見ればしまり居たり。そのまゝ、復命すれば、諸臣をして、君をぬかりものなりと思はしむる也。故にわざと靜にあけて、急にしめて來りしなりと。かくて、信長は、蘭丸の頓智をも試して知りたる也。  
 豊臣秀吉も亦千利休を試したることあり。庭を掃除せよと命ず。至り見れば、綺麗に掃除がしてありたり。乃ち楓樹をゆすつて、二三片の葉を落して歸り來れり。さすがに茶道の達人なる哉。源頼朝も諸弟を試したることあり。金盥に熱湯を入れて、諸弟をして手を洗はしむ。みな色を變じたれど、義經のみは、神色自若たりき。かくて、頼朝は、義經の膽勇を知ると共に、其猛惡なることを知れり。

人を試すの例、なほ他に多かるべし。余の如きは、元來が才智の無きものなれば、人を試すもたかゞ知れたもの也。智の深きもの、才のすぐれたる人にては、試す方法が、複雑にして、且つ巧妙也。人世に立つ以上は、一生、試験をうけつ、あるものと覺悟せざるべからず。學校の試験は、むつかしきやうにて、實は易し。社會の試験が一層むつかしき也。  
 さらば、如何なる覺悟を以て、社會の試験に應ずべきかと云ふに、たゞ誠心誠意あるのみ。つくりかさざり、術ひなどしては、凡人の前には通れど、常人以上の人には、直ちに看破せらる。古人も云へり、正直が最も巧妙なる策略なりと。

### 梅窓一朶を讀む

人生、名を擧ぐるは、必ずしも難からず。晩節を保つを難しとなす。一旦、主義を把つて立つも、我身に利あらずと知りては、忽ち之を擲ち、若しくは他の主義に移り、順境に得々として鼻息を荒くするも、逆境に陥れば、意氣忽ち沮喪し、権力に恥を忘れ、金力に操を賣り、貧にやつ

れ、病に泣き、人情の反覆に愚痴をこぼし、一身の薄命に人を恨み、天を咎むるなどは、まだ常人の域也。生死得喪の外に超脱し、貧苦病患の間に泰然たる者にして、始めて晩節を保つを得べし。而して是れ毅然たる氣魄ある者に非ずんば能はざる也。

杉浦重剛先生、病辱に在りしこと七八年、幾度か死に垂んとして死せず。二豎も先生の氣魄を如何ともするなく、病氣終に全快して、また門を出づるを得るに至れり。嗚呼、先生の如き名士が、七八年間の雌伏垂死の境遇、到底常人の堪ふる所に非ず。然るに先生の本領、ますます此間に發揮せられて、窮して益々振ひ、老いて益々壯也。頭に白髪は加はりたれど、顔容には一層の尊さを加へぬ。この頃近年の作に係れる詩歌文章を集めて一冊となし、梅窓一朵と題して、知人友人及び門生にわかつてり。蓋し病氣の回復を報する也。

先生が一代の高士、賢人、教育家中の教育家たることは、既に世上の定評あり。余を以て見るに、先生の一面は、漢文學の骨髓を身得せる日本男子也。先生は、明治の初、西洋に留學したるも、漢學の素養深し。而かも、先生の靈性は、文字の末に拘泥せずして、直に漢學の骨髓を身得せり。詩を作るも、詩人の俗態なくして、高士の眞趣あり。詩の餘力を以て和歌にも及べり。世

の所謂漢學者、漢詩人の臭氣を帯びず。これ余が先生の一面を目して、漢文學の骨髓を身得せる日本男子と云ふ所以也。然り、日本の眞男子也。支那化せるにあらざる也。

今、梅窓一朵の中より二三の例を摘出せむに、まづ梅を咏じて、

清白美人態、外柔而内剛、若比漢三傑、梅花是子房、

これ所謂夫子自ら道ふもの也。先生、梅を愛す。梅窓の號ある所以にして、梅を咏せる詩歌、従つて少なからず。

鐵骨氷心長養眞、一枝斜處更無塵、寒香僅々兩三點、先占東風萬里春、

鐵骨氷心、花にありては、之を梅に見、人にありては、之を先生に見る。友を弔ひて、

正是秋風搖落時、挽歌唱罷立殘暉、九泉知己若相問、爲報人間道日非、

白頭猶未伴閑鷗、直溯長江千里流、王霸興亡懷建業、英雄勝敗歎荊州、一聲杜宇

月昏夕、四境平原麥秀秋、禹域今朝窺半面、新添内外幾多愁、

の如きは、管に先生の志を見るのみならず、先生の詞藻の美しきをも見る。近江聖人の中江藤



樹を祭れる文の中に、

聖人或可レ追、後進非レ無欲ニ企及一者上矣、

の言あり。先生の自から任ずる所、大なる哉。近江商人の名のみ高き地に、先生の如き人物を出せるは、性靈の感應に非ずとせむや。

梅窓一朶一篇、すべてこれ國を思ひ、道に盡し、友を惜み、義人を慕ひ、才を愛し、人を憐むの言也。數年間、死に垂んとせる苦境にありても、毫も窮愁悲哀の言なし。而かも道學先生的に乾燥無味なるにも非ず。先生の人格、仰けば仰ぐほど高きを覺ゆる也。

### 悪源太

平治元年十二月二十七日、平氏の方にては、清盛の嫡子重盛、大將となりて來り攻む。部下を勵まして云ふ、「年は平治也。地は平安也。われは平氏也。平の字三つまで揃へり。亂賊を平けむ事、疑あるべからず。」其兵三千、三手にわけて、御所東方、陽明、待賢、郁芳の三門におしよす。

御所の中にては、三方をふせぎ、東の一方の三門を守る。中には、源氏の白旗翻り、外には平氏の赤旗翻りて、寒風吹きすさぶ冬の空をかざれり。赤旗漸く近よりて、三千の兵、一時にどつと関の聲をあけ、天地も震動せむばかり也。

謀主の信頼、體ばかりは大なれども、膽は豆よりも小也。この攻めよする関の聲に、心まづ臆して、南階を下る足元、ぶる／＼ふるひて、顔色青ざめたるぞ見苦しき。さて、馬に乗らむとするに、馬は、はやりきつたる逸物、舍人七八人寄つてたかつて之をおさへたるも、信頼なほ乗りがねて、た、すめり。侍士二人して之をおし上ぐ。その力や餘りけむ、大兵の信頼、馬の彼方にどうとうつぶけに落ち、う、とばかり呻りて、自から起つ能はず。扶け起して見れば、顔一面に砂つき、鼻血流れて淋漓たり。厄介なる大將かな。義朝之を見て、「あの信頼と云ふ不覺人は臆したりな。」と一喝して、郁芳門に向へり。信頼もやうやくの事にて、馬にのせられて待賢門に向ひしが、物の役に立つべしとも見えざりき。

重盛五百騎ひきつれて待賢門に向ひ、大音あけて、「この門の大將は、信頼卿と見たるは僻目か。斯く申すは、桓武天皇の苗裔大宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三。」と名乗れども、

信頼は一言の返事にも及ばず、「これ防げ、侍士ども。」とて、にけゆけり、大將にけたれば、士卒われも／＼とにけゆけり。我が國古來戰爭多かりしかど、未だかばかり卑怯なる舉動を見ず。防ぐ兵なければ、重盛やす／＼と門を入りて、大庭の棟の本までおしよせたり。義朝、これを見て「信頼と云ふ大臆病人が待賢門の守を失ひつるぞ。悪源太早く往いて、敵を追ひ出せ。」と呼ば、れば、聲に應じて、かけゆく。功名をあらはすは、こゝなりと思ひけむ、鎌田、佐々木、三浦、齋藤、熊谷、平山等、一騎當千の武者十七騎相並んで馳せ向ふ。義平、其日のいでたちは、練色の魚陵の直垂に、八龍とて、胸板に龍を八つ打つて附けたる鎧を着て、高角の冑の緒を締め、石切といふ太刀を佩き、石打の矢負ひ、滋藤の弓持ちて、鹿毛なる馬の逸り切つたるに鏡鞍おかせたり。敵の大將重盛は、赤地錦の直垂に、楯の匂ひの鐵、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締め、小鳥といふ太刀を佩き、切り文の矢負ひ、弓持ちて、黄桃花毛なる馬に、柳櫻摺りたる具鞍置かせて、打乗れり。義平、敵に向つて、遙に名乗るやう、「この手の大將は誰人ぞ。斯く申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、悪源太と申す者也。當年取つて十九歳、見參せむ。」とて、主従わづかに十八騎、われに三十倍せる敵軍の中にわつて入り、「雜兵に目をかくるな。たゞ

大將をうちとれ。」とて、重盛を目がけ、棟の木の中にて、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追ひ廻しけるが、平氏の軍かなはじと思ひけむ、大宮表をさして、ひきしりぞけり。重盛の弓杖ついて休める様を見て、筑後守家貞感歎して曰く、「平將軍の再生し給まふかと思はる。」と斯くおだてられて、重盛のり氣になり、新手の五百騎つれて、またも攻め入る。悪源太之を見て、「今度向ひたるは新手なれども、大將はもとの重盛なり。以前こそ討もらしたれども、今度は必ず討取れ。」と下知して、激しく接戦しけるが、悪源太、弓を小脇にかいばさみ、鎧ふんばりて突立ちあがり、左右の手をひろけて、遙に重盛に向ひ、「われは源氏の嫡子也。御邊は平家の嫡子也。いざ雌雄を決せむ。」といふ。されど、重盛、智勇兼備の良將なれど、一騎討ちの勇力は、悪源太の敵に非ず。棟の木の下の下をまたも五六度も追ひまはされて、終にかなはじとて、大宮表さして退出せり。

悪源太も、二度の激戦に少しつかれたれば、馬をとめて休みけるに、義朝、須藤瀧口をして言はしめける、「不覺に防げばこそ、敵はたび／＼攻め入るなれ。とく／＼追ひ出せ。」あ、わづかに十七騎にて、五百騎を二度までも破りたるは、此上もなき働なるに、敵をして、一步も入ら

しむるなかれとは、頗る無理なる註文哉。悪源太父の言を聞いて、「承知いたせり。」とて、十七騎率ゐて、門を出でて五百騎の中に突進す。平氏の弱きにあらず、源氏の強き也。五百の兵、蜘蛛の子をちらす如く四散し、重盛は主従三騎となりて、二條を東に走る。其従者は、與三左衛門景安と新藤左衛門家泰との二人也。悪源太、鎌田と共に二人之を追ふ。堀河にて追ひつめしが、あやにくや、悪源太の乗れる馬、路傍につみかさねたる材木に驚き、小膝をりて倒れ伏す。鎌田、二度まで重盛を射たれども、鎧がたくして通らず。悪源太呼んで曰ふ、「馬を射よ」馬を射る。射られて、馬は横に倒れ、重盛も落ちて、かぶと脱けて大童となる。鎌田進んで之を討たむとす。重盛の一命、岌々乎として危い哉。かゝる處に、景安はせ來り、鎌田とひき組んで取つて押へたり。悪源太、馬を引起して馳せ來り、重盛や討たむ、鎌田や助けむと思案しけるが、重盛はまたも出逢ふことあるべし。まづ鎌田をたすけむとて、景安をさし殺す。景安は重盛幕下の剛の者也。「景安うたせて、生きて何かせむ。」とて、ひきかへさむとすれば、家泰之をとめて、我が馬をさしむけて、乗つて走らしめ、進んで悪源太と組む。鎌田は重盛に組まうとしけるが、主人をうたせては叶はじとて、家泰に向ひ、その首をうち落せり。この隙に、重盛は漸く虎口をのがれて

六波羅におちのびたり。主に代りし景安、家泰は、骨ある忠臣也。主従互に助けあひたる悪源太鎌田は、涙ある武士也。さるにても命冥加の重盛哉。

熊谷直實

花の敦盛の首をうちて、無常を感じたりとは稗史に説ける所なるが、直實は、さる弱々しき男には非ず。直實は、頼朝に赫怒する所ありて、僧となりたる也。元來、正直にして邪氣なく、剛果勇猛にして激怒し易きは、今にても、日本男子に多く見る氣質なるが、直實の如きは、其最も甚しき者也。

頼朝、流鏑馬を鶴ヶ岡に觀しことあり。直實に命じて的を樹てしむ。直實怒つて曰く、射る者は馬に騎り、樹つる者は徒歩す。大に優秀あり。臣決して命を奉ぜずと。頼朝諭して曰く、器を擇びて事に従はしむるにて、初より優秀を付せるに非ず。且つ的を樹つるは劣者に非ず。新日吉祭御幸の時、的を樹つるは、瀧口本所の家也。是則ち樹つる者は射る者よりも貴きにあらずや。

今、其故實に従ふ。汝、拒むこと莫れと。直實固く従はず。頼朝怒つて其邑を削り。こは非難すべき點もあれど、ともかくも、利害損得の念を離れて、さすがに日本一の勇者とは云はるべき剛骨は見ゆる也。

直實は、久下直光と領地の界を争へり。建久三年十一月二十五日、頼朝二人を召して對決せしむ。而して頼朝は、直實を詰問すること頻也。直實、例の短氣の一徹、大に怒つて曰く、梶原景時、直光と結托して、豫て御前を取繕へるならむ。さればこそ、わればかり頻りに御下問にあづかるなれ。斯くて、御成敗あらば、直光は眉を開くべし。この上は、證據書類も用なしとて、書類を悉く御壺の中に投げ入れて座を起てり。なほ忿怒に堪へず、西侍にて、自ら刀を取りて髪を除ひ、大に頼朝を罵つて走り出で、家には歸らず、その儘、逐電す。頼朝驚くこと一方ならず。西に奔れりと聞き、沿道に令して之を遮り、其遁世を止めむとしたれど、果さざりき。

直實、京師に至り、新黒谷の法然上人に投じて、その弟子となり、名を蓮生と改めたり。英雄首を回せば即ち神仙、直實僧となりてより三年、建久六年八月十日、忽然として鎌倉にあらはる。これ頼朝が始めて入朝して鎌倉に歸り着きてより、凡そ一箇月経たるほど也。さきに將

軍御在京の間、思ふ所あるによりて拜謁せざりき。今や千里を遠しとせずして來りて素懐を述べむと欲すと言入れて、頼朝に對面す。まづ厭離穢土、欣求淨土の旨趣を言ひ、次に兵法の用意、干戈の故實を説く。一面は聖者、他の一面は名將、いづれも言到り理盡せるに、頼朝を始め、聞く者みな感歎せざるは無し。説き終りて直に武藏をさして行けり。頼朝興に入りて、頻りにとゞめたれど、後日重ねて参らむとて、之を辭したりき。

直實は自から死期を知り、之を子の直家に報す。承元二年九月三日、直家鎌倉を發す。さても不思議なる事かなとて、鎌倉中、或は信じ、或は疑ひけるが、獨り大江廣元曰く、豫ねて死期を知るは、權化の者に非ずんば疑ふべきに似たれども、彼の入道は、世塵を遁れてより後、淨土を欣求し、所願堅固にして、念佛修行の薰修を積めり。仰いで信すべきかと。

果して其言の如くなりき。承元二年九月十四日未の刻は、直實終焉の由知られければ、結縁の道俗、東山の草庵を圍繞して見物す。時刻近づきければ、直實、衣袈裟を着け、禮盤に上り、端坐合掌して、高聲に念佛を唱ふる程に、自から息絶えたり。日頃、少しも病氣はあらざりき。嗚呼直實も亦絶代の快男子にあらずや。